ローマ人への手紙 1 章(8 / 4 / 9 6) 「救いを得させる神の力」(Romans1:16) ローマ人への手紙 1 章 1 6 節 # 8 6 2 8

交読文:詩篇51篇

聖書通読の学びがローマ人への手紙に入り、とてもワクワクしています。私が人生の中で全く新しい次元で神との関係に入ることができるように、この書物を神が用いてくださいました。ローマ人への手紙を学んで、私の人生は大きく変えられました。とてつもない神の恵みを発見しました。自分の行ないや自分の義によるのではなく、私の代わりにして下さった神の働きによって、神との関係を持つことができることがわかりました。ですから、みなさんとローマ人への手紙の学びができることにワクワクしています。私たちは聖書通読の学びをしていますが、これまであまり熱心に聖書をお読みにならなかった方も、ローマ人への手紙を深く読んでいくことを強くお勧めします。どうか神のみことばがみなさんの内で働くようにしてください。きっと働くでしょう。保証できます。私たちといっしょにローマ人への手紙を学んでくださるなら、ローマ書の学びを通して、みなが祝福を受け、益になるでしょう。このすばらしい書物を学び始めますが、今晩は1章です。いっしょに学び、神が私たちにどのようなことをして下さるのか見てゆきましょう。

今朝は1章16節に注目してください。パウロは、ローマに行く願いを告げていまし た。これはずっと前からの願いでした。何度もローマへ行こうと努力しましたが、いつも 何かがあって行けませんでした。パウロは、来て、御霊の賜物をとおして祝福をいくらか でも分け与えたいと望んでいました(1:1] 参照)。また、ローマにいる人々に福音を伝えた いと望んでいました(1:15参照)。と言いますのも、パウロは16節でこのように述べてい るからです。「私はメシヤの福音を恥とは思いません(訳者注:英語を文字通り翻訳)。福 音は、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神 の力です。」 1 章というか、 1 章 1 節に戻ると、パウロはローマ書の主題を紹介していま す。ローマ人への手紙の主題は、神の良い知らせです。これは、人への神の良い知らせで す。パウロは1節で、「神の福音のために選び分けられ」と告げています。と言うのも、 福音は、「よい知らせ」という意味だからです。確かに、私たちは今日よい知らせが必要 です。夜10時のニュースで、「今晩これからこのような悲劇をお伝えします。」とか、 「このような恐ろしいことがあったことをお伝えします。」とか言うのに気づかれると思 います。私たちの住んでいる世界は恐ろしい世界です。つい先週も、ショッキングな事件 がありました。わずか12歳の少年が、先週の日曜日の夜、教会から戻ってきた80歳の 祖母を射殺しました。理由は、この人の息子が子供たちに、なぜ空き家に火をつけたのか と、詰問したというだけの理由です。これは後でわかったことですが、家に火をつけた理 由は、この12歳の少年が暴力団による13歳の少女の集団暴行に荷担し、証拠湮滅のた め、家の中にこの少女を縛ったままにして、家を焼こうとしたのです。恐ろしいことで す。これが主要ニュースで、その後にはまた別のひどい事件の報道が続きました。悲劇、 悪、暴力に満ちた世界において、神は良い知らせを持っておられます。神の良い知らせで す。

パウロは2節で、この良い知らせは、私たちの主、御子イエス・キリストに関することだと述べています。イエスが、良い知らせです。イエスは、その預言者たちを通して、聖書において前から約束され、御子は肉によればダビデの子孫として生まれ、御霊によれば、神からの方として証明されました(1:2-3参照) 。イザヤ書には、次ように預言されています。「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。ひとりの男の子が、私たちに与えられる。主権はその肩にあり、その名は、『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平

和の君と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着い て、」この方は、預言者たちの聖書によると、ダビデの子でした。「ダビデの王座に着い て、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今より、 とこしえまで。(イザヤ9:6-7)」エレミヤは言いました。「見よ。その日が来る。-(あるいはエホバ)の御告げ。- その日、わたしは、ダビデに一つの正しい若枝を起こ す。彼は王となって治め、栄えて、この国に公義と正義を行なう。(エレミヤ23:5)」今日 の地球に、公義と正義が、神の約束された義なる方が、非常に必要とされています。良い 知らせとは、イエスが来られたことと、再び来られて神の御国を立ててくださることで す。御使いがマリアに、メシヤを世にもたらす器として彼女を神がお定めになったと告知 したとき、御使いは生まれてくる子について、「その子はすぐれた者となり、いと高き方 の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼 はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。(ルカ1:32-33)」と 言いました。これは、何たる良い知らせなのでしょう。神は、預言者を通して約束された ことを守って下さいました。メシヤは来られました。この方によって、神は人に救いをお 与えになりました。それでパウロは、「私はメシヤの福音を恥とは思いません。それは、 信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力だからです。(1:16参照)」と言ったの です。

イエスは、その復活によって、他の制度化された宗教の創始者とは全く異って、きわ だったところに位置しておられます。イエスは、「死者の中からの復活により、大能に よって公に神の御子として示された方(1:4) 」だとパウロは言いました。これがローマ人へ の手紙のテーマです。良い知らせです。罪を犯している人間に対して、神の恵みとあわれ みがあるという良い知らせです。この1章でパウロは、全世界が神のさばきに服している ことを示しています。2章では、異邦人もユダヤ人と同じように罪を犯し、またユダヤ人 も異邦人と同じく罪を犯し、そこには違いがないこと。また、すべての人は罪を犯したの で、神からの栄誉を受けることができないこと。義人はいない、ひとりもいないことを示 しています。3章では、神の恵みのゆえに、イエスを信じる信仰によって、みなが義と認 められるように神が備えてくださったことを教えています。4章では、信仰による義認の 原則がはるかアブラハムにさかのぼることを示しています。 5 章では、信仰による義認の 結果について教えています。6章では、罪の力から救い出される原則が私たちに働いてい ることを告げています。7章では、自分を改善することは不可能であることを教えていま す。8章では、神が聖霊を備えられて、私たちを愛するキリストによって、私たちが圧倒 的な勝利者になることができることを話しています。9章では、神から受け取るのは信仰 によることを示し、従って、異邦人は神の義を信仰によって追い求めたので、それを得ま した。それに対し、ユダヤ人は律法によって追い求めたので、神の義を得ませんでした。 なぜなら、神の義は私たちの行ないや努力によって得られるものではなくて、イエス・キ リストによる神の賜物だからです。10章は、ユダヤ人も異邦人も、イエス・キリストを 通して神のところに来なければならないことを教えています。ユダヤ人であれ異邦人であ れ、主の御名を呼び求める者は、だれでも救われるのです。11章は、神が備えられたイ エス・キリストの福音に対して、ユダヤ人のほとんどの目が開かれていないこと、けれど も、・・・異邦人が・・・今どこにいますか、12章ですね。人には改革が必要であるこ と、自分が変わらなければならないことが示されています。13章には、従順と愛は、御 霊の新しいいのちの実であることがあります。愛することによって律法を全うします。愛 する者は、律法を完全に守っているのです。14章で、その例が示されています。それ は、弱い兄弟に対して愛のうちに歩むとはどういうことかということです。15章ではま とめが書かれていて、16章は個人的なあいさつです。ローマ人への手紙を注意深く読み

進めていただきたいのです。そして、それぞれの章で最も重要だと思う節に下線を引いてください。それらの節を通して、あなたに真に語りかけてくるのは何か、神があなたに語りかけて下さっているのは何か、あなたにとってどういう意味なのか、書き留めてみて下さい。とても役に立つと思います。ローマ人への手紙を理解するのに役に立ちます。

パウロは、「私はメシヤの良い知らせを恥とは思いません。」と言っています。パウロ は、若い頃は、自分が生粋のパリサイ人だと言いました。ユダヤ人で、ベニヤミンの分か れであると言いました。そして、律法によれば、神のことについて非常に熱心でした。独 善的に達成したことはすべて、イエス・キリストを知っていることのすばらしさのゆえ に、喜んで捨てたと述べています。そしてそれらをちりあくたと考えました。それは、キ リストを知りたい、キリストの中にある者となりたいと願ったからでした。それは、律法 による自分の義ではなく、キリストを信じる信仰による義を持つことでした(ピリピ3:5 -9)。パウロは、律法によって正しくなろうと努力し、私たちも律法によって正しくとなろ うとしますが、理想のところまで十分に達していない意識が内側にあるのです。神が私に 望んでおられる者にまでは至っていません。そして、次の章でパウロは、「すべての人 は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず(ローマ3:23) 」と述べていま す。今朝ここにおられる方、みなさんがどのような方であれ、最も感じのよい人でも、最 も優しい人でも、最も親切な人でも、最も霊的な人でも、すばらしい人でも、誰でもよい のですが、もちろん私ではありませんが、どのような人でも、神からの栄誉を受けること ができないのです。神が私たちに達成し、到達するように言われているすべてに、達成す ること到達することができていません。ですから、自分は不十分だという意識がありま す。面白いのは、神に近づけば近づくほど、自分の不十分さに気づくようになります。自 分で何でもわかっていると思っている人ほど、一般的に言ってよくわかっていない人であ るようなものです。もっと知れば、自分がどれだけわかっていないかを知るからです。自 分がどれだけ知らないかが、まだ十分わかっていないのです。シェークスピアが、「人 よ。ああかわいそうな人よ。自分が最もわかっていると思っていることにあまりにも無知 な人は。(訳者注:「尺には尺を」からの引用。訳は訳者が英語から訳したもの。)」と 語ったとおりです。もし、自分がいみじくも知っていると思うのであれば、まだ自分がど れだけ無知か気づいていないのです。義についても同じことが言えます。独善的な義があ ります。しかし、イエスに近づけばそれだけ、罪と不義の性質と性格に気づくのです。で すから、パウロは正しくなろうと努力し、自分のうちにある罪に気づきました。ローマ書 7章の中でパウロは、「私は自分で認めないことをし、かえってやるべきであるとわかっ ていることをしていない。私は自分が行なっていることを憎んでいます。私は私の肉のう ちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがあるのに、それ を実行することがないからです。私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえっ て、したくない悪を行なっています。私は善をしていと願っているのですが、その私に悪 が宿っているという原理を見出だすのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。私に は、誰か救い出してくれる方が必要です。(ローマ7:15-23参照)」と言いました。「私 は、ほんとうにみじめな人間です。」ああ、何たる叫びでしょうか。「だれが私を救い出 してくれるのでしょうか。」さてパウロは、イエス・キリストを知っていることのすばら しさを発見しました。私たちに伝えてくれている、ローマ書の良い知らせをパウロは発見 しました。それは、パウロの神との関係を変えた良い知らせ、私の神との関係を変えた良 い知らせ、そして、私たちが学べば、みなさんの神との関係を変える良い知らせになれば と望んでいます。パウロが、「私はメシヤのよい知らせを恥とは思いません。」と言って いるのは、無理もありません。それは、救いを得させる神の力です。このため、パウロ は、聞く人すべてにこの良い知らせを喜んで伝えたのです。

人生を変える力を考えますと、あたりを見回しますと、このイエス・キリストの良い知 らせによって人生を変えられた人を何千人も見ることができます。かつては罪につながれ て絶望的でした。破滅に向かっていました。しかしながら、神がもたらされた変化を見ま すと、この良い知らせが実に、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力である ことに気づきます。イエスは、私たちを自分の罪の束縛から解放してくださいます。麻薬 中毒や、アルコール依存症、ポルノ、その他の悪い世的な悪癖でひっかき回され、束縛さ れていたところから解放して下さいます。救いを得させるすばらしい神の力です。しか し、救いを得させる神の力を考えるときに、罪からの救いという積極的な恩恵だけでな く、罪人に対して啓示される神のさばきからの救いもあります。2章というか、確か1章 でしたね。もう少しいった18節のところですが、「不義をもって真理をはばんでいる 人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。」と 述べられています。私たちはそれぞれ、神と関係を持つための義の道があります。神は、 私がどのように関係を持つべきかを示されました。神は一枚目の律法の石の板に、神との 関係の規則を設けられました。これらの規則に違反することは、不敬虔になります。また 神は、私がみなさんとどのような関係を持つべきか、規則を設けられました。二枚目の律 法の石の板に、私たちの互いの関係の規則があります。この一つでも違反することは、不 義になります。「不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対し て、神の怒りが天から啓示されているからです。」一枚目の律法の石の板ですが、出エジ プト記20章で、神はこのように言われました。「それから神はこれらのことばを、こと ごとく告げて仰せられた。『わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出し た、あなたの神、主(エホバ)である。あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があっ てはならない。あなたは自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるもので も、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはなら ない。それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわ たしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、 わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。あなた は、あなたの神、主(エホバ)の御名をみだりに唱えてはならない。主(エホバ)は、御 名をみだりに唱える者を、無罪にはしておかない。安息日を覚えて、これを聖なる日とせ よ。』(出エジプト記20:1-8)」これが、一枚目の律法の石の板です。これに、違反するこ とは、不敬虔でした。二枚目の律法の石の板です。「あなたの父と母を敬え。あなたの 神、主(エホバ)が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。殺 してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。あなたの隣人に対し、偽りの 証言をしてはならない。あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、 あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがっては ならない。(出エジプト記20:12-17)」また聖書は、「律法全体を守っても、一つの点でつ まずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。(ヤコブ2:10) 」と教えていま す。

神が律法によって正義の規則を設けられましたが、人は、それらを守れば正しくなれると考えて大きな間違いを犯しました。「律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。(ローマ3:20)」と聖書は教えています。律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったからです。律法は、私たちが守れば正しくなる基準として、神が設けられたものではありません。律法は、神の要求する義に私たちが到達しえないことを示すために、神が設けられ、定められたものです。律法は、全世界が神のさばきに服するようになるために、自分が神に対して罪を犯したことを悟らせるために定められたのです。それでパウロのように、助けを叫び求めるの

です。「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれが・・・私を救い出してくれるので しょうか。(ローマ7:24) 」これが、律法が本当にあなたの心の中で働いた状態です。これ が律法の影響力です。「私は、姦淫をしていないし、これこれはしていない。」というも のではありません。これでは、パリサイ人が自分がいかに正しいかを神に申し上げたのと 同じです(ルカ18:9-14参照)。けれどもイエスは、「もしあなたがたの義が、律法学者や パリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいれませ ん。(マタイ5:20)」と言われたのです。彼らは、律法を守り行なおうとしましたが、自分 が守っていると感じることができるように、律法を解釈しました。そのため、ひとりよが りで独善的になり、少しでも自分らが行なっているように行なっていないなら、その人た ちをみな見下げてさばいていました。けれども、律法によっては、かえって罪の意識が生 じるのです(ローマ3:20)。律法は、あなたを義とすることはできません。これが、彼らが 犯していた大きな間違いです。パウロは、律法によって正しくなろうとして、「私は、ほ んとうにみじめな人間です。」というような挫折を味わいました。しかし、神はまさにこ のことを意図されていたのです。すなわち、自分は助けが必要なことを悟ることです。 「だれが、私を救い出してくれるのでしょうか。」良い知らせは、神が私の肉から、肉の 縄目から、肉の欲望から救い出してくださることです。イエス・キリストにあって、イエ ス・キリストによって救い出されます。これが、福音の良い知らせです。パウロは、「良 い知らせのために選び分けられ、私は福音を恥とは思いません。これは、信じる人すべて の人にとって、救いを得させる神の力です。 (ローマ1:1、16参照)」と言いました。後の 章でパウロは、「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず(3: 23)」「罪から来る報酬は死です。(6:23)」と教えています。けれども良い知らせは、神が私 たちのために、神のさばきから脱出する道を備えてくださったことです。これは、イエ ス・キリストを信じる信仰によって義と認められる道です。これが、ローマ人への手紙の 学びで主題になります。

これは、信じる者すべてに与えられます。神は、救いを地球上のすべての人に備えられ ました。神は、すべての人に罪の赦しを提供しておられます。信じる者すべてに咎の赦し を与えられます。かつて、何年も前に教会で、「『ひとりとして』は、確かに私にも当て はまる("whosoever" surely meaneth me) 」という歌を歌っていました。これは救いの備え です。「信じる者が、ひとりとして滅びることなく(ヨハネ3:16)」それで、「『ひとりと して』は、確かに私にも当てはまる。」と歌ったものです。私たちは、4人の子供を育て ました。子供たちは、よく友達を家に連れてきていました。何かが壊されたり、物が元の 場所に戻されていないときにはいつも、「誰がやったの?誰が壊したの?」と質問がでま した。多くの場合は、誰も非を認めませんでした。それで私たちは、「じゃあ、本当は壊 れていない。粉々になっていないんだ。誰もやっていないなら、じゃあなぜ粉々になって いるのか。」と言いました。「誰がやったの?」と言って、誰かを非難しようとしていま した。しかし、もうケイと私だけになってしまいました。それで、ずいぶんと範囲が狭め られてしまいました。我が家には猫も犬もいませんから。ですから、ケイが、「居間のカ ペットに靴跡を残したのは誰?(訳者注:米国では外から入ってきても家の中に靴を履 いたままでいるので、靴底が汚れていると、カーペットに靴跡が残ってしまいます。)」 と言うと、私は、「『ひとりとして』は、確かに私にも当てはまる。(訳者注:チャック は歌っています。)」と歌い始めました。ケイは優しいので、直接的に私に批判はしませ んが、「他に誰もいないけど、誰がやったの?」と質問します。しかし、「ひとりとし て」は、確かに私にも当てはまるのです。神は信じる者すべてに救いを提供して下さって います。

パウロは、「私は、恥とは思いません。これは、信じるすべての人にとって、救いを得

させる神の力です。」と言いました。単純にイエス・キリストに信仰を持てばよいので す。イエス・キリストを主として受け入れればよいのです。イエス・キリストに自分を明 け渡し、従わせることによって、これまでに行なったすべての悪いことに対して、義と認 められます。そして、神はあなたのイエス・キリストを信じる信仰をあなたの義と考えて くださいます。聖書は、神が全巻そろった数々の書物を保管しておられると教えています (黙示録20:12参照)。そこに、私の名前も神の書に書かれています。そこには、私が行 なった悪、あるいは悪いことがすべて書かれているのではありません。告発はすべて消さ れています。私に対する告発は一つもありません。「こういうわけで、今は、キリスト・ イエスにある者が罪に定められることは決してありません。(ローマ8:1)」これは、8章で 学びます。告発は、すべて却下されました。ですから、私の名前は義と認められた者とし て書かれています。イエス・キリストを信じる信仰によって、義と認められた者として書 かれています。神は、私を全く罪がない者として見て下さいます。義認という言葉は、あ たかも何もしなかったかのようにという意味です。そのように神は見てくださいます。過 去を指摘なさることはありません。神の赦しは完全で完璧です。過去の罪が再び蒸し返さ れることは決してありません。神に関して言えば、終わった問題です。それは、あなたが イエスを信じることにより、これまでに行なったすべての悪事や過ちから、あなたを義と 認められたからです。ですから、今日私は神の前にすばらしい立場が与えられています。 イエス・キリストを信じる信仰によって義と認められたのです。これが、パウロが世界に 伝えていた良い知らせなのです。それは、イエス・キリストに関するもので、イエス・キ リストが十字架上の死によって、みなさんと私のためにもたらして下さったものです。そ ういうわけで、ちょうどひとりの人アダムによって罪が世界にはいり、罪によって死がは いり、こうして死が全人類に広がり、私たちはみな死の宣告を受けました。しかし、ひと りの人の義によって、多くの人が義とされました。ですから、イエス・キリストの義に よって私は神の前に義と認められているのです。それは、私がイエス・キリストに信仰を 持ち、信頼しているからです。何たるすばらしい立場でしょうか。赦され、きよめられ、 免除され、すべての告発が却下されたのです。そして、私が神の前に立つとき、神は私の ことを義と認めて下さいます。それは、私のイエス・キリスト信じる信仰によるのです。

ですから、私たちがローマ人への手紙を学んでゆきますと、こういった真理がわかるようになってきます。ああ、何と私たちは祝福されることでしょう。ダビデが「幸いなことよ。そのそむきを赦され罪をおおわれた人は。(詩篇 32:1)」と宣言していますが、パウロは2章で(訳者注:4章のことか)、「主が罪を認めない人は幸いである。(ローマ4:8)」と引用しています。イエス・キリストが完成された御業を信じ、信頼する者は何と幸いな人でしょう。ローマ人への手紙を学んでいって、ダビデが語った祝福が、罪をおおわれ、そむきを赦されることの幸いが、神の恵みによりわかり、「キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」ということが、わかるようになるようにお祈りします。

ローマ人への手紙2章(8/11/96)

「神の正しいさばき」(Romans2:5) ローマ人への手紙2章5節#8629

交読文:詩篇98篇

私たちは聖書通読の学びをしていますが、ローマ2章まで来ました。この2章でパウロは、神のさばきが訪れることを話し始めています。しかし神のさばきについて、間違った考えを持っている人がたくさんいます。最も頻繁になされる質問の一つは、世界の秘境の地で原始的な生活をしていて、イエスという名前を一度も聞いたこともない人々が、神の御子による救いについて聞く機会がなかったのに、愛の神はどうしてそのような人を永遠の苦しみの地獄に引き渡すのか、というものだと思います。第一に、神が彼らを地獄に引き渡すのかどうかは、私にはわかりません。第二に、神がさばかれるときは、そのさばきが完全に正しいことを私は知っています。神は、完全に正しい方です。今朝詩篇を読んだように、公平、「公正をもって、さばかれる(98:9参照)」のです。神は、完璧に公正です。私たちが神のさばきを受けるとき、さまざまな分野、状況、生活において下るそのさばきは、私たちが、「そのとおりだ。」と言わせるようなものです。神は、完璧に公正で義なのです。

さてここの章では、再び、私たち自身がさばくことを、つまり私たちが人をさばくこと を主が禁じられています。他人をさばく特権は、私たちには与えられていません。イエス はこう言われました。「さばいてはいけません。さばかれないためです。あなたがたがさ ばくとおりに、あなたがたもさばかれ、あなたがたが量るとおりに、あなたがたも量られ るのです。(マタイ7:1-2)」つまり主は、あなたが誰かをさばくなら、実はあなた自身がさ ばかれる基準を設けてしまっているということを、おっしゃっているのです。そのため私 は、人に対して深いあわれみをかけるように努めています。私はそういう基準を設けたい のです。主は、「あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けます。(マタイ5: 7)」と言われました。けれどもとかく、私たちは他人をさばく傾向があって、聖書は厳しく さばくことを禁じているのに、他の人をさばいて罪を犯しています。ここ2章でパウロ は、他人をさばいている人は神のさばきを免れないと、ローマにいる人々に教えていま す。というのは、他人をさばきながら、同じことで自分も罪を犯しているからです。さて パウロは、人間がもはや神を知りたがろうとしないので、恐ろしいほど退廃し、堕落して いることを教えてローマ1章を終えました。神は彼らを良くない思いに引き渡され、それ で彼らは、及びもつかないような事をしています。人間が、こんな恐ろしい事をするもの かと、想像を絶します。戦争中に行なわれる虐待のことを読みます。家庭の中で、恐ろし いことが行なわれているのを聞きます。考えることさえ恐ろしいです。パウロは1章の終 りで、人間が恐ろしいほど堕落していることを描いています。「彼らは神を知ろうとした がらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、(1:28)」道徳について言えば、堕落 して、これ以上下はないという最悪の状態にまでになります。人間が行なったこと、行 なっていること、また行なう能力があるもののリストを読むと、私たちは、「これは、恐 ろしいことだ。なぜ、こんなことができるのか。」とさばいてしまいます。こうして、私 たちは非常に動揺するのです。けれどもパウロは、他人をさばく私たちは弁解の余地はあ りません、と言いました。なぜなら、他人をさばくことによって自分自身を罪に定めてい るからです。なぜなら、同じことで罪を犯していることが多いからです。ただちょっと状 況を変えて、他の状況に同じ原則を当てはめて見ればよいのです。まさにあなたが他の誰 かをさばいていることで、あなたも全く同じことをして罪を犯しているのです。

旧約聖書で、ダビデ王がバテ・シェバと恐ろしい罪を犯しました(2サムエル11、12章参

照)。彼女の夫はダビデ軍の一員で、この軍は戦争の最中でした。ダビデはバテ・シェバを 見ました。彼女はとても美しかったのです。彼は彼女に情欲を抱きました。彼女を宮殿に 招き、関係を持ちました。ダビデは、これっきりだと思いました。けれどもこれっきりで はなかったのです。間もなくしてバテ・シェバは彼に、「私はみごもりました。」という 知らせを送りました。それでダビデはこう思いました。「自分の罪を隠そう。彼女の夫が 戦場から家に帰ってくるように頼もう。家に帰ったら、きっと夜を妻を過ごすだろうか ら。そうすれば、彼女が自分がみごもっている事実を彼に明かしても、『ああ、私が家に 帰ってきたあの夜に起こったのだ。』と思うだろう。」それでダビデは、彼を呼び入れ て、戦闘や士気のことなどを聞き、「家に帰って、今夜はあなたの妻を楽しみなさい。」 と言いました。けれども、この男は王宮の門に座って、家に帰りませんでした。それで朝 にダビデは、こう言いました。「いったいどうしたというのか。あなたの愛する妻と夜を 過ごす、いい機会だったのに。門で寝たと聞いたぞ。」彼はこう言いました。「他の仲間 が最前線にいるのに、私が自分の妻と楽しむことは正しくありません。彼らは苦しみ、戦 争の苦しみを負っているのに、私はそんなことはできませんでした。仲間を裏切るような ものです。」それでダビデは、もう一度試して彼を深く酔わせ、深酔いしたら帰るだろう と思いましたが、彼は王宮の入口で眠りました。それでダビデは、・・・聖書には、「自 分の罪を隠す者は成功しない。(箴言28:13参照)」とありますが、罪を隠そうとすればそ れだけ、さらに罪に深くかかわることがよくあります。それでダビデは将軍に、「ウリヤ を激戦の真正面に出せ。戦闘が本当に激しくなったときに、彼を残して軍を退けさせなさ い。彼が打たれて、死ぬようにせよ。」という知らせを送って、卑怯なことを行ないまし た。ダビデは、姦淫の罪を隠すために、ウリヤの殺人を企てたのです。恐ろしいことで す。弁解の余地はありません。しかしダビデは、上手くいったと思いました。ウリヤが戦 場で殺されたという知らせを聞きました。それからダビデは、バテ・シェバをめとり、多 くの妻のひとりにしました。彼は、これで根底から隠すことができた、私とバテ・シェバ しか真実は知らない、と思いました。そうではありませんでした。神は真実を知っておら れるのです。神は預言者ナタンに、ダビデが行なったことについて語られました。ナタン はダビデのことろに来て、こう言いました。「ダビデよ。ある国に、非常に富んでいる男 がいました。丘陵の斜面を覆い尽くすほどの牛と羊と群れがいました。この人の隣に、非 常に貧しい男がいました。彼は、一匹の雌の小羊のほかは、何も持っていませんでした。 それは、まるで自分の子どものようでした。彼と同じテーブルで食事をし、彼のふところ で寝ました。富んでいる人のところに、ひとりの客が来ました。彼はしもべに命じて、隣 の家に行き、一匹の雌の小羊を無理やり取り上げて、それをほふり、客に食べさせるよう にしました。」ダビデは激しく怒りました。「そんなことをした男は死刑だ。」と言いま した。ナタンはダビデに、「あなたがその男です。」と言いました。状況をほんの少し変 えるだけで、ダビデは、自分のさばくさばきによって、自分自身をさばいていました。ダ ビデが、罪を犯した者なのです。

パウロは、この章の最後のほうでこう言いました。「盗むなと説きながら、自分は盗むのですか。姦淫を行なったと言って、罪に定めるのですか。聞かせてください、心の中で情欲をいだいて女を見ましたか。殺人を犯したというので、これはひどいと言ってその人をさばくかもしれません。けれども、激しく人を憎んでいますか。(ローマ2:21-22,マタイ5:28、1ヨハネ3:15参照)」イエスは、「だれでも情欲を抱いて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。(マタイ5:28)」と言われました。ですから、誰でもすべて他人をさばく人は、弁解の余地がありません。自分自身を罪に定めています。同じことを行なっているからです。神は、私たちがさばくことを禁じられています。なぜなら、私たちのさばきは基本的に誤っているからです。それは、私たちには人の動機を知ることが不可

能だからです。私たちには、証拠がすべて揃っているわけではありません。多くの場合、私たちは間違ったさばきをしてしまいますが、それは見かけでさばいて、十分な証拠がないのに結論に走るからです。そのため、私たちのさばきは、非常に誤ったものとなることがよくあるのです。それに私たちは、著名な人かどうかや、近しい関係の人かどうかによって影響されるので、さばきは誤ってしまいます。親しい友人なら赦しますが、敵なら強く断罪します。私たちはえこひいきをするからです。さて人間は、誤ったさばきをよくするので、さばくことを禁じられていますが、神がさばかれるときは、神が判断されるさばきは十分に正しいのです。5節です。「ところが、あなたは、かたくなさと悔い改めのない心のゆえに、御怒りの日、すなわち、神の正しいさばきの現われる日の御怒りを自分のために積み上げているのです。」神のみが正しくさばくことができ、従ってさばきをご自分のために留保しておられるのです。神はこう言われました。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。(ローマ12:19)」

パウロは神のさばきについて、いくつかのことを言っていますが、まず最初に3節で、 それは免れることはできないと話しました。「そのようなことをしている人々をさばきな がら、自分で同じことをしている人々よ。あなたは、自分は神のさばきを免れるとでも 思っているのですか。」あなたは、罪を犯しているのに、どうにかして、神のさばきを免 れるとでも思っているのですか。ヘブル書には、「私たちがこんなにすばらしい救いをな いがしろにしたばあい、どうしてのがれることができましょう。(2:3) 」とあります。本当 の事を言うと、あなたは免れることができないのです。私たちはみな、キリストのさばき の御座の前に立つことになるのです。さばきの日に、神の前に立つことを免れることはで きないのです。死んだ人々はみな、大きい者も、小さい者も、神の前に立つのです(黙示 20:12参照)。免れることはできません。今日、世の中にある問題で最大なものの一つに、 最高裁判所よりもさらに高等の裁判所があるということを、どうも人々は理解していない ことがあります。つまり、いつの日にか、私たちはみな、神の前でさばかれるのです。こ の世では、ごまかしが利いたかもしれませんが、神の前に立つときはごまかすことはでき ません。ここでは人をごまかせたかもしれませんが、神をごまかすことはできません。あ なたはここでは罪を上手に隠したかもしれませんが、神から隠すことはできません。神の さばきを本当に恐れなければならないと、私は思います。いつの日か、神の前に立ち、神 のさばきにあわなければならないことを悟っていれば、多くの人は、自分がしていること をしていないだろうと、私は思います。そうすれば、多くの教会の奉仕者は、自分のして いることをしなくなるでしょう。手紙を送って、人をごまかすようなことをし、人を食い 物にしていますが(2ペテロ2:3参照)、神の前でさばかれる日がいつか来ることを信じてい ないに違いありません。何でこんなことができるのか、私には理解できません。なぜな ら、私たちはみな神の前に立つことになるからです。神のさばきを免れることはできませ

二番目は2節にありますが、神のさばきは真実に従っている(according to truth)ことです。 2節です。「神のさばきは正しい(judgement of God will be according to truth)」と告げられています。「私たちは、・・・神のさばきは正しいことを知っています。」今日裁判所の出す判決(judgement)の多くは、必ずしも真実に従っているわけではありません。最近、何年間も刑務所に入れられていた人々の記事を読みます。ある人は、自分が犯していない罪のために、17年間刑務所にいました。自分が犯さなかった罪のために17年間刑務所にいた人に、どんな損害賠償を支払えばいいのかを検討していることが書かれていました。もし十分お金があれば、精神科医の専門家証人を雇って、あなたが限定能力の下にいて行動し、恵まれない家庭で育ったと証言させることができます。子供として必要な多くのものに恵まれず、それによって制しがたい衝動が起こり、銀行強盗した。だから彼の罪は赦さ

れるべきだと証言させるのです。あるいは、科学者の専門家証人を雇い、血液標本から採られたDNAは、必ずしも信頼できるものではないと証言させることができます(訳者注: O.J. シンプソン裁判をほのめかしています。DNA鑑定でO.J. の血液が現場で発見されました。)。何に対しても証言する道徳の欠如した人々がいるので、真実をつきとめるのは、困難なことがよくあるのです。

何年も前に、リバーサイド・ドライブ沿いにグレンデールの地域を運転していました。 それは4車線の高速道路だったのですが、ある車が中央分離帯を越えて私のところに向 かってきたのです。私は、「これじゃ正面衝突する。居眠り運転だろう。」と思いまし た。それから、こちら側の2車線を横切りつづけたので、私のちょうど右前にいた婦人の 車と衝突しました。私は避けることができたので、衝突に巻き込まれないで済みました。 私はその婦人の車の方に走って行きました。車に何人か子供がいたのです。全員無事だと わかりました。それで私は土手のところに降りて行きました。その人の車が土手に落ちて いって、乗馬道に乗り上げたからです。降りてみると、彼も無事でした。それで私は戻っ て、自分の名刺を婦人に渡して、保険会社に私のところに連絡させたいなら、喜んで証言 します、彼女のために用紙にも記入しますと伝えました。私はさらに警察を呼んで、その 場から立ち去りました。私は保険会社から用紙を受け取り、記入してから返送しました。 およそ一年後に、私は保険会社の弁護士から電話を受け取りました。彼は事故について覚 えているかなど聞いてきましたが、私は、ええ、覚えていますと答えました。そして彼は こう言いました。「この男は、この婦人が中央分離帯を越えて、反対側の道路で自分に衝 突したと主張しています。それで告訴しているのです。」私は、信じられないね、と言い ました。彼は、「他の証人はすべて、この州から出ていってしまって、残されているのは あなただけなのです。あなたの側の話をしてくださいますか。」と言いました。私は、も ちろんです、と言いました。それで、反対側の弁護士と保険会社の弁護士との事前会合が ありました。反対側の弁護士は、「この男は警官だ。嘘なんかつかない。」と言いまし た。私のというか、保険会社の弁護士は、「この人は牧師です。嘘はつきません。」と言 いました。それで彼らは、公判の日を定めました。この男は、「彼女が中央分離帯を乗り 越えて、私の方の車線で彼女が衝突した。」と言っていたわけですが、実際は彼女の方が 自分の車線の内側にいたのです。けれども彼は出廷し、それについて宣誓証言しようとし たのです。それで公判の日が定められました。全員が出廷し、弁護士らは私が出てきたの を見ました。彼は婦人の証言に対し、男の証言を戦わせればよいだけだと思っていまし た。婦人は欠格者と宣告されると考えていました。なぜなら、彼女はこの男がしたと言 い、この男は彼女がしたと言っているのだから、裁判所はどうやって知りえようか、と 思ったわけです。しかし、私がこの事件に関して偏見のない第三者の証人として出廷した のを見ました。私は、起こった事を言うつもりでした。それで彼は、「廊下の弁護士のと ころに来てください。」と言って、廊下で和解することにしました。けれども、彼らは嘘 をつくために、出廷しようとしたのです。裁判所は、どうやって真実を突き止めることが できるでしょうか。対立した証言があるのですから、裁判所はわかりえようがありませ

しかし、神のさばきは真実に従ったものです。なぜなら、神はご存じだからです。聖書には、「すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。(ヘブル4:13)」とあります。神から隠れることはできないのです。ですから、神のさばきは、真実に従ったものです。もしあなたが神を信じていないなら、道徳の基準や信念の基盤がないわけです。これが、私たちが今住んでいる世の中なのです。道徳相対主義です。「時には、嘘が良いこともある。良い目的に働くかもしれない。」と人は思っています。こうした道徳観はみな、「どう感じますか。自分が感じているもの、自分が真実

だと思うもの、自分が真実にしているものが、真実なのだ。」と言うものです。普遍的な真理はなく、普遍的な善はなく、すべてが、どう感じているかに左右されるのです。ノアの時代には、「人の心に計ることが、悪いことだけに傾いていました(創世6:5参照)。」と書かれています。めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていました。これは、今日見る道徳相対主義と同じものです。人々は、自分勝手なことを行なっているのです。普遍的な道徳の基準を否定しています。その結果は、必然的に社会の混沌です。社会は崩壊してしまします。なぜなら、道徳を基盤としてしか、社会は成り立たないからです。道徳的な基準を持たなければいけません。さもないと、社会を維持することはできません。従って、私たちは今日、社会が崩壊するのを見るのです。それは、真の道徳的価観が欠如しているからです。ちょうどノアの時のように、道徳の基準がなかったために、世界に広まっていた悪によって、必然的に神によって洪水のさばきが下りました。ですから、今日の社会の混沌と悪のために、必然的に神のさばきが下ります。聖書は、このさばきが来ることを保証しています。そしてそれが来るとき、そのさばきは正しく、真理に従っていると教えています。イエスは、「人の子が来るのは、ちょうど、ノアの日のようだからです。(マタイ24:37)」と言われました。私たちは、今の世界にその条件を見ています。

神のさばきは、真理に従ったものだけではなく、5節で読んだように、神のさばきは正 しいのです。6節には、「神は、ひとりひとりに、その人の行ないに従って報いをお与え になります。」とあります。神は公正です。すべての人がさばかれて、神はおのおのの行 ないに従って報いを与えられます。「忍耐をもって善を行ない、栄光と誉れと不滅のもの とを求める者には、永遠のいのちを与え、党派心を持ち、真理に従わないで不義に従う者 には、怒りと憤りを下されるのです。患難と苦悩とは、ユダヤ人をはじめギリシャ人に も、悪を行なうすべての者の上に下り、栄光と誉れと平安は、ユダヤ人をはじめギリシャ 人にも、善を行なうすべての者の上にあります。(3:7-10)」イエスが、黙示録2章と3章で 教会に話されたときに、「あなたの行ないを知っている。」というぐさっとくる言葉を話 されました。あなたは神から隠れていないのです。あなたの心をご存じです。神に悪い行 ないを隠すことはできません。人に対しては上手に隠せるかもしれませんが、神はすべて を見ておられます。神はノアの時に、人の心に計ることを見ておられました。ダビデはソ ロモンに、「主はすべての人の心を探り、すべての思いの向かうところを読み取られるか らである。(1歴代28:9) 」と言いました。ダビデは、「神は心の秘密を知っておられるから です。(詩篇44:21) 」と言いました。箴言には、「主の御目はどこにでもあり、善人と悪 人とを見張っておられる。(15:3)」とあります。パウロはコリント人に、「主は、やみの中 に隠れた事も明るみに出し、心のはかりごとも明かにされます。(1コリント4:5)」と教えま した。神はあるとき、預言者エゼキエルに壁の幻を見せられました(エゼキエル8章参照) 。神は、「壁に穴を開けよ。」と仰せられました。エゼキエルは壁に穴を開けると、神 は、「入りなさい。」と言われたので、エゼキエルは入りました。その部屋にはいって見 回すと、その壁にあったものは実に汚れたポルノでした。神はエゼキエルに仰せられまし た。「エゼキエルよ。わたしは、この国の指導者の思いを見せているのだ。彼らが考えて いるのは、こういうことなのだ。あらゆる汚れと悪を見よ。これらが、彼らの思いの中に あるのだ。」神は、あなたの思い、考え、計りに何があるかを知っておられます。あなた の思いを、神は見ておられ、知っておられます。そして神は見ておられ、知っておられる ので、さばかれるときは、それは真実に従ったものであり、正義に従ったものです。黙示 録16章では、神が七つの御使いに、神の怒りの鉢を、地にぶちまけるよう命じられまし た。第三の御使いが鉢をぶちまけますが、「川と水の源にぶちまけた。」とあります。こ の水の源は、真水の供給源です。この御使いがぶちまけたら、それらは血になりました。

「私は、御使いがこう言うのを聞いた。『常にいまし、昔います聖なる方。あなたは正し い方です。なぜならあなたは、このようなさばきをなさったからです。』」つまり、 「よーし、いいぞ。正義だ。このさばきは、すばらしい。あなたは正しい方です。」と 言っているのです。なぜなら次の通りです。「彼らは聖徒たちや預言者たちの血を流しま したが、あなたは、その血を彼らに飲ませました。彼らは、そうされるにふさわしい者た ちです。」「また私は、祭壇がこう言うのを聞いた。『しかり。主よ。万物の支配者であ る神よ。あなたのさばきは真実な、正しいさばきです。」誰も、公正な裁判を受けること はできなかった、と言うことはできません。誰も神に対して、あなたは公正ではなかっ た、と言うことはできません。神は、すべての人をその行ないに従ってさばき、正義を もってさばかれます。 神のさばきは、全くかたよりがありません。なぜなら11節に、 「神にはえこひいきなどはないからです。」とあるからです。「私はアメリカ合衆国の大 統領だった。」と言う人がいるかもしれませんが、神は、「だから何だ?」と言われるで しょう。「私はローマ教皇でした。」「だから何だ。」神に好印象を与えることはできま せん。誰々はこういう人だった、こういうことを行なったと言って、誰も神を感心させる ことはできないのです。申命記10章17節には、こうあります。「あなたがたの神、主 は、神の神、主の主、偉大で、力があり、恐ろしい神。かたよって愛することなく、わい ろを取らず」とあります。金を払って、神のさばきを免れることはできません。次は歴代 誌第二19:7です。「今、主への恐れがあなたがたにあるように。忠実に行ないなさ い。私たちの神、主には、不正も、えこひいきも、わいろを取ることもないからです。」 ヨブ記でヨブの友人のエリフは、こう言いました。「いったい公義を憎む者が、治めるこ とができようか。正しく力ある方を、あなたは罪に定めることができようか。人が王に向 かって、『よこしまな者。』と言い、高貴な人に向かって、『悪者。』と言えるだろう か。この方は首長たちを、えこひいきせず、貧民よりも上流の人を重んじることはない。 なぜなら、彼らはみな、神の御手のわざだから。(34:17-19)」何人も神を感心させることは ありません。箴言24:23にはこうあります。「これらもまた知恵である。さばくとき に、人をかたより見るのはよくない。」これは人間の間でよくあることですが、神にはあ りません。ルカ20章で、ある者たちがイエスのところに来て言いました。「先生。私た ちは、あなたがお話しになり、お教えになることは、正しく、またあなたは分け隔てなど せず、真理に基づいて神の道を教えられることを知っています。(20:21) 」彼らは、イエス がかたよられない方であることを認めていました。イエスは、人から印象を受ける方では ありません。パウロはコロサイ人に手紙を書いて、「不正を行なう者は、自分が行なった 不正の報いを受けます。それには不公平な扱いはありません。(3:25)」と言いました。最後 ですがペテロは、「人をそれぞれのわざに従って公平にさばかれる方を父と呼んでいるの なら、あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を、恐れかしこんで過ごしなさ い。(1ペテロ1:17)」と書きました。ですから11節にあるように、神にはえこひいきはあ りません。 パウロは続けてこのことを定義していますが、12節以降でこう言っていま す。「律法なしに罪を犯した者はすべて、律法なしに滅び、律法の下にあって罪を犯した 者はすべて、律法によってさばかれます。それは、律法を聞く者が神の前に正しいのでは なく、律法を行なう者が正しいと認められるからです。 - 律法を持たない異邦人が、 生まれつきのままで律法の命じる行ないをするばあいは、律法を持たなくても、自分自身 が自分に対する律法なのです。彼らはこのようにして、律法の命じる行ないが彼らの心に 書かれていることを示しています。彼らの良心もいっしょになってあかしし、また、彼ら の思いは互いに責め合ったり、また、弁明し合ったりしています。」神はここで、ユダヤ 人をさばかれる時、彼らが多くの光を受けたことを言われています。ちょっと先の章で、 パウロは、「ユダヤ人のすぐれたことろは、いったい何ですか。それは、あらゆる点から

見て、大いにあります。彼らは神の書かれたこと、おことばをゆだねられているのです。 神はユダヤ人にお話になりました。(3:1-2参照) 」と言っています。そして神は、彼らに律 法を与えられました。したがって、神の要求されていることの光、すなわち理解が与えら れたので、ユダヤ人は律法によってさばかれるのです。けれども、異邦人あるいは異教徒 は、神の律法を持っていなかったので、神は彼らの心に道徳のおきてを書かれたのです。 そして彼らには良心があります。あなたの思いの中で、「これは間違いだった。こんなこ とすべきではなかった。」と考えたときはいつでも、神が律法をあなたの心に書かれたこ とを認めているのです。自分の行なったことが、正しくなかったということを気づいてい ます。あのように反応すべきではなかった。あのようなぶしつけなことを言うべきではな かった。あのようなことをすべきではなかった。あれは公正ではなかった。正直でなかっ た。正しくなかった。ですから、私たちの心の中で良心が、私たちが罪を犯したことを教 えるのです。ユダヤ人のように律法は書かれなかったけれども、何が正しいことで何が悪 いことかという良心が私たちの内にあって、私たちはそれによってさばかれます。私の子 供たちが成長期にあった頃、ロンパールームというテレビ番組がありました(訳者注:日 本でやっていたロンパールームと同じような番組)。これは子供向けの番組でした。先生が ほとんど毎回、次のような歌を歌っていました。「私はいつも正しいことをしています。 何も悪いことはしていません。私は、よい子です。一日中、よい子にしています。」これ は異端です!私たちは悪いことをします。自分は何も悪いことをしたことがないなんて、 誰も考えたことはないでしょう。なぜなら、自分の良心が自分は悪いことをしたと教える からです。したがって、自分自身が持っている基準によって、さばかれるのです。けれど も、自分自身の基準に従って生きてきていません。「これは間違っている。私は罪を犯し た。」と良心の声が語りかけてきたことが、今までたくさんあります。ですから、私には 罪があります。それで神がさばかれる時は、それは正しいさばきなのです。自分はたぶん 律法を知らなかったかもしれませんが、「これは正しくて、あれは悪い。」という意識が あることに気づきます。

ですから、神はその人が受けた光や理解に従ってさばかれます。ユダヤ人は、多くの光 を受けたので、光を多く受けなかった人よりもさらに高い基準でさばかれます。ルカ12 章45節で、イエスは次のようなたとえを話されています。主人が出て行って、自分のも のをしもべに任せましたが、しもべたちが思っていた時に主人は帰ってきませんでした。 それでひとりのしもべが、「主人の帰りはまだだ。」と言い、下男や下女を打ちたたき、 食べたり飲んだり、酒に酔ったりし始めました。イエスは言われました。「しもべの主人 は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。そして、彼をきびしく罰して、不忠実 な者どもと同じめに会わせるに違いありません。主人の心を知りながら、その思いどおり に用意もせず、働きもしなかったしもべは、ひどくむち打たれます。しかし、知らずにい たために、むち打たれるようなことをしたしもべは、少しで済みます。すべて多く与えら れた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。」ですからイエスがおっ しゃっているのは、イエスの御名を聞いたことが一度もないジャングルに住む人たちは、 さばきの日には、イエス・キリストのことを聞き、この方によって与えられる神の救いを 拒む、ここいいる人達よりもずっと良い状態なのです。ですから、ジャングルに住む人た ちのことを心配するよりも、自分自身のことを心配したほうがよさそうです。なぜなら、 あなたの受けた光は、さらに多くの責任を伴います。神は、おのおのに与えられた光に対 して、責任を負わせられるからです。ペテロは第二の手紙で、こう書きました。「主であ り救い主であるイエス・キリストを知ることによって世の汚れからのがれ、その後再びそ れに巻き込まれて征服されるなら、そのような人たちの終りの状態は、初めの状態よりも もっと悪いものとなります。義の道を知っていながら、自分に伝えられたその聖なる命令

にそむくよりは、それを知らなかったほうが、彼らにとってよかったのです。(2:20-21) 」正義の道を知って、その後自分に伝えられた聖なる命令にそむくよりは、それを知らなかったほうが彼らにとってよかったのです。聞いて、その後にそむくよりは、聞いたこともない異教徒のほうがよいのです。パウロが2章で正しい神のさばきを、完璧な神のさばきを示した目的は、3章への導入です。パウロはそこ3章において、ユダヤ人でもギリシャ人でも、知識を持っていてもいなくても、多くの光であっても小さい光であっても、私たちはみな有罪の宣告を受けていることを示しています。聞いたことのない人たちも、罪を犯しました。なぜなら、神が彼らに与えられた、何が良い事で悪い事なのかの良心の基準に到達しなかったからです。だれ一人として、神の基準よりもはるかに低い自分自身の基準にさえ到達していません。パウロは次の章でこう教えています。「義人はいない。ひとりもいない。(3:10)」「全世界が、・・・有罪の宣告を受けているのです。(リビングバイブル3:19)」つまり全世界が、神のさばきに服するのです。このさばきが下るときは、正しいさばきが下るのです。真実に従っています。

ここまででみなさんを放っておくことはできません。ローマ書全体のテーマを展開する 中で、パウロは続けて、神が、罪に対する神の怒りと神のさばきを免れる道を備えてくだ さったことを教えています。神は、そのひとり子を遣わされました。この方があなたの罪 の罰を取られて、罪に対する神の宣告を苦しまれたのです。あなたの代わりに死なれ、神 があなたを義と認める、あるいは無罪と宣告するようにされました。あなたが無罪である と宣告されるときに、神は正しい宣言をされるのです。なぜなら、罪に対する罰が神の御 子に与えられたからです。それであなたは、イエスを信じる信仰によって義と認められ、 あなたの犯した罪を正しく罰する罪状から、神によって無罪と宣告されます。もしキリス トのうちにいるなら、あなたは、神の子どもとして罪に定められることが絶対にないとこ ろに来ることができます。なぜなら、御子があなたの罪を負われ、あなたの代わりに死な れたからです。ですから続けて読みますと、このテーマが展開してゆくのがわかります。 世界は、意識の中で神を知ろうとしないので、奈落の底にいます。神を社会から締め出そ うとしたので、結果として無秩序状態になっています。私たちは、「なんてひどいのだろ う。彼らは何をしているのだろうか。」と言って傍観してしまいがちですが、私たち自身 も、立場を逆転させたら罪を犯しているのです。私たちはみな、神の前で有罪の宣告を受 けています。義人はいません。ひとりもいません。したがって神は、ご自身の愛のゆえ に、御子を遣わし、私たちが御父に前で正しい者として立つことができるようにしてくだ さいました。キリストのうちにいるなら、私は赦されているのです。義と認められていま す。無罪の宣告を受けています。今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められること は決してありません。

ローマ人への手紙 2章 第二部 (9/1/96) 「心の問題」(Romans:28,29) ローマ人への手紙 2章 28、29節#8630 交読文:詩篇139篇

今週の学びは、ローマ人への手紙2章です。このローマ書は、人を変革させます。みなさんの霊的な歩みと、神との関係を変革させます。いっしょにローマ書を学び続けるよう、強くお勧めします。週に1章ずつ進み、数週間の短い期間でこの書物を読破しますが、みなさんの主との歩みにとって、このローマ書がすばらしいことを起こしてくれるでしょう。今夜2章を学びますので、午後にそこを勉強して、今夜参加して下さい。神のみことばは、私たちの心に働き、私たちをイエス・キリストの似姿に形造られるようにします。

今朝は、ローマ人への手紙2章の最後の数節、28と29節に注目していただきたいの ですが、パウロはこう告げています。「外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見 上のからだの割礼が割礼なのではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人 であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではな く、神から来るものです。」ローマ人への手紙1章で、パウロは、ユダヤ人が異教の異邦 人の世界をどう見ていたか述べています。ユダヤ人は、異教の異邦人の世界を、不義と不 品行とむさぼりに満ち、ねたみと殺意に満ち、神を憎む者、高ぶる者で、自然な用を捨て たと見ていました。パウロは、なぜ異教の世界が神からこのように遠く離れてしまったの か理由を指摘しました。彼らは、ご自身を自然を通して示してくださった神を知っていた のに、その神を神としてあがめず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗 くなり、自分では知者であると言いながら、実際は愚かな者となりました。そのため、神 は彼らを情欲に引き渡されました。また彼らは、神の真理を偽りに変えました。造り主の 代わりに造られた物、被造物を拝みました。彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は 彼らを良くない思いに引き渡されました。異教の異邦人の行ないを、ユダヤ人はひどいと 思っていました。なぜなら、異邦人の行なっていたことは、ユダヤ人に与えられていた神 の律法に極端に逆らっていたからです。神は彼らに、どのように神と関係を持ち、どのよ うに人間と関係を持つべきか、いのちのおきてを授けていました。異教の異邦人の世界で は、この神の律法が完全に欠落していました。けれども、パウロはここ2章で、ユダヤ人 が神の律法を知っていたのにもかかわらず、恥ずべきことを行なっていた異教の異邦人の 世界となんら変わりなく、神の前で有罪の宣告を受けていたと指摘しています。ユダヤ人 は異邦人を、彼らの行ないによってさばいていましたが、異邦人と全く同じように有罪の 宣告を受けていました。というのは、彼ら自身が神の律法に反することを行ない、考えて いたからです。

イエスは、山上の説教で弟子たちに、驚き怪しむようなことを話されました。イエスは、彼らに言われました。「もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいれません。(マタイ5:20)」さて、弟子たちは、律法学者とパリサイ人が、律法の細部にいたるまで、それを守り行なうために全生涯をささげていたことを知っていました。弟子たちは、彼らが通りの四つ角で立って祈るのを見ていました。彼らが、庭の香料の10分の1までもささげていたのを知っていました(マタイ23:23参照)。非常に厳密に、律法を守り行なっていました。ですからイエスが、「もしあなたがたの義が、律法学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら」と言われたとき、ペテロはきっとヨハネに、「その通りだ。おい、これは漁に戻ったほうが良さそうだ。ぜったい無理だ。」と言ったような気がします。けれどもイエスは続け

て、どういう意味か、説明を始められています。律法学者とパリサイ人がどのように律法を教えていたか、そして、神から律法がどのような意図で与えられたか、5つの例を示されました。イエスは言われました。「『人を殺してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。兄弟を憎む者は、このおきてを破ったのです。『姦淫してはならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いて女を見る者は、あなたがたが心で性的な関係を願ったら、この命令にそむいたのです。(マタイ5:21、27、28参照)」つまりイエスは、本当に大事なのは心の問題だと教えられているのです。人の行ないよりも、その心を神はさばかれて、神は心を見ておられるのです。ですからユダヤ人は、異邦人の行ないを罪に定めていましたが、心の中では同じことを行なっていたのです。従って、ユダヤ人は少なくとも神の律法を知っているので、異邦人よりも罪が重いのです。それは、異邦人は、自然を通してご自身を現してくださっている分しか神を知らなかったのに、ユダヤ人は神のおことば、律法をゆだねられていたからです。彼らは有罪の宣告を受けていました。イエスは、「外見上律法を守り行なっているが、心で神の律法を破っている。本当に大事なのは心である。」と教えられました。

主は、預言者イザヤをとおして民に仰せられました。「この民は口先で近づき、くちび るでわたしをあがめるが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたしを恐れるの は、人間の命令を教え込まれてのことにすぎない。(イザヤ29:13)」彼らは、正しいことを 言うかもしれないが、彼らの心はわたしのことろにない。口先でわたしに近づき、賛美を 歌うが、心はそこにはない。神は、心を見ておられます。さて、ここで難しいのは、正し いことを言うと、とても容易に欺くことができることです。自分を欺いてしまうのです。 霊的な専門用語を知っているがために、自分自身を欺いてしまいます。「主はすばらし い!主は、今週私を祝福してくださった。主が私の心に語りかけてくださった。」と言っ て、霊的な言い回しや、専門用語を使ったとしても、心が神から完全に離れていることも あり得るのです。「でも、神をあがめます、と言うことはできます。ハレルヤ!神を賛美 します!」と言うかもしれませんが、霊的な専門用語を使うので、本当の自分と神との関 係について、実に自分を欺いてしまうことがあり得ます。これは、ユダヤ人にも言えま す。彼らは正しいことを言い、口先で神に近づくことはできますが、神が見ておられる彼 らの心は離れています。神から遠く離れています。そこでパウロは、ユダヤ人が律法を 持っているという事実そのものを、律法を持っていることを誇っていること自体を、神は 重要だと考えておられないことを指摘しました。神は彼らの心を見ておられたからです。 神は、彼らの心に関心をお持ちでした。神の前で義となるためには、ただ律法を持ってい るだけでなく、律法を行なうことが大切でした。つまり、心の中で行なうことです。モー セが律法を与えたとき、申命記4章1節で、彼は民にこう言いました。「イスラエルよ、 いま、わたしがあなたがたに教える定めと、おきてとを聞いて、これを行ないなさい。そ うすれば、あなたがたは生きることができ、あなたがたの先祖の神、主が賜わる地には いって、それを自分のものとすることができよう。(口語訳)」

さて、パウロは、彼らが心の中で律法を守り行なわないために失格だっただけではなく、割礼の儀式が彼らを本当のユダヤ人にしたのでないことを指摘しました。アブラハムが99歳の時に、神はアブラハムと契約を結ばれました。神は彼にこう言われました。「わたしは、あなたをおびただしくふやそう。あなたは多くの国民の父となる。(創世17:2、4)」神は、アブラハムを実り多い者とし、彼から王たちが出て来るようにされました。神は彼の子孫に、彼が滞在していた地を与えるようにされました。これが神の契約です。神は仰せられました。「わたしとあなたの子孫のユダヤ人の間の契約のしるしは、割礼である。(創世17:11参照)」こういうわけで、割礼の儀式、しきたりができました。ユダヤ

人の男子はみな、8日目に割礼を受けました。これは、彼らが神の契約の民であることのしるしでした。彼らはアブラハムの子孫であり、神はアブラハムの子孫との間に契約を結ばれました。さて、割礼のしるし、つまり肉を切り取ることは、彼らが霊的な民であることを示していました。つまり、肉に従わないで、御霊に従って生きることです。けれども、パウロがここで主張していることは、「あなたがたは契約のしるしを持っているけれども、儀式をしたけれども、肉に従って生きているので、あなたがたの経験した儀式は、全く無意味なのです。」ということです。なぜなら、神は、人の心の割礼について話されていて、もはや心の中で肉に属することに従わないで、心の中で御霊に属することを求めることを話されているからです。

ユダヤ人にとっての儀式である割礼は、私たちにとっての教会の儀式であるバプテスマ に当てはまります。ユダヤ人が誤ったことは、実に人を欺きやすい事の一つです。なぜな ら、「私はユダヤ人です。割礼を受けました。儀式をやりましたから、もちろん私はユダ ヤ人です。」と言うのですが、霊的な土俵における神との関係よりも、儀式に依り頼んで いるからです。教会もこれと同じで、こう言う人がいます。「もちろん私はクリスチャン です。洗礼を受けました。証拠として写真もあります。その後の飲み会の写真もありま す。私の洗礼を祝ってくれたのです。」容易に人を欺いてしまいます。なぜなら、ある儀 式を行なったという事実を頼りにしているからです。けれども、成人になってからのバプ テスマでさえ、もし依然として肉に従って生き、歩んでいるなら、それは無意味なので す。なぜなら、これの象徴していることは次の通りだからです。かつての肉における古い 生き方を葬り、それは死んでいて、存在しません。今は、御霊に従う新しいいのちを生き ます。つまり、水のバプテスマで、古い生き方が葬られました。肉の生活を放棄し、葬り ました。今は、御霊にある生活をし、歩みます。水から出てくるのは、復活して、キリス ト・イエスにある新しいいのちにあずかり、御霊に従って生きることです。さて、儀式は 大切です。不可欠なものです。けれどもそれが自分の心に起こっていなければ、何回受洗 したことがあったとしても、どのように受洗したのかも、関係ないことです。溺れる直前 まで、水の中に入れておかれたとしても、関係ありません。もしそれが心の問題でなけれ ば、全く意味がないのです。神は、人の心に起こっていることに関心がおありです。儀式 は、実に人を欺きやすいのです。バプテスマを受けていれば私は大丈夫だ、救われている ということで、人は欺かれるからです。みなさんは、そのような人に何十人も会われたこ とがあるでしょう。私も、会ったことがあります。そのような人たちは、自分の回心、救 いをバプテスマの儀式に頼っています。パウロはユダヤ人に、儀式では救われないこと、 心から何をしたのかという、心の問題でなければいけないことを示しています。

なぜ神は、心に起こっている事に関心をそんなにお持ちなのでしょうか。箴言に次のように書かれています。「力の限り、見張って、あなたの心を見守れ。いのちの泉はこれからわく(訳者注: "for out of it are issues of life"の日本語の直訳は、「そこからは、いのちの問題が出る」。)(箴言 4:23)」本当の問題は、人の心にあります。人の本当の目的がそこに定められているのです。人が何をするかは、実はこの事で決まるのです。つまり、心にあることを人は行なうのです。イエスは、「良い人は、良い倉から良い物を取り出し、悪い人は悪い倉から悪い物を取り出す物です。(マタイ12:35)」と言われました。また、別のときにイエスは、「口から出るものは、心から出て来ます。悪い考え、殺人、姦淫、不品行、盗み、偽証、ののしりは心から出て来るからです。(マタイ15:18-19参照)」と言われました。つまり、こういったものが人の心の中にあり、これらのものが究極的には心の中にあり、それらによって人は支配されているということです。古くからある論法で、馬を盗むことで、馬泥棒になるのかというものがあります。その答えは、「いいえ」です。それは、あなたが馬泥棒だという証拠になります。馬を盗む前から、あなたは馬泥棒でし

た。あなたは馬泥棒だったから、馬を盗んだのです。もし、あなたが馬泥棒でなかったの なら、決して馬を盗まなかったはずです。ですから、馬泥棒になったのではなく、馬泥棒 だという証拠になったのです。あなたの言動によって、あなたの心の中にあることが、究 極的に明らかにされるのです。神はあなたの心に関心を持っておられます。それは、心の 中から、本当のいのちの問題が出るからです。ローマ人への手紙10章で、パウロは、 「もし私たちの口でイエスを主と告白し、私たちの心で神はイエスを死者の中からよみが えらせてくださったと信じるなら、私たちは救われるからです。(10:9参照)」と教えてい ます。心で信じることに注目して下さい。思いで信じるのではありません。なぜでしょ う。思いを変えることは、実に簡単だからです。私たちは、問題に対して常に思いを変え ているようです。心を変えるのは、難しいことです。ここに人生の本当の目的が立てられ ます。ダニエルの話を思い出しますが、彼は10代のときに捕囚で連れられて、バビロン に連れて来られました。ネブカデネザルのため、王の宮廷に仕えるための訓練を受けまし た。ダニエルの前には、汚れた裕福な生活をするあらゆる機会がありました。「ダニエル は、・・・身を汚すまいと心に定め(ダニエル 1:8)」とあります。このことを心に定めた ので、それが実行されました。神は、あなたの心にご関心があります。ここで重要な志が 定められるのです。

神はあなたの心を見て、今日、何を見られるのでしょうか。自分で、自分の心の中味を 見ることは困難です。エレミヤは、「心はよろずの物よりも偽るもので、」世界中でもっ とも偽るものだ。「はなはだしく悪に染まっている。だれがこれを、よく知ることができ ようか。(エレミヤ 1 7:9 口語訳) 」と述べています。神はこう応えられています。「わた し、主が心を探り、思いを調べ、それぞれの生き方により、行ないの結ぶ実によって報い る。(エレミヤ 1 7:10) 」ここで主が言われているのは、主があなたの心をご覧になり、さ ばくときにはあなたの心にあることに従ってさばく、ということです。ノアの洪水の時代 のとき、「主は、地上に人の悪が増大し、その心に計ることがみな、いつも悪いことだけ に傾くのをご覧になった。(創世6:5)」神は、当時の人の心にあったことをご覧になって いました。神は、「これまでだ。さばきを下さなければいけない。」と言われたのです。 さて、ダビデは、神が自分のことを、自分が自分自身のことを知っているよりも、さらに 詳しく知っておられるのを認めて、こう言いました。「神よ。私を探り、私の心を知って ください。私を調べ(てください。)(詩篇139:23)」試みに会わせてください。こうし て、あなたが私を見ておられるように私が見て、あなたが私を知っておられるように、自 分についての真実を私が知るようにしてください。ダビデは、神が自分について全てご存 じであることを語って、こう言いました。「あなたは私を探り、私を知っておられます。 あなたこそは私のすわるのも、立つのも知っておられ、私の思いを遠くから読み取られま す。ことばが私の舌にのぼる前に、なんと主よ、あなたはそれをことごとく知っておられ ます。(詩篇 1 39:1、2、4)」彼は、「そのような知識は、あまりにも不思議、・・・及 びもつきません。 (詩篇 1 39:6) 」と言いましたが、どういうことでしょうか。自己に関す る知識のことです。私は自分のことを知らない、ということです。この人は、自分の心が 偽るものであることを理解しているのです。自分自身のことを知らず、本当の動機を知ら ないのです。この人は、「神よ。私を探り、私を調べてください。私の心にあるものをお 示しください。」とダビデが賛美したときの人です。神はイスラエルの民に言われまし た。「40年間、あなたを荒野に歩ませ、あなたの心のうちにあるものを試した。(申命 8:2参照)」神がご存知でなかったからではありません。神は、彼らの心のうちにあるもの は、すべて知っておられました。彼らが知らなかったのです。彼らが通った試みは、神が 彼らの心のうちにあるものを知るためのものではなくて、彼らの心のうちにあるものを神 が示して、彼らがそれを知るためだったのです。神は、私たちを試みに会わせて、困難を

経験させるようにされることがよくあります。私たちの心のうちにあるものを調べて、私たちがそれを知るようにするためです。そして自分がはなはだしく悪に染まっており、生きるために神の恵みと助けが必要だと知るようになるためです。

このことを、ここでパウロが明らかにしています。確かに異邦人の世界は腐敗していて、神のさばきを受けるに値するが、宗教の世界のユダヤ人でさえ腐敗している。それは、彼らが異邦人の世界をさばいているが、心のうちでは神から離れているからだ。彼らは儀式を行ない、律法を持っているが、律法を守り行なう心がない。彼らは欺かれている。この欺きのために、彼らは主の方に向いていないのです。依然として、自分自身で努力しています。今日、多くの人が、自分の正しさに、自分の良い行ないに、自分の行なっている事に依り頼んでいます。その間ずっと、神は彼らの心と、心のうちにある腐敗を見ておられます。パウロが2章16節で教えていますが、神がさばかれるとき、私たちの心の隠れたことにしたがってさばかれるのです。ソロモンは、「わが子よ。あなたの心をわたしに向けよ。あなたの目は、わたしの道を見守れ。(箴言23:26)」と言いました。神はこのことをあなたに言われています。「あなたの心をわたしに向けよ。」と。

ユダヤ人は、悲しみや、狼狽、激しい感情を表すのに面白い方法をとります。着物を引き裂くのです。悪い知らせや災いが訪れると、「ああ、何てことだ!」と言って、ビリビリ着物を引き裂きます。これは、大きな苦しみや、悲しみ、憂い、嘆きのしるしです。預言者ヨエルを通して、神は仰せられました。「あなたがたの着物でなく、あなたがたの心を引き裂け。あなたがたの着物を引き裂くな。あなたがたの心が裂かれるようにせよ。神の前で裂かれるようにせよ。それは、神が、外見的なことではなく、心に関心を持たれているからです。何かを示したり、現したりするのに、外見的なことをするのはとてもたやすいことです。けれども神は、今日あなたの心のうちにあるものを正すことを願われています。大事なのは心だからです。神がご覧になっているのは、心なのです。神の前では、人の心の問題が重要なのです。

ローマ人への手紙3章(9/8/96) 「義なる神がいかに罪をお赦しになるのか」#8631 ローマ人への手紙3章26節(Romans3:26)

交読文:詩篇32篇

聖書通読の学びをしていますが、ローマ人への手紙3章まで来ました。これは、信仰義認について実に多くを語っているすばらしい書物です。また、神の恵みと神の主権について語っています。3章まで来ましたが、今朝は26節を見てください。パウロが言いました。「それは、今の時にご自身の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とお認めになるためなのです。」パウロがここで言っているのは、神が義であり、義をもってさばく方であることです。そのため、神があなたを、あなたの罪を義とお認めになるとき、そのためには十分な根拠がなければならないのです(訳者注:「義なる」も「十分な」も英語ではjust)。しかし、これによって、実に興味深い疑問が出て来ます。義なる神がいかに罪をお赦しになるのか、ということです。この質問に出てくる、3つの主な言葉を定義したいと思います。「義」と「赦し」と「罪」です。

義という言葉の根源的な意味には、「見られる」というものがあります。しかしこの考 えは、見られることと、見られるものにのっとって行動することです。ですから、「遵守 する」という言葉を使った方がよいかもしれません。子供たちの夏期キャンプでは、私た ちは、「掲示板にキャンプの規則を掲げますから、これを見て下さい。」と言います。そ れで、規則の一つを破った子供を見ると、私たちは、「掲示板の規則を見なかったの か。」と言います。生意気な子供は、「うん、見たよ。」と言います。ですから、私たち が見てくださいと言うときは、ただ眺めること以上を意味しています。私たちは、掲示板 の規則を見て、それを遵守して下さい、と言っているのです。つまり、ただ見るだけでな く、見たことにのっとって行動することです。自分の行動は、見たことと一致していなけ ればなりません。「赦し」という言葉は、私たちはその神の観点を、本当には理解するこ とができません。私たちが人間的なレベルでそれを用いているからです。みなさんが私に 悪いことをしたとして、「なんでこんな悪いことをしてしまったのでしょう。私は牧師に 関することで嘘をつきました。本当に申し訳ありません。赦していただけるでしょう か。」と言ったとします。すると、私は、聖書にしたがって、私はみなさんを赦さざるを えません。「はい、赦します。」と言うでしょう。けれども、2、3ケ月後に、私のとこ ろに戻って来て、「本当にごめんなさい。またあなたのことについて嘘をついてしまいま した。本当ではないとわかっていたのに、なんでそんなことをしてしまったのでしょう。 赦していただけるでしょうか。」私は、「おい、2ケ月前に同じ問題を取り扱ったじゃな いか。いったい、どうしたんだ。何か問題でもあるのですか。」と言ってしまいそうにな ります。私は、過去をほじくりかえし、それを忘れることはできなかったのです。しか し、神の赦しはこのようではありません。神が赦されるとき、罪は葬り去られます。決し て二度と、ほじくりかえされることはありません。神の赦しは、もともとあなたが罪がな かったかのようにしてくれます。完全に過去が精算されます。3章に紹介されている「義 と認める」という言葉は、これと同じ意味があります。「義と認める(justify)」という言葉を 理解するには、「あたかも私がしたことがないように(just as if I have never done it)」と分割 する必要があります。過去の罪に関して、このことを神はしてくださったのです。あたか も私が犯さなかったようにしてくださったのです。このようにして、神の完全な赦しがあ なたのものになるのです。問題がどのようなものであれ、どんな罪であれ、神はあたかも 存在しなかったように取り扱われます。これが、神の観点からの赦しの定義です。「罪」

という言葉ですが、その根源的な意味は、「的をはずす」です。23節に戻ると、「すべ ての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」とパウロは述べていま す。私たちはすべて、有罪の宣告を受けていて、罪を犯したのです。私たちはすべて的を はずしました。「的とは何ですか。自分が的をはずしていると認めるには、的が何かまず 知る必要があります。」と言われるかもしれません。的とは、神の完全さです。イエス は、「だから、あなたがたは、天の父が完全なように、完全でありなさい。(マタイ5:48) 」と言われました。この定義なら、私たち全員が、自分は罪人だ、的をはずしたと認める と思います。けっこう上手くやっているかもしれないけれど、結構いい線いっているかも しれないけれど、完全ではないのです。私たちはみな、自分の不完全さに気づいていま す。したがって、私たちはみな、的をはずしたことを悟るのです。 そこで、「義なる神 がいかに罪をお赦しになるのか」という質問は、次のように言い換えられるべきですし、 言い換えられると思います。「ありのままの姿をご覧になっており、ご覧になっているこ とにのっとって行動される神が、いったいどのようにして、私が的をはずしたことを、あ たかも的をはずしていないように取り扱われているのか。」ご覧になっておられ、ご自分 がご覧になっておられることと一致した行動をなさる神が、私が的をはずしたという事実 を、あたかも私が的をはずしていないかのように取り扱われるのは、どのようにしてなの でしょう。ここの箇所が言っているように、「神ご自身が義であり、イエスを信じる者を 義とお認めになるためなのです。」つまりこれは、あなたを義とお認めになって、あたか もあなたが的をはずさなかったように取り扱われるとき、神が義である、ということで す。

義なる神が罪をお赦しになるための根拠をしっかりとさせるためには、イエス・キリス トが神の受肉であることに私たちが気づくことです。この方は、神そのものでした。肉の からだでこの地上に来られました。人々の間に住まわれました。けれども、この方は神で した。創造主である神でした。ヨハネはこう伝えています。「初めに、ことばがあっ た。」これはイエスのことです。「ことばは神とともにあった。ことばは神であった。こ の方は、初めに神とともにおられた。すべてのものは、この方によって造られた。造られ たもので、この方によらずにできたものは一つもない。 (ヨハネ1:1-3)」この数節後にヨハ ネは、「ことばは肉となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。 父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。(ヨハネ1:14 新改訳脚注参照)」 と言いました。聖書は、「神は肉において現れ(1テモテ3:16 新改訳脚注参照)」と伝えて います。キリストという方において、神は現われました。現われのことを話せばすぐその 瞬間に、全てを見ていないことを認めているのです。私たちの見ているのは、そこにある 完全な姿の現われでしかないのです。イエスは、神が肉において現わされた方です。神に ついて、見ることができるもの、知ることができるものの全ては、まだ見えていません。 私たちを真理に導くのに十分なものは見えていますが、私たちが理解できないものは、 もっと多くあります。従って、イエスは現われなのです。ですから、私たちがイエスを見 るとき、神を見ているのです。神の現われを見ています。聖書は、「私たちのすべての咎 を彼に負われた(イザヤ53:6)」と教えているので、イエスが私たちのすべての咎を負って 下さいましたが、神ご自身が私たちの罪を、私たちの罪の罰を、私たちの罪の責任を負わ れたのを見ます。イエスが十字架上の残酷な死を苦しまれたとき、神が私たちの罪過を支 払われ、人間の罪ために死ぬという苦しみを受けて下さったことを見ます。イエスがエル サレムを見て、彼らの心がかたくなでメシヤを認めなかったゆえに、やがて来る悲劇のこ とで泣かれましたが、人間がイエスをメシヤと信じないゆえに、自ら困難を招いたこと で、神が泣かれていたのがわかります。イエスは人間を愛するよう神を説得するために死 なれたと、信じたり、思ったりしないでください。神があなたを愛されていたので、その ことにより、そのひとり子を遣わして下さったのです。それは、ご自身が私たちの罪と咎を負われ、私たちの罪のために死なれるためでした。神は、キリストによって、世をご自分と和解されました。私たちがイエスの御前に立つとき、神の御前に立つのです。この方のうちに、神の満ち満ちた姿があるからです。

ですから、イエスを見ると、イエスの生涯を見ると、絶対的なきよさと正しさがわかり ます。聖書には、「キリストには、何の罪もありません。(1ヨハネ3:5)」とあります。絶 対的な純潔と、絶対的なきよさと正しさがあります。イエスの生涯を見ると、それを見る ことができます。そしてイエスの死を見ると、この方がご自分のために、あるいはご自分 の罪のために死なれたのではないことを知らなければなりません。私は、罪から来る報酬 が死であることを知っています。けれどもイエスは、罪を犯されませんでした。したがっ て、この方の死を見るときに、ご自分の罪から来る報酬を受け取られているのではないこ とを知ります。それが身代わりであることがわかります。イエスは私の身代わりです。私 の罪と罰を負って下さり、今や、私のために死なれたのです。罰を受けるに値するのは私 なのに、それをイエスが受けられたので、イエスの死を身代わりと見るわけです。私の罪 を負って下さったので、今や、私の罪の罰を苦しまれているのです。イエスの復活を、こ の方にある新しいいのちを見るとき、そこで神が私の罪を取り除かれたのを見るのです。 「イエスは、私たちが義と認められるために、よみがえられたのです。(ローマ4:25)」と あります。私の罪は、もうすでにイエスの上で罰せられました。したがって今や、神は、 もし私がイエスを信じるなら、義をもって私の罪を赦すことがおできになるのです。罪の 問題は、解決されたのです。神は私のために、ご自分の十字架上の死において、罪を取り 除いて下さいました。それゆえ、私はキリストとともに十字架につけられています。私 は、キリストとともに死にました。パウロは、「あなたがたは、知らないのですか。バプ テスマを受けた私たちはみな、キリストとともに葬られたのです。(ローマ6:3-4参照)」 と言いました。古い生活は、葬られました。もう死んでいます。

したがって、律法はもはや、私に何も言うことはできません。私は、律法に対して死ん でいるのです。律法の規定にある罰に対して、死んでいるのです。次のようにたとえてみ ましょう。ある男が、銀行強盗に入ったとしましょう。金銭出納係が、銃を持っているこ の男を見て、警報器のボタンを押しました。これが警察に知らされて、警察が、犯行の現 場に急行しました。この男が銀行から出ようとしたら、警官が近寄ってくるのを見まし た。彼は混乱していました。彼は発砲しはじめ、戸に立っている警備員に発砲し、部屋中 に乱射しました。警備員を殺し、数人の人に負傷を負わせました。しかし、戸から出てく ると、警官に逮捕されました。拘置所に入れられました。公判の日が定められました。法 廷での審理が近づきました。けれども、拘置所の独房にいる間に、銀行強盗で少なくとも 25年から終身禁固刑を受けなければいけない、そして警備員を打ち殺したことで、もし かしたら死刑になるかもしれないと悟りました。このような公判の手続きをすべて踏むの を受けるのは、まっぴらだと思いました。それで彼は、自分のベルトを取って、首吊り自 殺をしました。看守が見回りに来たとき、独房でこの男が首を吊っているのを見ました。 ベルトを切って彼を下ろしましたが、脈はもうなく、この男はすでに死んでいました。さ て、法律によれば、彼は出廷し、犯した罪の申し開きをしなければならないのですが、法 廷の日が近づいていました。法廷に、彼の死体を引きずってきて、椅子に座らせ、公判を 受けさせ、判決を下す過程を踏むでしょうか。いいえ、違いますね。彼の死によって、法 律(law)は終わりました。彼に対する法律の効力はすべてなくなったのです。彼の死によっ て、そのようなものは、すべてが終わりました。ですから、私たちに下されていた死刑の 宣告は、キリストとともに私たちが死んだときに、すべて処理されたのです。もはや私 は、私の罪に対する、律法(law)の規定にある死刑の下にいません。イエスは、私の身代わ

りとして、私の代わりに死んでくださり、今や私は、キリストとともに十字架につけられ、古い生活に対して死に、キリスト・イエスにある新しいいのちによって生きているのです。ですから、イエスは、ご自分の死によって、私の罪をあたかも存在していないかのようにしてくださいました。したがって義なる神が、義をもって、義なる神が、私を無罪と宣告することがおできになるのです。

さて、3章を見ますと、イエス・キリストから離れたあなたと全世界を、神がどのように見ておられるかわかります。 9節の最後のところに、神がすべての人が罪の下にあると見ておられます。 1 0節です。「義人はいない。ひとりもいない。」 1 1節です。「悟りのある人はいない。ひとりもいない。」 1 2節です。「すべての人が迷い出て、みな、ともに無益な者となった。善を行なう人はいない。ひとりもいない。」それから神は、罪のうちにいる私たちを見て、私たちのことを描写されています。「彼らののどは、開いた墓であり、彼らはその舌で欺く。」「彼らのくちびるの下には、まむしの毒があり、」「彼らの口は、のろいと苦さで満ちている。」「彼らの足は血を流すのに速く、彼らの道には破壊と悲惨がある。また、彼らは平和の道を知らない。」「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。(ローマ3:13-18)」 2 3節に跳びます。「すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができず」と、神はこのようにキリストから離れたあなたを見ておられます。このように、イエスから離れた人類を見ておられます。これは、神の人間に対する告発です。「義人はいない。ひとりもいない。」

さて、罪によってどうしようもなくぼろぼろになった人に対して、絶望的なたましいに 対して、神は律法とは別に、ご自分の義を示されました。イエス・キリストを信じる信仰 による神の義です。律法は、あなたを正しくすることはできません。律法を守り行なうこ とも、あなたを正しくできません。なぜなら、あなたは律法を守れないからです。けれど も、これからはあなたが律法を守れると仮定してみましょう。心機一転するとします。も う二度と怒りません。二度と誰かについて悪い思いを持ちません。高速道路であなたの前 に割り込んでくる人のことで、機嫌を悪くしません。二度と不親切なことをしません。こ れからずっと、丁寧にし、愛想を良くし、親切で、思いやりを持ち、気前を良くし、人を 赦し、恵み深くなるとします。しかし、それでも、過去について何とかしなければならな いのです。良くなることで、あなたが行なった悪を償うことはできません。あなたはもう すでに、罪を犯し、もうすでに、死刑の宣告を受けています。律法は、あなたを罪に定め ることしかできません。もし、律法で、「決して、不親切なことを考えてはならない。決 して、不親切な行ないをしてはならない。どんなことをされても、すべての人に、優し く、親切で、思いやりのある者とならなければならない。」とあるとします。これらが不 可能な要求であることは、私たちはよく知っています。誰かが私の車の窓を壊して、私の カー・ステを奪い取ったことがわかった瞬間に、もし、「そいつらを捕まることができた ら、ぶっころしてやるのに。」と思ったら、律法はあなたに、「ほら、それは、不親切な 考えだぞ。」と指摘します。ですから、律法ができることはただ、私の罪を指摘すること なのです。「私は有罪だ。私は律法を破った。」と、律法ができることはただ、私に何が 正しいかを示し、私がそれに従って生きていないときに、私を罪に定めることです。「あ なたは、律法を破った。」と指摘し、あなたを責めます。しかし、聖書は、私たちはみ な、律法をやぶったと言っています。「義人はいない。ひとりもいない。」私たちはみ な、的をはずし、神からの栄誉を受けることができません。

それで、神は私たちのもとに来られて、こう言われます。「確かに、あなたがたは律法をやぶった。あなたがたはここに書かれてある通りだ。あなたがたののどは、開いた墓であり、あなたがたはその舌で欺く。あなたがたのくちびるの下には、まむしの毒がある。けれども、わたしは、あなたがたを愛している。あなたがたとともに永遠を過ごしたいほ

どに、あなたがたをとても愛しているのだ。わたしの臨在とわたしの国の喜びと栄光を用 意して、あなたがたを愛している。あなたがたを慕っている。」「けれども、私は罪だら けの人間です。」「それは、わたしが何とかする。わたしは、あなたの罪の罰とその責任 を、わたし自身の上に負う。わたしが、あなたのために死ぬ。あなたを愛しているから だ。わたしととともに永遠を過ごしてもらいたい。」これがまさに、神の言われたこと、 神が行なってくださったことです。神は、キリストによって、世をご自分と和解してくだ さいました。こう書かれています。「神は、罪の知らない方を、私たちの代わりに罪とさ れました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。(2コリント5:21) 」ここに、絶望的な、どうしようもない、失われた罪人である私がいます。けれども神が 来て、恵みによって愛してくださいました。24節ですが、私はこれが大好きです。「た だ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるの です。」神は、その恵みによって、価なしに私を全く無罪であると宣言されました。私 は、神の恵みによって、神からの祝福である永遠のいのちを受ける者となったのです。神 の恵みによって、私には値しない、値しようのないものを、授けてくださいました。それ は、神の子どもであることの、相続の栄光の富です。神の御国の永遠の栄光です。それら は私のものです。キリスト・イエスによる贖いのゆえに、私は神の相続者です。この方 は、罪と罰から私を赦免して下さるために、代価を払われました。不義な私を義と認めて くださるとき、神の義が維持されるためです。神は、私を全く無罪だと宣言されます。私 は、この方のおられる栄光のうちに永遠を過ごします。神はその愛を、ずっと、とこしえ まで私に惜しみなく与えてくださいます。神は私に、キリストにあって、はかりしれない 恵みと愛の豊かさを示してくださいます。「チャック、あなたは夢を見ているんだよ。」 と言われるでしょう。もしそうなら、私を起こさないでください。けれども、これは夢で はなくて、約束なのです。神が私に与えてくださった約束です。神は私に約束してくださ いました。神は、あなたにもその約束を差し出して下さっています。。

これはすべて、これを信じることを選ぶか、信じないことを選ぶかの選択の問題なのです。神の赦しと愛を受け入れることを選ぶか、あるいは、神の赦しと愛を拒むかのどちらかです。この方とともに永遠を過ごすことを選ぶか、この方から離れて永遠を過ごすことを選ぶかのどちらかです。これは、あなたの選択です。神は、選択の能力を与えてくださいました。神は、あなたの選択を尊ばれます。けれども、なぜ拒むことを選ぶのか、何か一つでももっともな理由を挙げることができますか。信じることは、信じないことと同じくらい簡単です。信じないもっもな理由が一つでもありますか。これは、イエス・キリストによって、神が差し出して下さっているすばらしい贖いです。これは、あなたの罪が完全に無罪放免になることです。すべての告発から、無罪と宣言されているのです。なぜならイエスが、あなたのためにこれらの告発を負われたからです。私は、これを拒む理由を考えることはできません。ダビデは、「不法を赦され、罪をおおわれた人たちは、ああ何と幸いであろうか。」

ローマ人への手紙 4章 (9/15/96) 「信仰」#8632(Romans4:19-21) ローマ人への手紙 4章 19-21節

交読文:詩篇45篇

聖書通読をしていますが、ローマ書4章まで来ました。今夜は4章を学びますが、パウロは、行ないとは別の、儀式とは別の信仰による義認という、とても大切な真理を教えています。ですから、もう一度読んで、すべての信者にとってとても大切なテーマである、信仰による義認を学びますので、今夜参加してください。パウロは、信仰による義認について教えているときに、信仰による義認の初めとして、アブラハムが最も良い模範であることを指摘しています。神が、「星は数え切れないが、あなたの子孫はこのようになる。(創世15:5参照)」とアブラハムに約束されました。これは、アブラハムに子が与えられる前のことでした。それは、アブラハムには子どもは与えられそうもないときでした。しかし、神がこの約束をされたとき、アブラハムは神を信じました。そして聖書には、「神はそれを彼の義と認められた。(創世15:6参照)」とあります。それでアブラハムは、神の約束を信じる者の模範として用いられています。神の約束を信じる信仰によって、神は彼を義とみなされました。

パウロは19節から、アブラハムの信仰の方法、または鍵を教えています。次のように教えています。「アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだが死んだも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱まりませんでした。」彼は、神の約束が成就することが、困難や不可能であると見ませんでした。私たちはとかく問題を類別して、「これは簡単だ。」「あれはまあ行けるだろう。」「あれ、あれはちょっと難しい。」「これは無理だ。」と言いがちです。私たちはこうやって、平易なものから不可能なものまで分類してしまいます。私たちの問題は、このような類別を神にも当てはめてしまうことです。「私にとって簡単なら、神にとっても簡単であるはずだ。私にとって難しかったら、わからないけど、だぶん神さま、あなたにはおできになるでしょう。」でも私には無理だったら、「お願いして、神を悩ますことはやめよう。これは不可能だから。これはどうしようもない。」と考えてしまいがちです。

問題にぶつかったとき、私の思いの中では、可能な解決方法を見つけ出そうとしていま す。もし、リーダース・ダイジェストの宝くじに当たったら、- 私が最終選抜候補者の 一人だとします。 _ 私の金銭的な問題はすべて終わります。さて、このような結果 は、神がどのようにできるか考えついた結果は、まっすぐな(direct)祈りではなく、指図をす るような(direction)祈りです。もはや、「私の神は、栄光の富をもって、私の必要をすべて 満たしてくださいます。(ピリピ4:19参照)」という約束を受け取るのではなく、「主よ。 彼らが、私の番号を引くようにしてください。」と言います。もうすべて私は見極めた。 神のおできになる方法は、これだけだから、と。でも神は、「わたしの思いは、あなたが たの思いとは異なる。わたしの道は、はかりしれないものだ。 (イザヤ55:8参照)」と言わ れます。私は、神が私の問題を解決される方法を見て、なんと巧みなのだろうと驚いてし まうことがよくあります。私はふつう、「これが起こったら、あれが起こりうるから、そ うすれば、あれが起こったら、そうすれば楽勝だ。」としゃれた方法を作り出して、複雑 な計画を立てるのですが、神が戸を開かれて、「ありゃ、これは考えもしなかった。」と 思うわけです。指図する祈りの問題は、神が、私たちの指図に従わないことがよくあるこ とです。私の指図に神が従わないと、私は気分を悪くします。時には、祈りに答えてくれ ないと、神を誤って責めることさえします。神は基本的に祈りに答えてくださったのです が、その答えは、神がこうしてくださるだろうと、私が思ったり期待するようには神が行 なわれなかったものなのです。アブラハムは、自分のからだが死んだも同然であることと、サラの胎の死んでいることをものともしませんでした。彼は、困難に、この場合は不可能に目を留めませんでした。

常に困難は、働きをするものの能力によって測られなければいけません。もし神がその働きをする方であるなら、困難だという話しは、どれでもばかばかしいのです。神の語彙には、その単語は存在しません。神はエレミヤに、「わたしは、神である。わたしにとってできないことが一つでもあろうか。(エレミヤ32:27) 」と言われました。イエスは、「それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。(マルコ10:27)」と言われました。神がどう行なわれるのかを自分で考え出そうとするもう一つの問題は、自分で可能な解決が何も考え出せない状況があるからです。私がわからないのだから、神がどうしてわかりえようか、と思ってしまいます。どんな方法も見い出せないとき、絶望して、神にその問題を持ってくることさえしません。アブラハムは、自分のからだが死んだも同然であることをものともしませんでした。つまり、彼は不能になっていたのです。彼は、サラの胎が死んでいることもものともしませんでした。つまり、彼女は更年期を過ぎていたのです。神には、何の問題でもありませんでした。ですからアブラハムは、状況が許さないことを見るのでなくて、何でもおできになる神を見ました。どんなことでも、神にはできるのです。ただ信じるだけです。

2番目に、「彼は不信仰によって神の約束を疑うようなことをせず」とあります。聖書には、「(神によって)尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました。(2ペテロ 1:4)」とあります。これは本当にその通りで、聖書はすばらしい約束で満ちています。けれども、私たちは、神の約束を疑うことがよくあります。一つ試してみましょう。「私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてくださいます。(ピリピ4:19)」これを疑ったことがありますか。請求書を見て、この約束を疑ったことがありますか。「神がどうやって・・・私にはわからない。」正直になりましょう。「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。(ローマ8:28)」これに、疑いを抱いたことがありますか。私たちはとかく、多くの場合、このような豊かで、尊い神の約束を疑ってしまいます。それは、神はそれをどうやって行なわれるのか、私たちにはわからないからです。アブラハムは、神の約束を疑いませんでした。

旧約聖書の中に、神の約束を疑った人の興味深い話があります。第2列王記6章にあります。エリシャが、北イスラエル王国に対する預言者であったときのことです。ヨラムが当時の王でした。シリヤの王ベン・ハダデはイスラエルを侵略し、サマリヤの町を包囲しました。そのれは長期間の包囲で、うまくいっていました。サマリヤ町の中にいる人で流れているほどでした。王が壁の上を歩いていると、ひとりの女が彼に叫んで言いました。「王さま。お救いください。王さま。お救いください。」王は振り返って、言いました。「私に何をしてほしいと言うのか。私にも食べる物がないのだ。あなたと同じ状況なのだ。女よ、なぜ叫んでいるのか。」女は言いました。「きのう、私はこの女と、自じなの子どもを食べることに決めました。私は私の赤ん坊を与えて、私たちはその子をつるように、その子を出させて下さい。」そして王は、自分の服を引き裂きました。それるように、その子を出させて下さい。」そして王は、自分の服を引き裂きました。それるように、その子を出させて下さい。」そして王は、自分の服を引き裂きました。そこ、「私が預言者エリシャの首をはねないなら、神が幾重にもこの私を罰せられますと、に、「私が預言者エリシャの首をはねないなら、神が幾重にもこの私を罰せられました。さて、エリシャは見通すことができました。神は常に彼に語られました。神はいつも、彼

に何かをお見せになりました。あまりにそうだったので、神がお見せにならなかったと き、彼は驚きました。シュネムの女の場合には、「何かがおかしい。神は私に何が問題か 知らせてくださらないのだ。(2列王4:27参照)」と言いましたが、主が知らせてくださらな いので驚いたのです。私の生涯の中で、時には何度か神は私に何か知らせて下さったこと がありました。そのときは私はいつも興奮して、「主が知らせてくださった。」と言いま すが、とてもすばらしい経験です。けれども、まれにしかありません。エリシャの場合は 違いました。何回も起こったので、主が知らせてくださらないとき、彼は驚きました。彼 は、あなたが話していると、どこか空を見つめていて、あなたに注意を払わず、主が彼に 何かを示して、「わぁ、あれより凄いことができるだろうか。信じられないなあ。 わぁ。」などと言っているような人でした。主が、彼に何かを示しておられたのでした。 ですから、彼は自分の家に、友人たちとともに座っていたときに、「これは本当か。信じ られない。」と、(独り言を言っている)風になりました。「あの人殺しが、何をしよう としているか、ご存じですか。私の首をはねに人を遣わしました。信じられますか。」彼 は言いました。「その人が戸を叩いたら、戸を開いて、彼を戸に押さえつけなさい。その うしろに、彼の主君の足音がするではありませんか。」と。すぐその後に、その人が戸を 叩き、彼らは戸を開いて彼を戸に押さえ付け、動けないようにしました。そこで、王が侍 従といっしょにやって来ました。エリシャは言いました。「おい、そういきり立つな。あ すの今ごろ、サマリヤの門で、上等の小麦粉1セアが、65セントで売られるようにな る。大麦2セアが、65セントで売られるようになる。」王がその腕に寄りかかっていた 者が、預言者をあざけり、こう言いました。「たとい、神が天に窓を作られるにしても、 そんなことがあるだろうか。」しかし、エリシャは言いました。「おまえはそれを見る が、それを食べることはない。」彼は、神の約束を疑ったのです。「いったい全体、神が そんなことをなさるだろうか。ろばのあごの骨が銀80枚で売られているのに、何で上等 の小麦粉1セアが60セントで売られることがあろうか。やめてくれよ、ばかばかし い。」「たとい、神が天に窓を作られるにしても」と言って、彼は神がどうやってそんな ことをなさるのか、考え出そうようとしたのです。「神が、小麦粉の倉庫の蓋でも開けて 回って、小麦粉をサマリヤの町に降らせるのか。もし神がそのようなことをなさるので あったとしても、そんなことがあるだろうか。」彼は神の約束を疑いました。

その夜、当日の晩、薄明りで、サマリヤの門の外に、その町の外に、門の回りにごみ捨 て場がありました。4人のらい病人がいました。彼らはらい病のため町の内側に住むこと はできませんでした。町の門の外に住んでいました。彼らは、門のことろに捨ててあるご みによって食いつないでいました。ごみをあさって、それで何とかやっていました。けれ ども、包囲と包囲による飢えによって、包囲のために門にごみが来なくなりました。人々 が、ごみまで食べていたのです。ですからこの人たちは、本当に困っていました。ですか らこの晩、薄明りで、彼らがすわっていると、ひとりがくぼんだ目で3人を見て、こう言 いました。「おれたちゃ、死ぬまでここにすわっていてもしょうがない。何とかしな きゃ、死んでしまうぞ。サマリヤの町に行ってもしょうがない、みんな飢え死にしてい る。シリヤの陣営にはいり込もう。もしかしたら、彼らがおれたちをあわれんで、生きの びられるかもしれない。もしかしたら、殺すかもしれない。だから何だ。いずれにしても 死ぬまでのことだ。」それで、この4人の者は、薄暮の暗やみの中で、シリヤの陣営に入 り込むため出発しました。暗やみの中で彼らが進んでいたので、私の想像ですが、ひとり がつまづき、転んで、「うぅっ。」と言ったのではないかと思います。他の者が、起き上 がらせようとして、「うぇ、ヒーッ」と言ったと思いますが、それが何であれ、シリヤの 守衛がその音を聞いて、戦車だと解釈しました。ある者が言いました。「おい、聞いた か。」「ああ、何だろう。」「聞いてみろ。聞いてみろ。」「うぅっ。」「戦車みたいだ

な。」「イスラエルの王が、エジプト人を雇って、軍勢が戦車で来ているのだ。おれたちを滅ぼすぞ。ここから逃げよう。」彼らは、陣営を抜けて逃げ出しました。ある人が言いました。「おい、一体どうしたんだ。」「エジプト人が来た!」すると、すべての者が逃げ始めました。天幕やその他すべてのものをそのまま置き去りにして、逃げました。彼らは逃げ帰りました。4人のらい病人が最初の天幕に来て、入り口の幕を引き上げると、夕食が食卓に用意されていました。それで食べ始めました。お腹がふくれてきて、ひとりが他の天幕に入り、「ここにも、食事がすべて用意されているぞ。食べよう!」と言いました。それで2番目の天幕でも食べ始め、そのひとりが食べるのをやめて、こう言いました。「ちょっと待てよ。もしサマリヤにここの食料のことを知らせなかったら、まずいことになるぞ。これで誰も腹をすかせたまま寝る必要がなくなる。すべての人を満たすほど、たくさんあるぞ。」

それで、彼らはサマリヤの門に戻り、壁のことろを歩いている門衛を呼び、こう言いま した。「私たちは、シリヤの陣営から戻ってきたのです。からっぽでした。相手は逃げ去 りました。彼らの天幕には食べ物が十分にあります。全員に行き渡るほどの量です。」そ れで門衛は王のもとに走っていき、「私はたった今、報告を受けました。シリヤ人が陣営 を去り、食べ物が全員に行き渡るほど十分にあります。」と言いました。そして王は、 「これはわなだ。あのシリヤ人らは、私たちが非常に飢えているのを知っている。やぶの 中に隠れているのだ。私たちが門を開けて、いっせいに出て来るのを待ち、私たちに飛び かかって滅ぼすつもりだ。誰もこの町から出させるな。門に錠をしておけ。」ある者がこ う言いました。「王さま。もしよろしければ、私は、まだ食べられていない馬がどこにあ るのを知っています。その馬に乗って、シリヤ人がいるかどうか見に行きたいのです が。」王は、「行くがよい。」と言いました。それで彼は馬に乗り、朝に戻ってきて、 「あの報告は本当です。私は、はるばるヨルダン川まで行ってきましたが、ヨルダン側の こちら側には、シリヤ人がだれひとりいません。私が見たのは、彼らが早く逃げられるよ うに捨てていったくつや上着だけでした。だれもいないのです、王よ。」それで王は前 日、「たとい、神が天に窓を作られるにしても、そんなことがあるだろうか。」と言った 人に、「あなたは行って、秩序を維持しなさい。彼らが順序を守って、食料を得られるよ うにしなさい。」と言いました。それでこの人は出て行って、「全員、とまりなさい、一 列になって・・・」と言いましたが、人々はとても腹をすかせていたので、彼の上を歩き 踏みつけ、彼は死にました。彼は見たが、食べることはありませんでした。これが、不信 仰に対する犠牲です。「あなたは見るが、それを食べることはできない。」彼は、神の約 束を疑いました。神は約束を成就されましたが、彼は神の約束を疑ったので、それをいた だくことはできませんでした。私たちは、神の約束を疑って、どれだけ機を逸してきたで しょうか。

アブラハムは、信仰がますます強くなって、信仰が弱まって疑うようなことをせず、「反対に、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰しました。」これはどういう意味でしょうか。アブラハムは、あちこちを歩き回って、主を賛美をしていたのです。「主よ、子を与えてくださり、感謝します。おお、感謝します。感謝します。感謝します。私が子を持てるなんて、考えてもいませんでした。ああ、何とすばらしいのでしょうか。」彼はだた、あちこちを歩き回って、いつも笑っていました。そのため、子が生まれたとき、「笑い」という名がつけられました。「神が私に子を与えてくださる。」という喜びで笑っていたのです。私たちがタイム・マシンに乗り、紀元前1900年にダイヤルを合わせることができたと仮定します。ヘブロンに降り立ちます。ベエル・シェバまで歩くことに決めます。町を出るとすぐに、羊の群れでいっぱいになっている丘が見えます。広々とした天幕があります。私たちが通り過ぎると、かしの木の下にすわっている老人がいます。彼は、「ほら、こっちに来て、すわりなさい。ベエル・シェバまでは、暑くて長い道

のりなのだから、ここでいっぷくして行きなさい。妻が、お茶とコーヒーでも用意します から。」と言っています。それで私たちは座って、この老人にいっしょに話します。とて も興味深い人です。というのは、彼が時々私たちのことを忘れて、神を賛美するからで す。「おお、感謝します。何とすばらしいのでしょうか。わくわくします。感謝します。 感謝します。ああ、あなたはすばらしい方です。」ついに私たちの好奇心は頂点に達し て、「あの、本当に幸せそうですね。どうなさったんですか。」と言います。「ああ、私 の妻に子が与えられるのよ。」「かなり年を召しておられますよね。」「ああ、100歳 だが。」「若い奥さんをお持ちですか。」「いいや、90代じゃ。」「結婚して、どのく らいになるのですか。」「ええ、どのくらいだっけかな。78年目だね。」「それで、子 どもが生まれるのですか。」「ええ、ええ、その通り。」「お子さんは、何人お持ちです か。「ひとりもいないね。まだ子どもは生まれていない。」「ああ、それであなたは、こ んなに・・・すばらしいですね。こんなにたってから、子どもですか。これはすばらし い!これで、あなたがこんなに喜んでいて、幸せなのがわかりました。奥さんは何ケ月目 ですか。」「えっと、まだみごもっておらんがね。」私たちは、首を傾げて(訳者注:直 「額をかいて」)、ベエル・シェバに向かいながら、「そっとしといてやろう。 喜んでいるんだから。」と言います。彼は、信仰がますます強くなって、神に栄光を帰し ました。神の約束を喜んでいました。私たちは神の約束を受け取り、神が真実な方である ことを知って、ただ喜ぶ必要があります。神は、ご自分の約束を守られます。「神は人間 ではなく、偽りを言うことがない。人の子ではなく、悔いることがない。神は言われたこ とを、なさらないだろうか。約束されたことを成し遂げないだろうか。(民数23:19)」た だ神の約束を受け取り、神が約束を与えられたことを喜ぶのです。

信仰の最後の鍵は、「神には約束されたことを成就する力があることを堅く信じ」たこ とです。神はおできになります。自分の問題を見て、神がそれを解決することがおできに なると信じますか。自分の状況を見てください。神はそれを対処することがおできになり ますか。神はおできになりますか。あなたが、もちろん神にならできます、と言うなら、 すばらしいことです。あなたはすでに、4つの鍵の一つを得たことになります。神がおで きにあることを信じることです。神は、約束されたことを、成就することがおできになり ます。聖書全体を通して、私たちは、神が全てに満ち足りておられることと、全ての能力 をお持ちであることを思い起こさせられます。パウロは、すばらしいことをエペソの教会 のために主に願いました。その祈りの終わりで、「私たちの願うところ、思うところのす べてを越えて豊かに施すことのできる方に」と言いました(エペソ3:20)。神はおできにな りますか。その通りです。あなたの願うこと、思うことのすべてを越えて、豊かに施すこ とがおできになります。アブラハムは、神には約束されたことを成就する力があることを 堅く信じました。使徒パウロは、「私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、 その方は私のお任せしたものを、・・・守ってくださることができると確信しているから です。(2テモテ 1:12)」神はおできになりますか。あなたの仕えている神は、おできになり ますか。ダリヨス王は、ダニエルが獅子の穴にいるとき、泣き叫んでこう言いました。 「あなたが仕えている神は、あなたを獅子から救うことができたか。」ダニエルは言いま した。「王さま、ご安心ください。神の御使いが私のそばに立ってくださいました。(ダ ニエル 6:20-22参照) 」 3 人のヘブル人の子どもは、像を拝むことをしないことにより、獅 子の穴に投げ入れられるというネブカデネザルの脅かしを受けたとき、こう言いました。 「私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救うことができます。(ダニエル3: 17)」あなたは神が、試みや試練から、あなたを救うことができると信じますか。自分では どうしようもできなくなり、解決も答えもわからない、もう絶望的に見える状況ではどう でしょうか。おそらく、その状況は、あなたがすべてのことをし尽くしたのにどうにもな

らなかったに違いないのですから、あなたに関するかぎり絶望的なのです。神はおできになるのでしょうか。そのことを神の御手に任せ、神がしてくださると信頼できますか。みなさんにお勧めします。自分の状況にかかわる神の約束を受け取ってください。あなたの直面するような状況なら何でも、そのすべてに関連するすばらしい、尊い約束があります。そのためのみことばと約束を、神はお与えになっています。それを受け取り、それに立ってください。それよりもまず、それを疑わないでください。神が約束を与えられたことを、感謝し始めてください。

もちろん「笑い」イサクは、実際に生まれました。アブラハムの子孫であるイエス・キリストを通して、すべての国民が祝福されました。したがって、アブラハムは、神のみことばを信じ、信頼する者の父となったのです。今日、あなたが神のみことばを信じ、信頼するなら、あなたはアブラハムの子なのです。したがって、あなたは、神がアブラハムに約束されたすべてのものを相続するのです。神のみことばを神の約束を信じる者はすべて、アブラハムの霊的な子孫なのです。

ローマ人への手紙 5 章 (9 / 2 2 / 9 6) 「恵み、恵み、満ちあふれる恵み」(Romans5:20) ローマ人への手紙 5 章 2 0 節 # 8 6 3 3

交読文:詩篇86篇

私たちはローマ人への手紙5章に来ました。そこでパウロは実際に、私たちが立っている神の恵みを説明しています。今日の午後に5章を読んで、今晩の聖書の学びの準備をするときに、私たちが信仰によって義と認められることの結果を7つ見つけてください。7つの事が、信仰によって義と認められることによって起こりました。「それにもまして」あるいは、「なおさらのこと」と言って、より小さいものからより大きなものへの議論として使っているところが、5箇所あります(訳者注:英語では、how much more or much moreとなっているが、それに当たる日本語の聖書の箇所は、9節の「なおさらのことです」、10節の「なおさらのことです」、15節の「それにもまして」、17節の「なおさらのことです」、20節の「ますます(口語訳)」。)。パウロが、イエス・キリストにおいて、私たちが「それにもまして」持っているものとして示している箇所を見つけてください。そして最後に、パウロは、恵み、恵み、満ちあふれる恵み、あふれ流れる恵みについて教えています。ですから、今日の午後に5章を学ぶ時、恵みに関することに力点を置いてください。今晩の学びの前に、自分でどれだけ見つけることができるか調べてみてください。

パウロはこれまでに、ローマ書の中で、私たちはみな神のさばきに服していることを示しました。私たちはみな罪を犯しました。そして、罪の報酬は死です。自分の罪のために、私は神の怒りを受けるに値します。にもかかわらず、神は私のことを愛してくださっているので、神は私の罪を義と認めることができる備えをしてくださいました。この備えは、神のひとり子イエス・キリストという方にあります。神は、私の罪の罰をご自分の身に負って、私の身代わりに死んでくださり、私が律法によってではなく、イエス・キリストを信じる信仰によって私が義と認められるように、イエスを世に遣わして下さいました。それで5章 1 節に来ます。「ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。」ここに信仰による義認の結果の一つ目がありますから、みなさんは、あと6つ探せばよいだけになりました。

私はかつて、神と神の律法に対し反逆していました。この神との戦いが続いていると き、自分の内側に動揺がありました。自分の罪に対する罪意識と罪責感でいっぱいでし た。神の律法に対し反逆していたのは、どういうわけか神の律法が私を窮屈にして、本物 の人生を生きるのを阻んでいると感じていたからです。私が気づかなかったことは、神の 律法が、これを違反する者に対しもたらされる痛みや苦しみや破滅から、自分を助けるた めにあることでした。神がそのような痛みや苦しみから、ただ私を助けてくださろうとし ておられたことに気づきませんでした。サタンは、人に嘘をついて、欺いて、罪がとても 魅力的に見えるようにしました。罪がとても刺激的で、楽しいものに見えるようにしまし た。サタンはどうにかして、神はあなたに楽しい時を過ごさないように、人生を楽しませ ないようにしていると言って、嘘をつきました。それは、罪が表面上だけ楽しいもののよ うに見えるからです。けれども、いったん罪にのめり込むと、罪は苦痛で、破滅的である ことがわかります。罪は、身体的にあなたを潰してしまいます。感情的にあなたを潰して しまいます。そして、霊的にあなたを潰してしまいます。しかし、罪の結果に気づいた時 には遅過ぎたということが余りに多いのです。その時には、罪はすでに体を蝕み始めてい るのです。体の健康を蝕み始めているのです。今、ある習癖に手を染めなければよかった のにと思っている人が何人いるでしょうか。最初は、すばらしい、とても楽しいもののよ うに見えたのですが、今となって身体的な結果を刈り取り始めると、そのようなことに手 さえ染めなければよかったのにと思うのです。感情面でも同じことが言えます。何かを始めて、わあ、これは刺激的だと思ったのですが、今となってはそれが、自分を感情面でめちゃくちゃにしているのです。神は、そのような苦痛、痛みから私を守ろうとしておられたのです。しかし、サタンの嘘のために、それがわかりませんでした。私は、今はそのことがわかるようになりました。もはや神に反逆しておらず、神との平和を持っているのです。夜、枕の上に頭を乗せて横になり、上を見上げて、「ああ、神様。あなたは、とてもすばらしい方です。あなたを愛しています。」と言うことができます。神から逃げようとしていませんし、隠れようともしていませんし、もはや神と戦ってはいません。神との平和を持っているのです。神との平和を持つことは、神と戦っていないことは、すばらしいことです。

神との平和を持っているだけではなく、イエス・キリストによって、いま私たちの立っ ているこの恵みに信仰によって導き入れられたのです(5:2参照)。これが、2番目の結果で す。これで、みなさんがお読みになる時に探すのは5つだけになりました。私たちは、イ エス・キリストによって、神の恵みに導き入れられています。神との平和を持っているだ けではなく、私は神の恵みの恩恵を受ける者となりました。恵みは、値しないのに働きも ないのに受ける、神からの祝福と益です。神はこれを、私がみことばと御子イエス・キリ ストに信頼するようになったゆえに、惜しみなく与えてくださいます。神が、私をイエ ス・キリストを信じる信仰に導いてくださり、私がイエスによってこの恵みに導き入れら れているので、神は私に下さろうと願っている、すべての愛と祝福を注ぐことがおできに なるのです。日々私は、神のすばらしさと愛で圧倒されています。私たちは、イエス・キ リストによって、この恵みに導き入れられています。神は、私に何一つ借りがありませ ん。神が私を愛されているので、私が値しない祝福を、ご自分の愛の性質ゆえに与えて下 さっています。恵みは、私が原因で生じたものでは全くありません。私が何かした功績、 私がなすことができた功績によって、神が私に祝福を与えるようなものは、全く何もない のです。神は、私がすばらしいから、報酬を与えてくださっているのではありません。神 は私の義に応答されているのではないのです。神は、ただ私を愛するご自分の愛の性質に 応答されているのです。神の恵みとあわれみは、主権的なものです。神に、支払わなけれ ばならない負債があるのではありません。したがって、神はあわれみと恵みを、ご自分が 与えたいと思われる人に、そのあわれみと恵みをお与えになります。神は、「わたしは、 あわれもうと思う者をあわれむ(出エジプト33:19)」と言われました。誰も、それに議論を はさむことはできません。

私が受けるに値するなら、恵みは働くことはできません。もし、私が受けるに値するなら、それは恵みではなく、借りがあることになります。イエスは、こう言われました。「ふたりの人が、祈るために宮に上った。ひとりはパリサイ人で、もうひとりは著しい罪人であった。パリサイ人はこんな祈りをした。『父よ。私はほかの人々のようにゆする者、姦淫する者ではないことを、感謝します。』」このパリサイ人は、たぶん向こうにいる罪人を見ていたのでしょう。その罪人に聞こえよがしに言ったのかもしれません。「あの者のように、私は姦淫する者ではない、ゆする者ではない。私は、10分の1をささげております。私は、これもしておりますし、あれもしております。」云々と。イエスは、言われました。「この罪人が、目を天に向けようともせず、恥ずかしさに頭を垂れて、自分の胸をたたいて言った。『神さま。こんな罪人の私をあわれんでください。』」イエスは、「この人が、義と認められて家に帰りました。」と言われました(ルカ18:9-14参照)。この人は、自分が値することに基づいて神のところに来たのではありませんでした。神のあわれみに基づいて神のところに来たのでした。一方、もうひとりの人は、自分はこんな善人だ、自分はこれに値するといったことに基づいて神のところに来ました。彼は、義

と認められて家に帰ることがありませんでした。なぜなら、自分のすばらしさや、自分の価値といった、全く誤った根拠で神に近づこうとしていたからでした。自分の側に値するものがあるなら、恵みはありえません。神が自分に恵みを示していただくために何かするという考えから、また、自分の求めている祝福は自分が受けるに値し、その価値があると神に対し証明することから、何とかして離れなければいけません。問題があって、それは、ほとんどの人がそうだと思いますが、良い行ないには褒美を、悪い行ないには罰をという考えを持って育ったことです。「もしよい子にしているなら、おやつのおかわりができるが、悪い子ならおやつはもらえない(訳者注:英語ではデザートとなっているが、日本では食後に子供におやつを与える習慣がないので単におやつとした。)。」ですから、良い行ないには褒美、悪い行ないには罰という考え方が、心に刻みつけられ染みついて、その考えを神にまで当てはめてしまいます。しかし、それは律法です。でもいたちは、律法の下にいるのではなく、恵みの下にいるのです。神は、ご自身の愛を、良いものを、恵みを、私たちは全く、完全に受けるに値しない者なのに与えてくださいます。

つまり肉には、神の恵みが与えられる場がないことを意味しています。いや、高ぶる肉 は神の恵みを憎みます。高ぶりや誇りに恵みが与えられることがないからです。旧約聖書 に出てくる、ナアマンという名の人を覚えていますか。彼はらい病人でした(以下2列王 5章参照)。ナアマンはシリアの将軍で、らい病を患っていました。ナアマンには若い女中 がいて、その女は、「イスラエルにはあなたのらい病を直してくれる預言者がいます。」 と言いました。それで、ナアマンは王の許可を取り、おびただしい褒美の品を揃えて、自 分のたくさんの将校を引き連れてイスラエルに下って行きました。イスラエルの王のとこ ろに行き、私のらい病を直していただきたいと言いました。すると王は狼狽し、「戦争を ふっかけるために、言いがかりをつけようとしているに違いない。」と言って、ひどく狼 狽しました。エリシャはそれを聞くと、「彼を私のところによこして下さい。そうすれ ば、かれはイスラエルに預言者がいることを知るでしょう。」と言いました。それで、ナ アマンはエリシャの家にやって来ました。それで、エリシャの使いのゲハジが入り口まで 応対に出て、ナアマンにこう言いました。「主人はこのように言っております。ヨルダン 川へ行って7たび水に浸かりなさい。そうすれば、あなたのらい病は直ります。」する と、ナアマンは怒りました。怒りで、煮えくり返っていました。ナアマンは言いました。 「何ということだ。俺が将軍だということがわからないのか。あいつは、わざわざ自分で 戸口まで来ることもしなかった。使いをやって、私に話した。」ナアマンは激しく怒り、 シリアに帰ろうとしました。「あんな汚い泥だらけのヨルダン川に腰をかがめて入れと言 うのか。我々には、ダマスコに美しい、きれいな川があるではないか。」と、怒って言い ました。そうして一行がヨルダン川の近くに来ると、しもべのひとりが、「ご主人。も し、あやつが、何かあなたに勇気のいる偉業をするようにと命じたとしたら、あなたはそ れを喜んでなさったことでしょう。しかし、あまりに簡単なことを命じられたので、あな たは機嫌が悪くなっておられます。しかし、やってみて、損することはないではありませ んか。やってみてはいかがでしょうか。試されてはどうでしょう。」と言いました。それ で、このしもべは、ヨルダン川に7たび浸かることを説得しました。7度目に浸かってナ アマンが水から出てくると、らい病で腐って白くなっていた皮膚の部分がなくなり、皮膚 は幼子のからだのように元どおり新しく健康な肌色になっていました(訳者注:英語では ピンク色となっていますが、日本人が健康と感じる肌の色はピンクではない。)。ナアマン は直りました。さて、ナアマンは、多くの人が持っている態度を表しています。私は価値 ある者になりたい、値する者になりたい。もし、預言者が、「出て行って、7つの首を持 つ竜を殺し、3つの金のリンゴを取って、持って来なさい。そうすればあなたは直りま

す。」と言ったのであれば、ナアマンは、7つの首をもつ竜を探しに行ったことでしょう。「はい。かしこまりました。(訳者注:チャックは腕を挙げて、力こぶをつくるジェスチャーをしています。)」と。それは、何か自分を誇ることができるものです。「俺がやったんだ。俺が竜を殺したんだ。俺が金の・・・」そういうものを肉は喜びます。褒められることを望みます。しかし、神がこれほど単純にしてしまわれるのです。「ただわたしの子を信じて、信頼しなさい。」と。そうすれば、あなたの罪はすべて義と認められ、その方によって神の恵みに導き入れられ、あなたが受けるに値しない祝福と良きものとを、神はあなたに注ぎ始められます。私たちはそれに困難を覚えます。自分の肉は、それに困難を覚えます。自分の肉は栄光を求めているからです。しかし、神の恵みと信仰義認では、自分の肉が栄光を受ける余地は全く残されていません。恵みに対し私がとる適切な態度は、ただ感謝し、イエス・キリストによって神の恵みに導き入れられていることを喜ぶことです。自分の過去の罪の生活については、もはやそれは存在しません。私はキリストとともに十字架につけられました。今生きているのは、イエス・キリストへの信仰によってであり、私にとって、生きることはキリストです。

私が献身できなかったとしても、神が私から恵みを取り上げられる原因にはなりませ ん。もしそうであれば、私は律法の下にいるのです。実際、私はとてもおもしろいことを 発見しました。それは、たいてい自分が最も惨めに感じている時こそ、神がすばらしい祝 福を私に下さる時であることです。私が、「主よ、私はこのようなことを受けるに値しま せんのに。主よ、私はだめでした、あなたはご存知ではないのです、私は本当にものすご く失敗してしまいました。」と気づくとき、主はその瞬間を捉えて祝福を注ぎかけてくだ さり、「わかっているよ。でも、愛している。それでも、あなたはわたしの子どもだ。」 と言われます。そうすると、私の心に大きな確信と賛美がもたらされます。それは、神の 恵みや、神から祝福が自分の信心深さ、忠実さ、献身による報酬ではなく、私が受けるに 値しないのに神が実に愛されている証拠であることに気づくからです。神が愛されている ことをただ信じ、同意することが、大きな秘訣です。「はい。それでは主よ、あなたが私 を愛されて賢いことをされたことを、これから私が証明します。これからは、もっと良い 人になります。もっと良い行ないをします。」と言うのではないのです。私は、神に対し て、自分が将来もっと良くなる誓いや約束をしないことを学びました。そのようなことを すれば、自分の肉に頼るだけになりますが、私の肉はとても弱いのです。それに、恵みで はなく、自分に祝福を下さるよう神に要求することになります。神の祝福を期待すればす るほど、自分がこの祝福を受けるに全く値しないことに気づくようになります。もし、自 分にがっかりしてしまうなら、それは私が自分の肉に頼っていることがわかりました。誇 ることは、盲目であることがわかりました。つまり、真に神と出会っていないことだとわ かりました。なぜかと言いますと、いったん真に神と出会ったなら、誇りは、なくなって しまうからです。ペテロが真にイエスと出会った時、「主よ。私のような者から離れてく ださい。私は、罪深い人間ですから。(ルカ5:8)」と言いました。イザヤは、主が高くあ げられ、御座についておられるのを見た時、「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの 汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。(イザヤ6:5)」と言いました。ダニエ ルが主の栄光を見た時、「顔の輝きもうせた(訳者注:ダニエル 10:8 の部分の言い換え。 チャックはmy beauty turned into uglinessと言っているが、欽定訳では、my comeliness was turned in me into corruptionとなっている。Comelinessとは顔立ちの整ったとか、美し いの意味がある。新改訳の脚注では、「私の尊厳は破壊に向き」とある。)」と言いまし た。真に神と出会うと、その人は全くへりくだらせられ、高ぶりを打ち壊されます。自分 の人生で祝福が欠けているのは、受けるに値しないのに神が私を祝福してくださる信仰が 欠けているからだとわかりました。

旧約聖書でダニエルという人が、イスラエルの国とその民のために神に近づいた時、民 が正しくて補囚から救い出される価値があることに基づいて神に近づいたのではありませ ん。「彼らは、あなたを真に求めていますので、帰還するに値します。彼らは、あなたを 愛しており、正しいことをしようとしています。」いいえ、全くそうではありませんでし た。ダニエルは、これらの人々が善良で、値するという根拠ではなく、神がいつくしみ深 く、あわれみ深い方であるという根拠で、神に嘆願したのです。ダニエルがどのように 祈ったか注目して下さい。「私たちは罪を犯し、不義をなし、悪を行ない、あなたにそむ き、あなたの命令と定めとを離れました。私たちはまた、あなたのしもべである預言者た ちが御名によって、私たちの王たち、首長たち、先祖たち、および一般の人すべてに語っ たことばに、聞き従いませんでした。主よ。今日あるとおり、不面目は私たちのもので す。主よ。不面目は、あなたに罪を犯した私たちと私たちの王たち、首長たち、および先 祖たちのものです。あわれみと赦しとは、私たちの神、主のものです。これは私たちが神 にそむいたからです。(ダニエル9:5-6、8-9参照)」このように、ダニエルは、人々が値 することを神に訴えていたのではありませんでした。ダニエルは、「ああ、神よ。あなた はあわれみ深く、いつくしみ深いからです。」と言って、神のところに来ました。私たち が神のところに来るとき、その根拠が、「ああ、主よ。私は一生懸命やっております。私 がどれほど一生懸命なのかあなたはご存知です。主よ。私は祈り、求め続けてきました。 ですから、主よ。私がこんなにしたのですから、こうして下さらなければ・・・」という ものではありません。違います。もし、私が値する者であるとの根拠で神のところに来る のなら、私の得るのは地獄です。もし、神の愛と恵みに基づいて神のところに来るなら、 神は私の杯があふれるまで、祝福を注ぎ続けてくださいます。神から大いなる祝福を受け

5章12節で、パウロは面白い原則を持ち出し、こう言っています。「ちょうどひとり の人によって罪が世界にはいり、罪によって死がはいり、こうして死が全人類に広がった - それというのも全人類が罪を犯したからです。」私たちはみな、アダ ムの罪のために、罪をもって生まれ、罪の性質を持っています。アダムは、私たちひとり ひとりに罪の性質を伝えました。ひとりの人によって、罪が世界に入り、罪によって死が はいりました。私たちは時に、ひとりの人の罪によって、私たちみなが罪人になるなん て、それはちょっと不公平だと考えます。しかし私は、罪を犯すから罪人になるのではあ りません。私が罪を犯すことによって、罪人になったのではありません。私が罪を犯すの は、自分が罪人だからです。パウロは、エペソ人への手紙の中で、「あなたがたは自分の 罪過と罪との中に死んでいた者であって、そのころは、それらの罪の中にあってこの世の 流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従っ て、歩んでいました。私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲 の中に生き、肉と心の望むままを行ない、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒 りを受けるべき子らでした。(エペソ2:1-3)」と書きました。生まれながらにして罪人なの です。それが、私のアダムからの性質なのです。それは罪の性質です。しかし、もしひと りの人の罪によって私たちがみな罪人になるなら、ひとりの人の義によって私たちがみな 義となることができるのです。それで、イエスが私たちみなの新しい頭となりました。ア ダムから私は罪の性質を受けましたが、イエスからは新しい性質を受けました。「だれで もキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、 見よ、すべてが新しくなりました。(2コリント5:11) 」とパウロは言いました。「ただし、 恵みには違反のばあいとは違う点があります。もしひとりの違反によって多くの人が死ん だとすれば、それにもまして、神の恵みとひとりの人イエス・キリストの恵みによる賜物 とは、多くの人々に満ちあふれるのです。(ローマ5:15)」神の恵みが、多くの人々に満ち

あふれました。ですから、パウロは恵みについて語るときに、ここで満ちあふれる恵みについて語っています。アダムの不従順により私たちはみな罪人になりました。イエス・キリストの義により、イエス・キリストを信じ信頼する私たちは、その信仰によって義と認められ、神から正しい者と宣言されているのです。

私たちに対する神の恵みの最も大きな現われは、もちろんイエス・キリストという方にあります。パウロは、ローマ人への手紙8章で、「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。(8:32)」と述べています。もう既に神はひとり子を私たちに与えてくださったのですから、今日私たちは何を必要としていますか。恵みによって、神は価なしに与えて下さいます。神は既にひとり子を喜んで与えて下さいました。その神が、すべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょうか。17節です。「もしひとりの人の違反により、ひとりによって死が支配するようになったとすれば、なおさらのこと、恵みと義の賜物とを豊かに受けている人々は、ひとりの人イエス・キリストにより、いのちにあって支配するのです。」アダムの罪により、死が全人類を支配するようになりました。それでは、なおさらのこと、キリスト・イエスにあるいのちが、この神の豊かな恵みが支配します。

律法が与えられる前に、死が支配していました。律法が与えられたのは、人を義とする ためではありませんでした。神が、「これが律法です。あなたがたはこの律法を守りなさ い。そうすればあなたがたは義となります。」とおっしゃったのではありませんでした。 律法の目的は、そうではありませんでした。律法が与えられたのは、私たちが極度に罪深 いことを示すためでした。私たちが罪の中で完全に失われていることを示すためでした。 神の基準から、実にかけ離れていることを示すためでした。ですから、律法はただ私たち の罪意識を増幅させただけでした。自分のしていることが悪いことかも知らずに、行なっ ていました。律法が行なってはいけないと言っているので、突然、自分が思っているより も自分は悪い奴だ、と気づくのです。律法は、人を義とすることはできませんでした。私 たちの罪をあらわにしただけでした。しかし、パウロが述べているように、「罪の増し加 わるところには、恵みも満ちあふれました。(5:20)」満ちあふれる神の恵みによって、私は 義と認められました。それにより、私は神との平和を持っているのです。それにより、私 は神の祝福に、神の豊かな愛に導き入れられているのです。それは、イエス・キリストに より、この恵みが私に与えられているからです。このために、20節でパウロは、「律法 がはいって来たのは、違反が増し加わるためです。しかし、罪の増し加わるところには、 恵みも満ちあふれました。」と述べているのです。

この神の恵みを発見したことは、私にとって、霊的に起こったことで最も偉大なことでした。私と神との関係に大変革を起こしました。ですから、私が説教をするときにそれを強調するのが好きなのです。恵みは、私に大変革を起こしたからです。長いこと、私は価値ある者になろうとしていました。長い間、神のいつくしみや祝福を受けるに値する者になろうとしていました。そしてある日、神の恵みを発見し、私が受けるに値しないのに、神は私を祝福したいと願われていたことがわかりました。神は愛を、私は値しないのに示そうと望まれました。神の恵みと祝福を受け始めるようになり、真の賛美とは何かがわかるようになりました。かつて私は、賛美が神の祝福を受ける手段だと考えていました。「私たちが今晩ここにいるのは神の祝福を受け取るためです。主を賛美しましょう。主は、人々の賛美の中に住まわれるから、主の祝福が私たちに降り注がれるまで、主を賛美しましょう。」と人が言うのをよく聞きました。しかし、これは真の賛美ではありません。これでは、神が中心ではなく、自分が中心になっています。「私は祝福が欲しい。主を賛美するのは、主にうまく取り入って、祝福をしてもらうためだ。」私は、真の賛美

が、祝福への応答として、自分の心から自発的に出てくるものだとわかりました。神が祝福して下さるからです。私は、とても惨めで、罪に悩まされて、とても情けないと思っていたのです。「ひどい失敗をした。主よ、また、だめでした。ごめんなさい、主よ。」と言っているのに、神はすばらしい祝福を降り注いでくださるのです。それで、私は、「とんでもありません、主よ。もったいないことです。信じられません。主よ。」と言います。しかし、それが真実です。賛美が自発的に自分の心から出てきます。それは、神があまりに私によくしてくださるからです。神があまりに寛大であられるからです。ですから、神の恵みを発見すると、真の賛美と礼拝をするようになります。まさに、神はそれを望んでおられるのです。神が下さったすばらしい恵みへの応答として出てくる、神の民からの真の賛美を神は望んでおられるのです。

ニュートンは、かつて奴隷商人でした。彼はひどい罪の生活をし、飲んだくれで、人が できうる全ての悪を行なった人でしたが、ある日、神の恵みと信仰による義認を発見しま した。神の恵みを発見し、「驚くばかりの恵みなりき、この身の汚れを知れるわれに(聖 歌229番)」と書きました。チャールズ・ウェスレーは、神の恵みを発見し、「わが主を 十字架の悩みと死にまで、追いやりまつりし我をもかえりみ、救いの恵みにあずからしめ たもう、み神の愛こそまことの愛なれ。(賛美歌第二編230番)」と言いました。ハルダ ー・リレナスは、「ああ驚くべきイエスの愛よ、罪を飲みさる大みめぐみよ、いかなるも のもたちかえらば救いたもう主の恵みよ、恵みの深さ広さはかりうる者なし。深さ広さた れかはかりうる。汚れに汚れし身も恵みにて救わる。尊き御名をたたえよ、たたえよ。 (聖歌699番)」と書きました。ジュリア・ジョンソンは、「罪に満てる世界、そこに住 む世人に、『いのち得よ』とイエスは血潮流しませり。ああ、恵み!はかりしれぬ恵み。 ああ、恵み!我にさえ及べり。(聖歌593番)」と書きました。あなたは今日、自分の罪 が赦される神の恵みを発見します。けれども、これは始まりにしかすぎません。一旦あな たが、神の御子イエス・キリストを信じる信仰によって、神から義と認められ、赦され、 無罪と宣言される関係に入ると、門戸が開かれて、日々神があなたに祝福を与え、恵みを 注ぎ始められます。あなたは値しない者、価値のない者なのに、門戸が開かれて、今はイ エス・キリストによって、この恵みに導き入れられています。

ローマ人への手紙6章(9/29/96)

「私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか」(Romans6:1) ローマ人への手紙 6 章 1 節 # 8 6 3 4

交読文:イザヤ書55章

私たちは今ローマ書を学んでいますが、聖書通読の学びは今日で6章に来ました。そこでパウロは、「それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。(6:1) 」と述べました。これまでは、ローマ 1 章においてパウロが、「私はイエス・キリストの福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシャ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。(ローマ1:16参照)」と告げたことについて、私たちは発見をしました。しかし異教の世界は、神を知らなかったと言って、罪がないと訴えることはできません。というのは、神は、ご自身を被造物に現して下さったからです。それで、彼らには弁解の余地はないのです。「というのは、彼らは、神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなったからです。彼らは、自分では知者であると言いながら、愚かな者となり、(1:21-22)」「それは、彼らが神の真理を偽りと取り代え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。(1:25)」これが、今日私たちが見る世界の状態です。つまり、神の真理を偽りと取り代え、造り主の代わりに造られた物を拝み、これに仕えているのです。

レビ記20章13節で、主は、こう言われました。「男がもし、女と寝るように男と寝 るなら、ふたりは忌みきらうべきことをしたのである。」これは、神が言われたことで す。でも今日、それは忌みきらうべきことではなく、神によしと認められていると言うの を聞きます。神が特定の人たちを、このような身体的な異常型にお造りになったからだと 言います。彼らは女ではなく、他の男に引きつけられます。今日、造り主の代わりに造ら れた物を拝み、仕えている人を見ます。でも、これは非合理的です。母なる大地を造られ た神ではなく、母なる大地を拝んでいる人がいます。人間の体を拝んでいる人がいます。 ただ、人間の形の美が好きなのだと言います。そして、ポルノに入っていく人がいます。 しかし、ポルノがその人に入り込んでしまうのです。そして、ポルノに中毒になります。 さらに、ポルノを見ることで快感やスリルを得るために、もっと、もっと、あからさまな 性的描写を求めるようになります。けれども、ポルノにおぼれたために、生活が破壊され たという人の話を実に多く聞きます。セックス、人の生殖能力を拝んでいる人がいます。 とは言っても、性欲それ自体には、生来的に何か悪いこと、邪悪なことがあるのではあり ません。神は、人に性欲を与えられました。神がアダムとエバを地上に置かれた時に、 「生めよ。ふえよ。地を満たせ。(創世1:28)」と言われました。ですから、性欲によって 男と女が互いに引き寄せられ、子供を生み、ふたりが一体となることは、神の目的でし た。自分の子供たちを見て、半分は自分でもう半分はケイだとわかります。よい方の半分 がケイの分ですが。でも子供たちは、それぞれ私たちふたりの半分づつを持っています。 私たちふたりとも、子供を生むのに寄与しました。でも子供にあって、私たちは一体で す。一体となりました。それは、神の意図されていたことであり、神の目的でした。その ために、神は私たちに性欲を与えて下さったのです。けれども、私たちが性欲に、縛られ たり支配されたりするようには意図されていませんでした。もし、神が私たちに性欲を与 えられなかったとしたら、神がアダムにエバを連れて来られて、「これが女だ。」と言わ れたとき、アダムは、「はじめまして。お目にかかれて嬉しいです。今日の午後は、釣り に行くつもりです。」と言っていたでしょう。そこで、話しはそれっきりになってしまっ

たことでしょう。みなさんは今日、存在していなかったでしょう。

さて、パウロはローマ書1章でこう言いました。「彼らが神の真理を知ろうとしたがら ないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、(1:28)」「彼らが神の真理を偽りと取り 代え、・・・神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、女は自然の用を不 自然なものに代え、同じように、男も、女の自然な用を捨てて男どうしで情欲に燃え、男 が男と恥ずべきことを行なうようになり、こうしてその誤りに対する当然の報いを自分の 身に受けているのです。(1:25-27) 」男が、別の男と結婚することについて、どう言うこと ができますか。不自然です。聖書は、終りの日に、人々が不自然な情欲を持つことを話し ています(訳者注:2テモテ3:3に"Without natural affection"とあるが、日本語訳では「情け知 らずの者」となっている。)。男が男と結婚することは、自然ではありません。子供を生 むことはできません。神は、性欲をおもちゃのように、慰みのために使ったり、刺激を得 るために下さったのではないのです。私たち男と女が互いに引き寄せられるという目的と 計画をお持ちでした。実際、イエスが結婚についてパリサイ人に話された時、「『創造者 は、初めから人を男と女に造って、「それゆえ、人はその父と母を離れて、その妻と結ば れ、ふたりの者が一心同体になるのだ。」と言われたのです。それを、あなたがたは読ん だことがないのですか。』(マタイ19:4-5)」と言われました。イエスは、それが自然だ、 そのように神が初めにお造りになったのだ、と言われたわけです。使徒パウロは、コリン ト人への手紙を書き、「男はそれぞれ自分の妻を持ち、女もそれぞれ自分の夫を持ちなさ い。(1コリント7:2)」と言いました。最高裁というか、実際は議会が、結婚は男と女の関係 であると宣言した法律をつくらなければならないとは、実に、私たちの時代、また私たち の社会に対する悲しい告発です。そんなこともわからない人がいるなんて。その他の関係 は、どのような関係も不自然なのです。しかし、私たちの社会の中には、同性に対し引き 寄せられる人がいます。みなさんに信じてもらいたいと、この人たちが思っているほどに は多くはいませんが、同性に対し引き寄せられる人がいます。最も最近のシカゴ大学の調 査によると、同性愛のライフ・スタイルを、同性愛の暮らしをしている人は、0.7%で あると示されています。10%とか、40%とか、彼らが主張したいほどではなく、わず かり、7%が、同性愛のライフ・スタイルをしていることが示されました。しかし、聖書 は、同性愛の罪は、姦淫の罪、あるいは不品行の罪よりもより悪いのではないとも言って います。したがって、彼らが神からさらに大きなさばきを受けると考えてはならないので す。なぜなら、罪は罪だからです。罪に等級付けをしているのは、人間なのです。私たち はある罪を見て、「ああ、そんなに悪くない。」「ああ、あれは、ずいぶん悪い。」「あ あ、それはひどい。」「ああ、それは赦せる。」と言います。私たちはランク付けをしま すが、神はそのようなことはなさいません。罪に関しては、罪は罪です。「罪から来る報 酬は死です。(6:23)」何をしたかは関係ありません。「すべての人は、罪を犯したので、神 からの栄誉を受けることができ(3:23)」ないのです。

ですから2章で、パウロは、他人をその人の罪のためにさばいてはならないことを示しています。それは、私たちみなが罪の罰を受けるべき者だからです。神の知識と神の律法を受けた者は、罪を犯している人をさばきがちになることがよくあります。しかし私たちの判断は、いくらよく見ても、誤りを免れません。2章で、パウロは、私たちはみないつの日か神の正しいさばきを受ける、神が実際、何が正しいのかを判断されると示しています。3章でパウロは、ユダヤ人も異邦人も双方ともに罪人であると示しています。「義人はいない。ひとりもいない。神を求める人はいない。(3:10-11参照) 」人は、自分の行ないによって、自分が良いことによって、義と認められることはできません。人は、律法を守ることによって、義と認められることはできません。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。しかし、神は、律法とは別に、義なる立場を備えて下さいました。神が

人類の贖い主として備えられたイエス・キリストへの信仰によって、ユダヤ人も異邦人も 同様に、義とされることができるのです。イエス・キリストを信じる信仰によって義とさ れるのです。そして4章でパウロは、アブラハムが神の約束を信じたので義と認められた 人の古典的な例だと、示しています。パウロは、こう言っています。「聖書は何と言って いますか。『それでアブラハムは神を信じた。それが彼の義とみなされた。』とありま す。(4:3) 」ですから神は、約束の中に、信仰による義の原則を確立して下さいました。で すから、信仰によって神の約束を信じる私たちは、私たちがイエス・キリストを信じ、イ エス・キリストをとおしての神の約束を信じたので、神の前に義と認められました。アブ ラハムが義と認められたのは、律法が与えられる前でした。ですから、アブラハムが義と 認められたのは、律法を守ったからではありませんでした。アブラハムが義と認められた のは、ある特定の儀式を行なう前でした。したがって、義は、特定の儀式を行なうことに よってもたらされるのではありません。5章でパウロは続けて、神が私たちを愛されてい るので、神が私たちの罪を赦して下さり、私たちが神との平和を持つことができるよう に、神がその道を備えて下さったことを示しています。あなたが罪の中にいる限り、神と の平和や交わりを持つことはできません。神は、預言者イザヤをとおして、このように言 われました。「主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないので はない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなったからだ。 (イザヤ59:1-2参照)」いつもそうなのですが、神はあなたのことを愛されているので、神 はこのような不和あるいは仕切りを望んでおられません。それで、神は、イエス・キリス トをとおして、私たちの罪が取り除かれ、信仰による義認によって私たちがこのすばらし い神との平和を持つことができる道をつくって下さいました。また、イエス・キリストを とおして、神に導き入れられ、神の愛と交わり、導き、助けを受けることができるように なりました。「しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んで くださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。(5:8) 」そして、パウロは、「罪の増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。(5:20)」と 告げて5章を閉じています。

そして6章になります。そこで、パウロは次のように述べています。「それでは、どういうことになりますか。恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。(6:1) 」神は罪人を愛されるので、私の罪は、神が私に愛を、恵み、お示しになる機会を提供しているので、名誉とされるべきであり、神は多くを赦して下さる方であり、とても親切で、とても忍耐深い方なので、神がどれだけ愛の方であり、親切な方であるかを人が見るように、私は罪を犯し続けるべきだ、と議論する人がいるかもしれません。「恵みが増し加わるために、私たちは罪の中にとどまるべきでしょうか。(6:1) 」そこで、パウロは、絶対にそんなことはありません、そんな考えは、消え失せてしまえ、と述べています。そしてパウロは、「罪に対して死んだ私たちが、どうして、なおもその中に生きていられるのでしょう。(6:2) 」と原則を導入しています。彼は言いました。「それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくパプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるパプテスマを受けたのではありませんか。(6:3) 」あなたが水から出て来た時には、キリストにある新しいいのち、霊のいのちでした。ですから、もはや罪はあなたのからだを支配しないのです。「死んでしまった者は、罪から解放されているのです。(6:7)」

誰も誘惑に免疫がある人はいません。私は、罪の誘惑を受けます。みなさんも、罪の誘惑を受けます。私たちのうち、誰も誘惑に免疫がある人はいません。私を誘惑するものは、あなたを誘惑しないかもしれません。あなたを誘惑するものは、私を誘惑しないかもしれません。罪の中で、私に理解できないものがたくさんあります。そのような分野で

は、私は全く誘惑を受けません。実際、私に嫌悪感を抱かせます。ですから、私は、その ような種類の罪を犯している人のことが理解できません。しかし、私が好んでいるような ものもあります。その特定の罪に捕らえられている人のことはわかる気がします。私も、 そのような分野で誘惑を受けているからです。ですから私たちは、「これは、想像の域を 越えるね。実に変だ。」と言って、そのようなことをしている人を厳しくさばいてしまう 傾向があります。そのような人に対してさばく傾向にあるのに、「私も特定の状況下や、 環境下ならするかもしれない。」と思って、ある人たちを大目に見てしまいます。しか し、私たちが気づいていないことは、私たちが生物学的な欲求や渇望に従って肉の欲に負 けてしまうと、私たちは自分の欲望の奴隷になることです。それで、人は罪の奴隷です。 「私は生まれつきこうだ。私は生まれつき、特定の異常型の欲求をもっているのだ。こう させているのは私の遺伝子のせいだ。」と言って、自分を大目に見ることはできません。 人は、自分の行動に対し、生まれつきこうだからというせいにします。もし、それが正当 な議論なのであれば、人は、このようにも言うことができるのです。「私は生まれつき物 凄い性欲の持ち主で、一人の女では到底私の性欲を満足することはできない。私の性欲は 異常で、私の妻は、私の性的必要を満たすことができないので、私は売春婦の所へ行っ て、自分と寝てくれる女なら何人とでも寝る。私は、生まれつきこうだ。私の性欲は異常 だから。」と。すると、あなたは、「ああ、そうですか。生まれつきですか。」というこ とになります。あるいは、このように言うこともできるでしょう。「私は、生まれつき心 に苦みと憎しみを持っています。私は、人を傷つけるのが好きです。だから、私はいろい ろなところに行って、人を殴るのです。これは、生まれつきです。人の頭を殴ると快感を 得ることができるのです。私は、生まれつきこうなので、大目に見てもらえるはずで す。」と。アル中のせいにだってできます。「私は、生まれつき、アルコールを代謝でき ません。ですから、私は、アル中なのです。」自分は生まれつきだからと言って、私たち は、自分を大目に見てもらおうとしてきました。そうです、もちろん生まれつきです!聖 書は、私たちはみな「咎ある者として生まれ、罪ある者として生まれた。(詩篇51:5参 照)」と教えています。だからといって、自分の罪を大目に見てもらえるのではなりませ ん。悪に対し、罪に対し、特定の傾向が自分にあるからというので、それが、私を無垢に してくれるのではありません。

麻薬中毒を例に取ってみましょう。今日全米に、何百万人もの麻薬常用者がいます。単 純なものではアスピリンから、激しいものではヘロインまで、多くの人が中毒者となって います。麻薬中毒に抵抗することができないのです。けれどもようやく、これは自分を破 壊していると気づくところまで至っているのかもしれません。「家族を失い、職を失い、 信用を失った。俺はだめだ、これは自分を破壊している。」それで、やめる決心をするの です。「もう二度とやらない、二度とやらないと約束する。」と。しかし経験則から、や めることができないことがわかります。「前にも同じことを言ったじゃないか。もう、そ のことは聞いた。」それでようやく、自分は罪の奴隷だと気づくようになります。聖書 は、「人はだれかに征服されれば、その征服者の奴隷となったのです。(2ペテロ2:19)」と 教えています。自分はこの奴隷であり、どうしようもなくて、神に助けを求めます。神は 愛の方で、その人を愛しておられるので、その人の罪のために死んで下さった御子を指し 示され、イエスを主として、新しい支配者として、自分を明け渡すように招いて下さいま す。もはや、自分の欲や願いに支配されるのではなく、イエス・キリストによって支配さ れるようになるのです。キリストにあって、新しいいのちを持つことができます。キリス トにあって、豊かないのちを持つことができます。イエスは、「わたしが来たのは、あな たがいのちを得、またそれを豊かに持つためです。(ヨハネ10:10参照)」と言われまし た。イエス・キリストを受け入れると、かつてアルコールや麻薬中毒であった古い生活

は、淫らな性的経験にふけっていた古い生活は、そうした生活は死にます。死んだのです。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。(2コリント5:17)」では、恵みが増し加わるために、古い罪の中にとどまるべきでしょうか。絶対にそんなことはありません。それに対して死んだことがわからないのですか。かつて肉と罪の力に束縛されていたその人は死んだのです。その人は、死んでいるのです。

ラウル・リースは、いったん主を受け入れると、すぐにそのことに気づきました。即座 に、古い生活は死んだ、お終いになったことに気づきました。高校生のときに、ラウル は、ボールデンパーク・ハイスクールに通っていましたが、いろいろ取っ組み合いのけん かをしたため、放校処分になりました。ラウルは、かつて、人を傷つけることに大きな快 感を得ていました。中毒状態でした。自分ではどうにもできなかったのです。人を傷つけ ることが大好きでした。人が血を流すのを、傷つくのを見るのが大好きでした。ラウル は、生まれつきこうだ、と言うこともできました。これは、生まれつきだ、怒りを持って 生まれ、人を傷つけることが大好きだ、と。それで、ラウルは、高校を放校処分になりま したが、問題ばかり起こしていました。そして、ついに、裁判官に、戦いたいなら海兵隊 に入隊しろ、さもなくば刑務所行きだ、と言われてしまいました。それでラウルは、海兵 隊に入隊しました。海兵隊で格闘技を学び、ベトナムに派遣されました。そこの戦線で、 ラウルは人を殺し始めました。人を殺すのに飢え渇きを覚えるまでになりました。人を殺 すことから、人が死ぬのを見ることから快感を得ました。そのような快感にふけりまし た。ラウルが度を越し始めたので、海兵隊すら心配し始め、敵との戦線からラウルを連れ 戻しました。心理学者がラウルに話をし始め、ラウルは、「みんな嫌いだ。お前も嫌い だ。誰を殺しているかは関係ない。お前も殺してやる。」と言って、机を飛び越え、心理 学者をバラそうとしました。それで看守に来てもらい、ラウルを監禁室に入れ、アメリカ に連れ戻しました。どうすればよいのかわからないので、海兵隊はラウルを除隊させまし た。ラウルは結婚し、小さな子供に、他人を傷つけることを教えることができるように、 ウエスト・コビーナにカンフー道場を開きました。「けんかになったら、やっちまえ!」 と。ラウルのカンフー道場は大繁盛でした。ラウルが、人を傷つけるのが好きだったから です。ラウルは、妻が夫の暴力に耐えられなくなり家出をしようとしているのに気がつく と、家に帰って荷物がまとめて置かれているのを見ると、「行かせるもんか。殺してや る。」と考えました。それでラウルは、散弾銃に玉を込め、椅子に座ってシャレンが家に 戻るのを待ちました。暇つぶしに、ラウルはテレビをつけました。神の恵みにより、ちょ うどその夜、私はテレビに出て、人を変える、人を新しい人にするイエス・キリストの力 について話をしていました。ラウルはメッセージを聞き、ひざまづき、神に罪の赦しを請 いました。シャレンが家に戻ると、ラウルは玄関口で彼女を迎え、「殺したりしないよ。 君を愛しているよ。俺は、新しくなったラウルだ。」と言いました。すると、シャレン は、「あなた、酔ってるわね。眠って酔いざましでもしたら。」と言いました。「ちがう んだ。俺は、新しくなったラウルだ。ほんとうに、俺は、新しくなったラウルだ。」と言 いました。こうしてラウルは、教会の門戸が開かれているときは、いつも教会に来るよう になりました。でっかい聖書を抱えて。ラウルは家で使うでっかい聖書を持っていまし た。1ヶ月ほどして、主はラウルの心に、「ラウル。放校処分になったボールデンパー ク・ハイスクールに行って、昼休みの時間に、ただ座って、あなたの聖書を読みなさ い。」と、語られました。それでラウルは、昼休みに聖書を読むために聖書を持って、ボ ールデンパーク・ハイスクールに向かいました。校長先生は、ラウルが校内に来るのを見 て警察を呼びました。それで、機動隊が出動して来ました。そして、機動隊はラウルを押 し始めました。それでラウルが、「何だ。」と言うと、彼らは、「ラウル、お前の魂胆は

わかっている。これまでに何度も手をやかされているからな。お前の魂胆はわかっている。問題を起こしに来たな。」と言いました。ラウルは言いました。「俺のことを、わかっちゃいないよ。もう俺はあのラウルじゃない。あれは、古いラウルだ。あいつは死んだ。俺は、新しくなったラウルだ。俺は、キリストにあって新しく造られた者だ。」それで、彼らはラウルを校長先生の所に連れて行きました。そこで、ラウルは、自分に何が起こったのか、なぜ来たのかを説明しました。人生がめちゃくちゃになっている子供たちを助けるためだと説明しました。校長先生は、「助けが必要だ。昼休みに来て、聖書を読んでくれ。」と言いました。ラウルは、古いラウルは死に、自分は新しい人になったことに気づきました。

私たちが知らなければいけないのは、このことなのです。その原則は、私がもはや、か つて自分を虜にしていたものの奴隷ではなく、新しい人になっていることです。かつての 人は死にました。ですから私たちは、罪に対して、古い渇望に対して、古い生活に対し て、古い願いに対して、死んだ者だと思わなければいけません。ある人が、ヘロイン中毒 だとしましょう。この習癖のために、この人は、その奴隷になりました。この習癖を続け るために、盗みやふんだくりをするまでになりました。彼は酒屋に押し入り、麻薬を買う 金を得ました。そして今、まさに買いに行こうとしています。通りの角で、向こう側に密 売人を見ました。彼は大喜びでした。ヤクが欲しくてしょうがありません。車に注意も払 わず、向こう側に走り始めました。すると、車が彼を引きました。それで、彼は死にまし た。彼のからだが、道に横たわっています。密売人が彼のところに来て、「おい、今日 は、すげえのを持ってきたぞ。これはいけるからな。」と言います。けれども、彼をその 気にさせることはありません。彼は大喜びしません。誘惑されることはありません。彼は 死んでいるのです。パウロは、このことを言っているのです。その原則は、あなたは古い 生活に対して死んでいる、ということです。罪に対して死んだあなたが、どうして、なお もその中に生きていられるでしょう。ですから自分は罪に対しては死んだ者であり、キリ ストとともに十字架につけられた者だと思わなければいけません。それは、罪の力から解 放された、キリスト・イエスにある新しいいのちを持つためであり、私は、今はいのちと 喜びと祝福をもたらすものによって支配されています。

人を奴隷にする罪の力には驚かされます。身体的にも、感情的にも、霊的にも、あなた を滅ぼそうとするものならそれは、罪です。何でも身体的にあなたを滅ぼそうとするもの は、それは罪だ、と神はおっしゃいます。神は、あなたが身体的に滅ぼされてしまうこと を望んではおられません。何でも感情的にあなたを滅ぼそうとするものは、それは罪だ と、神はおっしゃいます。神は、あなたが感情的に滅ぼされてしまうことを望んではおら れません。あなたを霊的に滅ぼそうとするものは、罪です、と神は言われます。神は、あ なたが滅ぼされてしまうことを望んではおられません。神は、罪があなたを支配すること をご存知です。罪は人を奴隷にします。そして、自分の激情の奴隷になってしまいます。 しかし神は、あなたにイエス・キリストの奴隷になってもらいたいと望んでおられます。 ですから、6章で、この新しい原則の過程が説明されています。それは、自分は、キリス トとともに十字架につけられたが、今は神に対してはイエス・キリストにあって生きた者 です。私にあるのは、新しいいのちです。この新しいいのちの力によって、私は古い生 活、自分が生まれた自然のままの人の生活において自分を破壊していたものから解放され ました。ですから、6章11節からパウロが言っていることに耳を傾けて下さい。「この ように、あなたがたも、自分は罪に対してはキリスト・イエスにあって生きた者だと、思 いなさい。ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配にゆだねて、その情欲に 従ってはいけません。また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけませ ん。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器とし て神にささげなさい。というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜ

なら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。それではどうなので しょう。私たちは、律法の下にではなく、恵みの下にあるのだから罪を犯そう、というこ とになるのでしょうか。絶対にそんなことはありません。あなたがたはこのことを知らな いのですか。あなたがたが自分の身をささげて奴隷として服従すれば、その服従する相手 の奴隷であって、あるいは罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に 至るのです。神に感謝すべきことには、あなたがたは、もとは罪の奴隷でしたが、伝えら れた教えの基準に心から服従し、罪から解放されて、義の奴隷となったのです。(6:11-18) 」だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ 去って、死にました。古い生活は、死にました。今は、御霊に従う新しいいのち、神が意 図されているいのち、神が望んでおられるいのち、神と交わりを持ついのち、豊かないの ち、栄光に満ちたいのちを持ちました。ですから、この原則に気づいて下さい。そして、 古い生活は死んだものと気づいて下さい。死んだものと思って下さい。何か破壊的なこ と、神が罪と分類されているものに誘惑を受けたとき、ただ、「それは、古い生活です。 それに関しては、私は死んだ者です。もう、それはしなくてもよくなりました。もう、そ の欲に支配されなくてもよくなりました。それは、もう死にました。私は、キリスト・イ エスのうちにあって、新しく造られた者です。」と言って下さい。そして、聖霊の力に よって、かつてあなたを支配し、あなたを滅ぼそうとしていたものから解放されてくださ い。

来週は7章ですが、パウロは、信者であっても時々経験する苦闘について話しています。私たちは、自分が救いようもなくて、罪のことは自分ではどうにもできないことがわかるまで苦闘します。そして、助けていただくために神に完全にゆだねます。したがって8章では、御霊に生き、御霊に歩むすばらしい勝利と、キリストにある豊かで満ち足りたいのちが述べられています。私たちを破滅に追いやり、滅ぼそうとするものから私たちが解放され、神の御霊と私たちの主イエス・キリストに支配されたすばらしいいのちに入れられる、神のすばらしい備えを見ていきますが、この先には、わくわくする章が待ち構えています。

ローマ人への手紙7章(10/6/96) 「問題」(Romans7) #8635 交読文:詩篇19篇

聖書通読の学びをしていますが、今週の日曜日でローマ書7章まで来ました。パウロが 7章を書いたときに、彼がどの段階の経験を話しているのか、いろいろ異なる意見があり ます。パウロは、パリサイ人であったときに律法を守り行なおうとしたが、それを行なう ことができないでいる葛藤を表しているという人たちがいます。しかし、それはありえな いと私は思います。というのは、パウロがガラテヤ人に手紙を書いたときに、以前自分が パリサイ人として生活していたことについて、「律法による義についてならば非難される ところのない者です。」と言いました(訳者注:ピリピ3:6より引用。ガラテヤ1:14参照) 。彼は、律法が外側の行動だけを取り扱っていると誤って解釈し、律法が人の態度を扱っ ている霊的なものであることを見失っていたパリサイ人と同じだったのです。パウロはこ こ 7 章で、律法が霊的であり、自分は肉的であることを発見し、律法は、彼が真にこれを 理解したときに、彼を死に至るまで罪に定めたことを語っています。私は、パウロがクリ スチャンになってから間もない頃の経験を話しているのだと思います。彼は、主イエス・ キリストの知識に至ったとき、律法が霊的であることを悟り、自分の肉で、律法の霊的な 面を守ることができませんでした。肉で守ろうとしてもがいていました。パウロは、神の 律法を見て、これを認め、これが完全であることを知り、自分の力で神の律法を守り、全 うしようと努力しました。律法は、正しいもので、良いもので、完全なものであることを 知っていたからです。けれども、神の律法を守り行なうことができないので、パウロは、 助けを呼び、神が望んでおられる人になりたいと求める葛藤の状態にまで至りました。

パウロは、律法についていくつかのことを語り、ここ7章でその洞察を与えています。 彼は、律法によっては、かえって罪の意識が生じることを教えています。神は、正しい基 準を設けられています。律法を読むと、自分の罪の意識が生じます。パウロはこう言いま した。「私は、律法が、『むさぼってはならない。』と言わなかったら、悪い欲望が罪で あることを知らなかったでしょう。(訳者注:新改訳7:7脚注参照)」ですから、律法が、 「むさぼってはならない。」と言わなかったら、あの車が欲しい、とか、あの家が欲し い、と言って、他の誰かの物をむさぼることが罪であることは、私は知りませんでした。 律法は、私たちがいかに罪深いか悟らせるためのものであることを、パウロは教えていま す。彼は、「律法は、私たちをキリストへ導くための家庭教師となりました。(訳者注: 新改訳ガラテヤ4:24脚注参照)」と言いました。私たちは、律法を守り行なうことはできな いのです。パウロは、肉と霊が対立し合っていて、肉の望むところは、霊に反し、霊の望 むところは、肉に反し、私たちは自分のしたいと思っていることができない、と言いまし た。パウロは、律法が霊的であることを理解したとき、罪が生き、つまり罪の意識が生き て自分に罪があることに気づき、私は死にました、と話しています。私が不従順であるこ とが、律法によってあばかれて、私は死にました。戒めは、私が生きるべき道を示しまし た。それは、その生きるための力を与えてはくれなかったので、いのちの道を扱う戒めで ありましたが、結局は私を死に至る罪に定めました。パウロは、「律法は聖なるものであ り、戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。(7:12)」と言いました。神の律法を 見れば、私はそれを認めなければなりません。それは正しいものです。神が行なうように 言われたこと、また行なわないように言われたことに何の反論もありません。こうした戒 めを私は認めます。けれどもそれは、私が行なうべきことを、いかに行なっていないかを 私に示し、行なってはいけないことを私が何度となくやってきたことを示しました。律法 は良いものです。戒めも聖であり、正しく、また良いものなのです。しかし、問題は、私 であり、私の罪の性質です。律法の中で神が設けられた基準に従って、私が生きていけないことが問題なのです。パウロは、律法は良いものです、と言いました。22節で、「私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいる」と言いました。私の心では、神の律法を喜んでいます。私は、全世界が神の律法によって生きていればよいのに、と思います。すべての人が神の律法に従っていたら、この世はなんとすばらしいところでしょうか。自分の家に警報装置をつける必要はありません。外出するとき、家に鍵をかける必要はありません。スーパーマケットに入るとき、車に鍵をかける必要はありません。誰も、だれからも盗みません。すべての人が、互いの権利を尊重します。私たちがみな神の律法を守ったのなら、なんとすばらしいことでしょうか。すばらしい世界になることでしょう。律法には問題がありません。律法のせいにすることはできません。問題は罪であり、私たちの罪の性質です。

私たちが、パウロと同じように、律法が霊的であることを知ることは大事です。律法が 人の心の態度を言い分けることを、神は意図されています。自分の心の態度を、行動が現 わします。これは、パウロがイエス・キリストに回心したとき受けた啓示でした。回心す る前は、彼はパリサイ人でした。パリサイ人は非常に独善的な人たちでした。なぜなら、 彼らは、自分たちが律法を守り行なっていると考えていたからです。彼らは、律法のすべ ての小さな事も守るために全生涯をささげていましたが、見せびらかすのがとても好きな 人たちでした。自分たちがいかに神の律法を守っているかを、他人に見せるのが好きでし た。彼らは、自分たちが霊的なことをだれもが知ることができるように、通りの4つ角で 祈っていました。彼らは、いつも全てのことを見せびらかしていました。それは、自分た ちが本当に正しくて霊的であるかを人々に現わすためでした。とても独善的な人たちだっ たのです。彼らは、自分たちの基準に達していない人たちを、いつも罪に定めていまし た。彼らの失敗をさばいていました。これらの人々は、あからさまに宗教的で、宗教活動 を見せびらかしていたので、イエスがある時弟子たちに、「もしあなたがたの義が、律法 学者やパリサイ人の義にまさるものでないなら、あなたがたは決して天の御国に、はいれ ません。(マタイ5:20)」と言われたときは、彼らは驚きあきれたに違いありません。イエ スがこのことを言われたときに、弟子たちは開いた口がふさがらなかったと私は思いま す。「えっ、冗談でしょう。あの人たちよりも、もっと正しくならなければいけないので すか。」けれどもイエスは、続けてご自分の言われたことのたとえを話されました。イエ スは、彼らの律法に関する教えと解釈と、神がお考えになっていた解釈を示されました。 彼らは、律法をまったく外見上だけのものとして解釈しました。けれども実際は、律法は 人の心の態度について取り扱っているのです。ですから、イエスは言われました。「昔の 人々に、・・・と言われたのを、あなたがたは聞いています。(マタイ5:21) 」これは、彼 らが律法についてあなたがたに教えたこと、律法の言っていることとして教えたことで す。それは、「人を殺してはならない。」です。「しかし、わたしはあなたがたに言いま す。兄弟を憎む者は、だれでもさばきを受けるおそれがあります。『ラカ、能なし。』と 言って、兄弟の価値を度外視する者は、最高議会に引き渡されるおそれがあります。ま た、『ばか者』と言うような者は燃えるゲヘナに投げ込まれます。(マタイ5:22参照)」つ まり、私は、「人を殺してはならない。」という律法を、だれかを憎むことで破ることが できるのです。それは、その人を殺したいほどに憎むことです。またそれは、彼らを無価 値な者と見、何の価値もないと見下すことです。今日の社会の最大の問題の一つは、今日 の社会の多くの人が、他人の権利と特権を尊重しないことです。彼らは、人間のいのちの 価値について、何も考えていません。車に乗って、人の群れに対し手当たりしだいに発砲 します。他人のいのちに対し何の価値も感じません。無法な者たちです。しかし、イエス は、あなたに憎しみがあったら、あなたは罪を犯したのです、と言われます。他人を無価

値な者のように見下したら、あなたは罪を犯したのです、と。イエスは、「『姦淫をして はならない。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたが たに言います。だれでも情欲をいだいて女を見、性的にその女が欲しいと思う者は、心の 中で姦淫を犯したのです。あなたは罪を犯したのです。(マタイ5:27-28参照)」と言われ 彼らは律法を外見の物理的な行動だけで解釈していたので、誤った解釈をしま した。彼らは、自分たちが律法を守っているように律法を解釈したので、律法によって独 善的になりました。それに対し、律法は、私たちがみな、神のさばきに服していることを 悟らせるために、神から与えられたものです。すべての人は、罪を犯しました。「義人 は、ひとりもいない。ひとりもいない。(3:10)」律法の目的は、私たちをキリストに導くこ とでした。それは、私が失敗したとわからせるものです。私は罪人で、律法によって死罪 に定められていることを悟らせるものです。ですから、私はイエス・キリストの恵みとい つくしみに導かれ、この方の恵みをいつくしみを受け取ります。パウロは、「戒めが来た ときに、律法が霊的なことを知りました。罪が、罪の意識が、罪責の認識が生き、私は死 にました。律法は、私を罪に定めました。」と言いましたが、そのことを話していたので す。私は、殺さなかったけれども憎んだ人はいます。盗まなかったけれども、むさぼった ことはあります。私は、高速道路で誰かが気でも狂ったかのように割り込んで来たら、 「あの、ばかが。」と言います。ですから、私は人を打って殺したことはありませんし、 銃で殺したこともないし、そのような暴力はしたことはありませんが、それでも私は罪を 犯したのです。だれからも盗んだことはありませんが、私はその人の物を欲しいと願った ので、罪を犯したのです。ですから、律法は私たちを罪に定めます。律法が本来意味して いたようには、だれも守り行なわなかったからです。

さて、パウロは7章で、律法が権限を持つのはあなたが生きている期間だけだ、と教え ました。しかし、あなたが死ねば、もう律法の下にはいません。けれどもパウロは、私た ちがイエス・キリストの死にあずかると、つまり、彼が、「私はキリストとともに十字架 につけられました。 (ガラテヤ2:20)」と言ったようになると、イエス・キリストとともに 死にあずかるようになると、私は律法に対して死んだことになる、と指摘しました。なぜ なら、律法が権限を持つのは、その人が生きている期間だけだからです。「もはや私が生 きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。(ガラテヤ2:20)」で すから、イエス・キリストとの関係によって、その死にあずかり、新しいいのち、キリス トの復活したいのちにあずかると、私は、神の御前で正しい者として立つために、律法の 義の要求から解放されています。私は実際、神に御前で正しい者として立っていますが、 それは律法を守り行なうことによってではなく、イエス・キリストを信じる信仰によるの です。それでは、私は偽ったり、盗んだり、姦淫を行なったり、殺人をしたりする自由が 与えられているのでしょうか。パウロの言い回しを借りれば、絶対にそんなことはありま せん。もちろんそんなことはありません。真に新生した人は、今は御霊のいのちの力に よって生き、実際は律法の下にいる者よりも、さらに献身的に生きているのです。なぜな ら、もし律法に従うだけの理由なら、いつも限度を試しているからです。最高速度65マ イルの高速道路では、67マイルまで走りますか(訳者注:カリフォルニアの高速道路 は、中心部を除いて最高速度が65マイル[=約104.6キロ])。こうして、あなたは限度を試 しています。パトカーに引き止められるまで、どのくらい速く走れるだろうか。68マイ ルだったら、引き止められるだろうか。70以下だったら、どうだろう。面白いことに、 私たちは法律が与えられると、いつもその限界を拡げようとします。違反の結果を刈り取 らずに、どこまで法律を破れるだろうか。設定された限度をどこまで越えることができる だろうか。これが私たちの性です。もし私が律法によって義と認められるのであったら、 どこまで越えても義のままでいられるのか、いつも限度を試しているのです。自分が有罪

になるまで、どこまで行けるだろうか、と試しています。けれども、キリストにある新しいいのちに生きることは、どれだけ世に近づいても救われるのだろうか、というものではなく、イエス・キリストにどれだけ近づいた生きることができるだろうか、というものです。また、自分の生活から世俗的な痕跡を取り除くことができるか、というものです。

パウロは、律法によって神を喜ばすことの問題を話しています。彼は、問題は自分にあ ると言いました。「私のうち、すなわち、私の肉のうちに、善が住んでいないのを知って います。(6:15)」「それでは、どういうことになりますか。律法は罪ですか。絶対にそんな ことはありません。律法によらないでは、私は罪を知ることがなかったでしょう。(6:7)」 問題は律法にあるのではありません。問題は、私なのです。私は罪人で、罪の性質を持っ ています。罪は私を欺き、私を殺しました。罪は、私を死に定めました。律法は聖なるも のであり、正しく、良いものなのです。しかし、又しても問題は、罪なのです。それは 12節にあります。14節では、パウロは自分が肉的であると言っています。肉的だった ので、神を喜ばせようとしても、神に従おうとしても、達成することができず、その経験 を次のように述べています。「私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、 したくない悪を行なっています。私は、自分が憎むことを行なっているからです。(7:15)」 彼はこうも言いました。「それを行なっているのは、もはやキリストにある新しい私では なくて、私の古い罪の性質なのです。私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住 んでいないことを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、しなけ ればいけないとわかっていることを、実行することがないからです。私は、自分でしたい と思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。(7:17-19参照) 」主 は、私たちに怒りについて話しておられます。それで私が、「決して怒りません。」と言 うとします。試してみてください。「もう決して機嫌を悪くしません。いつも冷静な人に なります。」こうした誓いを立てて、それを本気で思って、願うことはできるでしょう。 「かんかんに怒るような人ではなく、冷静な人になりたいと思っています。これから冷静 になります。」今日駐車場から出るまでその誓いを破らずにいることができるのかすら、 考えものです(訳者注:ほとんどの人は教会に車で来るため、教会の駐車場から出るとき は非常に混雑する。)。そうしたことを、私は願っていないわけではなく、欲していない ことではないのです。でも、私は自分の肉が、自分の罪の性質に対処しなければいけない ことが、問題になっています。

子供が成長期に家庭において、兄弟同士で、よく起こることがあります。彼らはいつ も、互いに最も建て上げるような事を言っているわけではありません。しばしばとげとげ しい、傷をつけるような事を言います。互いに礼を欠くような名前で呼びます。私たちの 家で使われていた礼を欠くような互いの呼び名は、「ばか野郎」でした。それで私は、絶 えず互いをおとしめて、この名前で呼び合っているのを聞くのにあきあきして、家族会議 を招集しました。「いいか。お前たちは口げんかをして、あの名前で呼び合っているが、 もう止めなさい。金輪際使ってはいけない。」次に兄弟姉妹に対し礼を欠く名前で呼ぶ人 は、階段に掃除機をかけなければいけないことにしました。これは家の中で、一番不快な 仕事でした。私たちには直立式の掃除機しかなくて、一つ一つの階段に掃除機をかけるの は、大変辛いことなのです(訳者注:おそらく、じゅうたんが敷かれている階段と、日本 式の掃除機よりも大型の、非常に重い米国式の掃除機を指しているのでしょう。)。私は、 これで一石二鳥だと思いました。彼らがしてはいけないことを学ぶことができるし、階段 に掃除機もかけられるわけです。それから2時間とは経っていなかったでしょう、家の中 で修理しなければならないものが出てきました。それで、私は車庫にある道具箱のことろ まで来ました。その作業に必要な道具がみあたりませんでした。さて、私たちはいつも決 まり事がありました。お父さんの道具を使いたいなら使うことはできるが、しまってあっ

たところに、絶対に戻しておかなければならない、というものでした。日曜大工をする者にとって、必要な道具が見つからないことほど、いらつくことはありません。どこに置いたか、どこにあるべきか把握しておくためには、常に道具箱の中になければなりません。5分しかかからない作業なのに、必要な道具を見つけるために1時間もかけるのは、本当にいらいらします。私の道具がそこにありませんでした!私は、叫んでこう言いました。「子供たち!ばか野郎、どいつが俺の道具を使いっ放しにしたんだ!」誰が階段に掃除機をかけたか、もうお分かりでしょう。私は、それが悪であることを知っていました。律法が良いものであることを認めるには、何の問題もありません。私は、良い律法を定めました。しかし、問題は私たちの肉の弱さです。

パウロは、この葛藤を経験しました。彼は、神が望まれている生き方について、新しい ことに気づきました。神が、自分の心の態度に関心を持っておられたことに気づきまし た。心の中には、怒りがあるかもしれません。苦みがあるかもしれません。憎しみがある かもしれません。赦さず、恨んでいるかもしれません。こうしたことを神は見ておられま す。こうしたことから、悪い行ないが出てくるのです。こうしたことから、こうした内側 にあることから、殺人、姦淫、不品行が出てくるのです。神は、それが醜い姿で現れる前 に、機会をつかんで抑えようとされました。しかしパウロは、神の御前で義となるため に、神の律法を行なうことを求めましたが、異なった律法があって、それによって神が望 まれていることを行なうことができないことに気づきました。私は自分自身の経験から、 霊的成長と霊的生活において、私の生活で神を喜ばせていない部分を神がよく示して下さ ることを発見しました。それは、神に喜ばれない自分の態度や、心に抱いていたよくない 感情です。神を喜ばせていない部分を神が示してくださると、私の最初の反応は面白いこ とに、「神よ。あなたの言わんとされていることはわかります。それは醜いです。ひどい です。神よ、もう2度とそのようなことはしません。主よ、お約束します。もう2度とし ません。」というものです。確かに、私は心から言って、自分ではそのつもりで、それが どれほど醜いかを見てそれを憎んだのにもかかわらず、自分で気づく前に、また同じこと をしているのです。それで罪意識を感じ、申し訳なく思い、「主よ。申し訳ありません。 ああ、神よ。赦して下さい。主よ。ごめんなさい。もう2度とそのようなことはしませ ん。お約束します。金輪際しません。」と言います。それなのに、またやってしまったの です。そしてどん底まで行って、「ああ、神よ。助けて下さい。どうしちゃたのでしょ う。主よ。あなたの助けが必要です。私にはできません!」と言うまで、やり続けるので す。パウロは7章の終りで、そこに行き着きました。「私は、ほんとうにみじめな人間で す。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。(7:24)」その叫び が解決の始まりです。自分ではできないと発見し、自分以外に助けを求めることから、解 決が始まります。「自分で制することはできる。いつでも止めたいときに止められる。心 を定めることはできる。いつでも思った時にできる。」と思っている限り、自分で制する ことができ、自分にはできると思っている限り、私はつまづき続けます。自分にはできな いと認識するまで、「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだか ら、私を救い出してくれるのでしょうか。」と言って、自分以外に助けを叫び求め始める まで、つまづき続けます。

神が私が自分でやることを許されない理由は、私がどれほど良いかを自慢してまわり、 誇るのを神が望まれないからです。自分がどれほど正しいことをしているかとか、醜くて 惨めなことはしていないとかを、私が誇ることを神は望んでおられません。他の人が、 「ああ、なんてすごいんだろう。あの人が何をするかご存じですか。どれほどあの人がす るかご存知ですか。ああ、あの人はすごい。」と言うために、いかに自分が勝利を得たか を話すことを、神は望んではおられません。「私は、ほんとうにみじめな人間です。私は 助けが必要です。」と気づきます。助けが来たときには、「ああ、神よ。感謝します。自分の肉の弱さのためにできなかったのに、神が私のためにして下さいました。」としか私は言えません。それで、「自分ではできない。助けが必要だ。」と気づき、助けを叫び求め始めると、解決を得はじめるのです。その時に、自分の生活の中で、自分ではできないが私ができるようにして下さる神の力を経験するのです。ですから、パウロが指摘しているように、問題は律法ではありません。問題は私の罪の性質です。肉にある肉的な性質です。しかし、神は、肉にある肉的な性質に解決をお持ちです。そして解決は、肉を強めることにあるのではなく、キリスト・イエスにある新しいいのちの力にあるのです。自分はもはや律法の権限の下にはいなくて、自分はキリストとともに十字架につけられて死んでいることを理解します。今はキリストによる信仰によって新しいいのちを持つようになり、聖霊の力のいのちを持っています。聖霊は、自分の強さを越えた強さを与えてくださいます。神が私に望んでおられる、内なる人の義の基準に生きることができるように、力量と能力を私に下さいます。

今日は、問題を取り扱いました。来週は、ローマ書8章に入り、解決を取り扱って行きます。私たちが御霊の中を歩み、御霊の中で生きることにより、イエス・キリストにあって、またこの方によって神が私たちに備えて下さっている、栄光に満ちた勝利の生活にみなさんを導きます。ですからみなさんは、メッセージの半分しか聞いていません。来週戻って来て、解決を見つける必要があります。今日は、問題しか取り扱いませんでした。医者に行く前に、自分が病気だとわからなければなりません。助けを求める前に、その必要があることをわからなければなりません。解決を探すまえに、問題があることを知る必要があります。私たちには問題がありますが、神は解決をお持ちです。私たちは、ローマ書通読の学びを続け、7章の葛藤から8章の栄光に満ちた勝利に移りますが、来週は、御霊にあるいのちを見てゆきます。

ローマ人への手紙8章(10/13/96) 「答え」(Romans8)#8636 ローマ人への手紙8章1-4節

交読文:詩篇61篇

私たちはようやく、ローマ書8章にたどり着きました。ローマ書8章に来ましたが、それは、聖書全体の中で一番心踊る章まで来たことだと感じています。この章はあまりにも盛り沢山で、日曜日の晩一回でこの章を網羅できるとは決して思っていません。できるところまでやっていきますが、主を待ち望み、主にこのローマ書8章の学びを導いていただきます。

先週、ローマ書7章では、問題について取り扱いました。神が私たちに命令されたこと や要求されたことは良いものなのです。公正で聖なることです。私は、神の律法に対し何 の反論もありません。すべての人が、殊にこの私が、それに従って生活すればと願いま す。けれども私たちが神の律法に従おうとするとき、それに逆らわせる多くの問題があり ます。律法が霊的なもので、自分が肉的であることを気づくと、特にそうです。律法は、 私の行動よりも、むしろ私の態度に関することなのです。私の肉的な性質は罪深く、神の 律法に逆らいます。私の肉が私の霊に戦いをいどみ、自分のしたいことをいつもしている のではありません。私の肉のうちに善が住んでいないことを発見しました。私のうちに罪 の性質が住んでいて、それによって、私は神の律法を全うするができなくなっています。 神の律法を喜んでいるのに、私のうちに罪と死の原理(law)という異なった律法(law)があっ て、私に罪の性質があるので、思いでは神の律法を認め、これを全うすることを願ってい ますが、私の肉がそれに逆らいます。ですから、この問題を見ると、神が私たちに要求さ れているような、聖く純潔な生き方をすることが可能なのかと思ってしまいます。これま でローマ書7章で、2つの律法(原理)が働いているのを見てきました。私が喜んでいる 神の律法と、神の律法に逆らっている罪と死の原理です。罪の律法が私のからだをとりこ にし、神の律法を全うするのを阻んでいます。そこでこの章の終わりで、パウロは嘆い て、「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出し てくれるのでしょうか。(7:24)」と叫びました。そしてパウロは、私たちの主イエス・キリ ストによって神が備えをしてくださったことを、神に感謝しています。

それで、パウロは、8章を次のすばらしい言葉で始めています。「こういうわけで、今 は、肉に従って歩まず、御霊に従って歩むキリスト・イエスにある者が罪に定められるこ とは決してありません。なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪 と死の原理から、私を解放したからです。(訳者注:欽定訳には 1 節の終りに、walk not after the flesh but after the Spirit と追加されている。2節では、「あなたを」ではなく「私 を(me)」となっている。)」このため、パウロは、8章で、3つめの原理(law)を導入してい ます。7章で、私たちの認める神の律法がありましたが、罪と死の原理すなわち罪の性質 が神の律法に逆らい、正しいことをしたいのに、正しいことをすることができず、私たち は苦悶するのです。悪いことをしたくないのに、悪いことをしているのです。ですから、 神は私たちに、イエス・キリストによって備えをしてくださいました。ここ8章で、3つ めの原理が導入されています。すなわち、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理 が、罪と死の原理から私を解放したのです。 イエスは弟子たちに、「わたしは、あなた がたがいのちを得るために来ました。(ヨハネ10:10参照)」と言われました。これはつま り、キリスト・イエスにある、いのちの原理です。「わたしが来たのは、あなたがたがい のちを得、またそれを豊かに持つためです。(ヨハネ10:10参照)」と言われました。けれ ども、イエスが来られて私が得るようにされた豊かないのちを、どのようにすれば得るこ

とができるのでしょうか。これは、イエス・キリストを私のうちに住んでくださるよう に、お招きすることによって得られます。イエスは、「その日には、わたしが父におり、 あなたがたはわたしにおり、わたしがあなたがたにおることが、あなたがたにわかりま す。(ヨハネ14:20)」と言われました。パウロは、「あなたがたのからだは、あなたがたの うちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のもので はないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。(1コ リント6:19-20)」と言いました。ですから私は、イエス・キリストを私のからだに来てくだ さるように招きました。それは、イエス・キリストが私のからだに住んでくださるためで あり、イエス・キリストが私のからだに住んでくださることによって、この方が私のから だを支配されるためです。それでこのからだが、イエス・キリストがご自分を現わし、働 くことがおできになる器となります。私のうちにあるキリストのいのちは、私の肉の生活 よりも力強いのです。「あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者 よりも力があるからです。(1ヨハネ4:4) 」イエスはただ、あなたがこの方を招くのを、 待っておられるのです。イエスは、「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれで も、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、私は、彼のところにはいって、彼とともに交わ りをする。(黙示3:20の言い換え)」と言われました。ですからイエスは、私たちの心の 戸の外に立っておられ、その戸をたたき、私たちの生活に入ってくることを望んでおられ ます。イエスは、私たちが入ってきてくださるよう招くのを待っておられます。イエスが 入ってこられたときに、私たちは新しい原理を、キリスト・イエスにある、いのちの御霊 の原理を発見します。これは、私のうちに住まわれるイエスの力であり、それは、私を自 分の肉の欲に服従させた罪と死の原理よりもさらに力強いのです。イエスは弟子たちに、 「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人 の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。わたしを離れては、あな たがたは何もすることができないからです。(ヨハネ15:5参照)」と言われました。私は長 年、イエスのこの発言が誤りであることを証明しようとしました。私は、「いや、イエス さまを離れても、何か自分でできるにちがいない。何かしら、どこかに、何らかの取り柄 があるに違いない。」と思いました。私は長年、そのことを反証しようとしましたが、イ エスの方が正しいという結論に至りました。イエスを離れては、私は何も、霊的に価値あ ることも、霊的な働きを、何もすることすることもできません。私は、イエスを離れて は、自分の肉の欲に勝利することができませんし、勝利と純潔の生活を送ることができま せん。原理があって、ー 私は願っているのです。望んでいないというのではないので 罪と死の原理があって、私の肉のからだによって、神の要求されている生き方を することができなくなっています。ですから、イエスは、「わたしを離れては、あなたが たは何もすることができないからです。」と言われたのです。イエスは、私たちにとどま ることを話されています。これは、イエスが入ってこられて、私たちに住まわれるときに 与えられる力です。

そこでパウロは、続けて3節で、「律法にはできなくなっていること(8:3)」と言っています。律法にはできなくなっていること、とは何でしょうか。基本的に、律法は、それを守り行う力を与えません。そこが問題なのです。律法は、私に罪を見せることはできますが、罪の性質に打ち勝つ力を与えることはできません。したがって、律法は私を罪に定めるだけなのです。律法は、何が正しいことか、悪いことかを示すことしかできません。私が正しくなる能力を与えることはできないので、律法は私を正しくすることができないのです。ですから、律法にはできなくなったもの、律法にはできなくなっている理由は、肉の弱さである、とパウロは言っています。「肉によって無力になったため」とあります。律法は良いものですが、私の肉が弱いのです。イエスはペテロに、「心は燃えていても、

肉体は弱いのです。(マタイ26:41)」と言われました。パウロは、「私には願いがあるの に、それを実行することがないのです。(ローマ7:16参照)」と告白しました。これは、私 の願いや、思いや、心の問題ではありません。神に仕えたいと願っているし、純潔の生活 を歩みたいのです。問題は、私の肉であり、私の肉の弱さです。ですから、律法は良いも のですが、無力になっているのは私の肉です。それで、「肉によって無力になったため、 律法にはできなくなっていることを、神は、」ここに神の解決があります。問題がありま した。しかし、ここに神の解決があります。「神はしてくださいました。神はご自分の御 子を、罪のために、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰され たのです。(8:3) 」神はそのひとり子を、罪深い肉と同じような形でお遣わしになりまし た。神は御子を、罪の肉で、罪深い肉でお遣わしになったのではないことに、注目してく ださい。そのからだは、私たちと同じような形をしていましたが、ただ、そのからだに は、罪の性質がありませんでした。これは、アダムが罪を犯す前のアダムのからだと同じ ようなものです。御使いがマリヤに、彼女がメシヤを産むことを告げたとき、御使いが、 それが起こる過程を告げたとき、このように言いました。「聖霊があなたの上に臨み、い と高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ば れます。(ルカ1:35)」メシヤは、罪なしに、罪の性質を持たずにお生まれになりました。 しかし、生まれて、同じような形のからだを与えられたのです。イエスを見れば、他のだ れとも変わらなく見えました。けれども大きな違いは、私たちがアダムから引き継いだ罪 の性質をお持ちになっていなかったことです。ですから、「神はご自分の御子を、罪のた めに、罪深い肉と同じような形でお遣わしになり、肉において罪を処罰されたのです。」 神は、いや、パウロが、「神は、罪の知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。 それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。(2コリント5:21) 」と言いま した。イエスは、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。誘惑され ることはどういうことかご存じでした。けれども、イエスはある日パリサイ人に、「あな たがたのうち、いったいだれが、わたしに罪があると責めることができるのか。(新共同 訳ヨハネ8:46) 」と聞かれました。ですから、罪のないイエスは、私たちの罪をその身に受 けて、私たちの代わりに死に、死者の中からよみがえり、今は、私たちの罪を取り除き、 ご自分の義を与えてくださり、イエスが入り支配して下さることによって、私の中にこの 方が生きてくださり、義の生活をする力を与えられています。「それは、・・・私たちの 中に、律法の要求が全うされるためなのです。(8:4) 」ここでパウロは、「私たちの中に」 と言って、「私たちによって」とは言っていません。これが私たちが理解すべき、極意で す。キリストが私たちの中に住んでくださることによって、今や、律法の要求が私たちの 中に全うされています。キリストが私たちの中に住まわれることによって、律法の要求が 全うされたのです。これは、私によって全うされることは決してなく、私の中のキリスト によって全うされるのです。私の中に住んでいるキリストのいのちによって、キリストを 信じる信仰によって神が下さったキリストの義の中にいる私を、神は見てくださっていま す。このために、この章は、すばらしい言葉によって始まっています。「こういうわけ で、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」神 は、私を罪と死の原理から解放した、キリストにある、いのちの御霊の新しい原理によっ て、備えをしてくださいました。

さて、この点が、キリスト教を、他のすべての宗教と異なる、別のものとしているのです。基本的に、大部分において、世界の宗教制度は、人間の霊的な性質と人間の肉的な性質を認めています。また、御霊に従ういのちが、肉に従ういのちよりも優れていることを認めています。混迷や、争いや、戦争、問題、不安、恐れはすべて、私たちの肉の欲から来ていることを認めています。このようなものが、私たちの罪深い行為を引き起こしてい

るのです。このようなものが、私たちの思いを、混迷状態にさせます。肉的な欲が、世界 の問題を引き起こしています。仏陀はこのことを理解していて、人間が真の平和と静謐を 得るには、肉的な欲からすべて解放されなければならない、と告げました。どんな肉の欲 からも完全に解放された状態に到達したときに、その時点で涅槃の中に入る、と。けれど も、だれも到達していないことを認めなければいけません。いつもそれに到達しよう、達 成しようとしていますが、仏陀は、食べたいという肉の欲も無くさなければならないと教 えました。もし、この欲を無くして何も食べなければ、何らかの状態に入るでしょうが、 それが涅槃だとは私は保証できません。けれども、御霊に従って生きなければいけない、 御霊に従って生きるなら、そこに平安があり、喜びがあり、満足があるという認識はあっ たのです。悪い肉の欲に支配されてはいけません。なぜなら、そこには混迷と不安がある からです。ヤコブは、「何が原因で、戦いがあるのでしょう。あなたがたの欲望や欲が原 因ではありませんか。(ヤコブ4:1言い換え)」と書きました。これらが動揺を生んでいる のです。さて、世界の宗教の弱点は、その多くが道を指し示し、「ご覧。あなたが御霊に 完全に従って生きるなら、平和と静謐と至福の状態に入る。」と言うのですが、道を指し 示しても、その道を歩む力は与えないのです。したがって、そこからは葛藤しか生まれま せん。それは、まさにパウロがローマ書7章で言い表したのと同じものです。「私は正し いことを知っています。その正しいことを認めています。けれどもそれを実行する力がな いのです。自分がしてはいけないと思っていることを行なっており、自分がしたいことを 行なっていないのです。私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだか ら、私を解放してくれるのでしょうか。」他の宗教が与えることができないものの一つ は、これです。この点が、キリスト教を他のすべて宗教と別のものにしているのです。イ エスは、道を指し示し、「これが、幸福と充足と平安と喜びと祝福の道です。」と言われ だだけではなく、「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができないのです。」 ということを理解しておられました。したがって、「わたしは来て、あなたがたの中に住 み、あなたがたの中に律法の要求を全うしよう。わたしはあなたがたの中に住み、神が要 求されているようにあなたがたが生き、その姿になる力を与えよう。」と言われているの です。キリスト・イエスにある、すばらしいいのちの御霊の原理が、罪と死の原理から私 次のようにたとえてみましょう。私たちはみな、重力の法則(law)のこ とを知っています。2つの物体の間に、それぞれの質量に比例した重力があることを私た ちは認識しています。私は、重力がどのようにして働くのかは理解できないかもしれませ んが、働くことは理解しています。私はそれを顧慮しています。10階建てのビルから飛 び降りたりしません。重力の法則を顧慮しているからです。質量同士をを近づける力があ ることを知っています。そして、私は重力の法則の存在を信じています。重力の法則によ ると、物は地面に落ちます。そこで私は、賛美歌の本を差し出します(訳者注:そして、 チャックは実際に説教台の横に、手で持って差し出しています)。重力の法則によれば、 これは落下するはずです。けれども、落ちていませんね。それでは、私は重力の法則を反 証したことになるのでしょうか。この本が落下しないので、今や、重力の法則がまやかし だということでしょうか。そうではないですね。では、なぜ本は落下していないのでしょ うか。重力の法則が有効ではない、無効だと言うことではなく、重力の法則がさらにま さった法則によって代わったのです。本を持つためのいのちと力の法則があり、これは重 力の法則を否定しているのではなく、さらにまさった法則が働いて、重力の法則が働かな いようになっているのです。罪と死の原理が、私の罪の性質がまだあるのですが、神がい のちの御霊の原理という、さらにまさった原理を定められました。これによって、私は罪 の性質の原理に従わなくてもよくなったのです。私の中に、キリスト・イエスにある、い のちの御霊の原理というさらにまさった原理が働いています。これが、私を罪と死の原理

から解放しました。それで、私はもう自分の肉やその欲に縛られる必要がなくなりました。なぜなら、私の中にさらに大きな力があるからです。「あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。(1ヨハネ4:4) 」それで、私たちの手足には、もはや罪と死の原理が働いていません。さらにまさる原理が、これに打ち勝ちました。

イエスは、道を指し示されて、「これが道です。これに歩みなさい。」と言われました が、「けれども、わたしは、あなたにはそれができないことを知っている。したがって、 わたしが入り、これに歩む力と強さを与えよう。」と言われているのです。それでイエス は弟子たちに言われました。「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を 受けます。そして、・・・わたしの証人となるのです。(使徒 1:8) 」あなたは、聖霊の力 によって、このような人生を生きることができるのです。キリストの内住と、聖霊の内住 と、そして、みことばの内住があります。これら3つすべてが私の中に働き、私を支配す る罪の性質の原理から解放します。イエスは、「あなたがたは、わたしがあなたがたに話 したことばによって、もうきよいのです。(ヨハネ15:3)」と言われました。また、「わた しがあなたがたに話したことばは、いのちを与える御霊です。わたしのことばは、霊であ り、またいのちなのです。(ヨハネ6:63参照)」と言われました。ですから、御霊の内住に よって、神のみことばの内住によって、また、イエス・キリストの内住によって、「あな たがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。(13 ハネ4:4)」 時間の関係で、今朝はこれ以上説き明かせませんが、今夜説き明かしを続け ます。しかし、5節から読んでみます。「肉に従う者は肉的なことをもっぱら考えます が、御霊に従う者は御霊に属することをひたすら考えます。肉の思いは死であり、御霊に よる思いは、いのちと平安です。というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだから です。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。肉にある者は神を喜 ばせることができません。けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられる なら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たな い人は、キリストのものではありません。もしキリストがあなたがたのうちにおられるな ら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。もしイエスを死 者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリス ト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたの住んでおられる御霊によっ て、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてくださるのです。ですから、兄弟たち。私 たちは、肉に従って歩む責任を、肉に対して負ってはいません。もし肉に従って生きるな ら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、 あなたがたは生きるのです。(8:5-13)」神は、私たちの肉の弱さのために、肉の無力さのた めに、備えをして下さいました。神は、罪の性質の原理が否定されるように、備えをして 下さいました。これは、私たちの中に住むキリストのいのちの力によるのです。それに よって、私たちは、自分たちのからだと生活を束縛していた罪の力から解放されました。

今朝は、第一礼拝の後に、若者が赤ん坊を抱いて私のところに来ました(訳者注:日曜日の朝は、3回礼拝が持たれていて、この説教は第3礼拝のもの。また礼拝の後に、チャックは会堂の出入り口に行き、話をしたい人たちがそこに列をつくって並んでいます。)。彼は、大きな笑顔でこう言いました。「牧師さん。今朝あなたが言われたことは、まさにその通りです。ほんの数ケ月前に、神は私をクラック(つまりコカイン)から救い出してくださいました。(訳者注:クラックは麻薬の一種で、高純度の精製コカイン)」彼はこうも言いました。「神は、それを欲しいという思いをすべて取り去ってくださいました。そんな願いは、私の中にあるキリストの力によって、もうなくなってしまいました。」なくなってしまったのです。キリスト・イエスにある、新しいいのちの御霊の原理

によって、罪と死の原理から解放されたのです。今日あなたがまだ、肉の中でもがいているなら、あなたがまだローマ書 7 章に生きているなら、もう 8 章に移る時が来ました。あなたのいのちの中に住んでくださっているキリストの御霊の力を経験する時です。罪の性質と死の原理からの解放を見つけてください。イエス・キリストは、あなたを自由にしてくださいます。

ローマ人への手紙8章 第2部(10/20/96) 「虚無に服する」(Romans8:20)#8637 ローマ人への手紙8章20節 交読文:詩篇42篇

ローマ書8章の学びを続けます。テリー(訳者注:司会をした副牧のひとり) は今夜でこの章は終わるかもしれないと言いましたが、彼は私よりも期待が大きいようです。私は、ローマ書8章の学びはもう2週間かかると思います。とても内容豊かな章なので、駆け足で終わらせたくありません。時間をとって、このすばらしい章から香しさを引き出してゆきましょう。

今朝は、ローマ8章20節に注目してください。パウロは、被造物が虚無、またはむな しさに服したと教えています。しかし、まず最初に、被造物は造られたのです。私たちが 最初に理解する必要があるのは、私たちが造られ、神によって創造されたということで す。私たちは、偶然の状況で、無数の偶然の出現が連なって、無生物から進化したのでは ありません。現在の科学者は、体が機械であることを認識しています。機械には、ものす ごい工学と設計が示されているように、人体は完全なすばらしい設計だと言えます。しか し、設計者なしに、設計はありえません。進化論者は、物体が物体に作用して、十分な時 間がたつと、どんなものでも作り出される、と言います。けれどもみなさんは、そんなこ とを本当は信じていません。もし信じているなら、砂漠に出て行って、砂のどこからかポ ルシェが出てくるのを待っているはずです。時間が時間に作用して、いや、物体が物体に 作用して、進化論者が地球は150億年間存在していると推測しているように、莫大な時 間がたっているのなら、なぜ自然は、今日存在する生命体よりも、もっと多様な形態の生 命体をもっと生み出していないのでしょうか。一つの種から別の種への中間型の痕跡を見 るときに、化石の記録には、どれも大きな隔たりがあります。もし中間型が存在していた のなら、化石の記録の中で莫大な量の中間型が見つかるはずですし、それだけでなく、こ の過程が今日も続いているはずです。この進化論的過程は続いているはずなのですから、 ある種から別の種への多くの中間型が今日見かけられるはずなのです。

神が私を造られたことがわかると、その瞬間に、神が私を造られたのなら、神が私を造 られた理由があるはずだと気づきます。私が存在しているのには目的があります。私は、 運や偶然でここにいるのではありません。聖書は、神が実際に私たちを造られたことと、 私たちを造られた理由があったことを確認しています。神は、私たちが神を知り、この方 と意味のある愛の関係を培うために造られました。「神のトロンボーン(訳者注:1927年 ジェームズ・ウェルドン・ジョンソン作で、"And God stepped out on space, And He looked around and said, 'I'm lonely - I'll make me a world.'" の下りがある。)」という古典的な詩の 中に、次のような節があります。「神は、『わたしはさみしい。』と言われた。そこで神 は、人を地の塵から形造られた。」これが神学的に正しいとは思いませんが、美しい節で す。もっと正確に言うと、神はおそらくこう言われたのだと思います。「わたしは愛がほ しい。意味のある、愛のある関係がほしい。」そこで神は人を形造り、人をとおして、意 味のある愛のある関係を持とうとされました。けれども、神が人間と意味のある愛のある 関係を持つためには、ご自分に似せて人を創造しなければなりませんでした。神は自己決 定をなさる方なので、人間も自己決定をする存在でなければなりませんでした。つまり、 神は人間に、選択の意思と能力を与えなければなりませんでした。私はロボットではあり ません。ロボットと真に愛のある関係を培うことは不可能です。神は私を、意思を持ち選 択をする能力を備えてお造りになりました。それは、私が神を愛し仕えるようになること を神が願われたからでした。

けれども、選択は、何か選択するものがなければ有効ではありません。もし何も選ぶも のがなければ、選択の能力を持っていることに何の価値があるのでしょうか。ですから、 神は園の中央に木を創造し、人間にその木から食べてはならないよう、禁止を設けなけれ ばなりませんでした。それは人間が選択するものを持つためでした。神は、「あなたは、 どの木からでも思いのまま食べてよい。(創世2:16)」と言われましたが、そこには選択が ありません。けれども、「園の中央の木からは取って食べてはならない。(創世2:17参 照)」のであれば、選択があります。神は、私がしてはならないと言われたのですが、私 が願えば、取って食べる能力はあったのです。神は、私がそのようにすることを禁じられ ましたが、それを行なう自由をお許しになりました。それは、選択が有効なものになるた めです。けれども、この選択が真に有効であるためには、選択肢が魅力的なものでなけれ ばいけません。そこでエバが見ると、「その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わし く、神のように賢くするというその木はいかにも好ましかった。(創世3:6参照)」と書か れています。とても魅力的でした。罪はとても魅力的です。罪は表面上は美しく、わくわ くさせ、興奮させるもののように見えます。表面上は醜くありません。魚釣りで使われる ルアーに似ています。おいしそうに見えるので、魚は引きよせられます。けれども、罪は ルアーに似ていて人を引きよせますが、それを味わって食べると、死に至ります。ですか ら神は、罪が表面上は魅力的に見えることを許されていますが、罪に従わずに神に仕える 選択が、さらに意味のあるものとなります。確かに罪は快楽をもたらします。興奮をもた らします。わくわくさせます。したがって、罪の行ないにふけるのではなく、神に従い、 愛することを選ぶことは、意味のある選択となるのです。それで私たちは、神と意味のあ る愛の関係の中に入るのです。人が行なう選択が尊重されなければ、選択は、有効ではあ りません。神は、あなたの選択を尊び、尊重されます。あなたが神に逆らうことを選ぶな ら、神はあなたがそうするのを許されます。この選択を尊重されます。あなたが神を愛 し、神に仕えることを選ぶなら、神はこの選択を尊重されます。神はあなたがこの選択を することを許されて、尊重されます。もし、選択が尊重されなければ、選択の性質と能力 は無意味です。

ヘブル書では、モーセについて次のように書かれています。「信仰によって、モーセは 成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるより は、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受ける そしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるもの から目を離さなかったのです。(ヘブル11:24-26)」モーセは選択ができる年令になってい て、はかない罪の楽しみを受けるよりは、神の民とともにいることを選びました。なぜな ら彼は、罪の楽しみは一時的であり、罪の楽しみは究極的に滅びに至らせることを悟った からです。彼にとって、神の子ども、神のしもべであることのそしりは、エジプトの富よ りも大切でした。今日、神とともに歩み神と交わる者について、世からのそしりが依然と してあります。世は、神の子どもに対してかなり奇妙な態度を取ります。あなたが神を信 じているから、迷信的であるとか、知性が少ないと考えて、見下すことがよくあります。 神の救いを受け入れて、神と愛の関係に入ることの最悪なことは、世がこのような経験を 見下すことです。世があなたに与えることができる最善のものは、束の間の宝です。です から、モーセは永遠のことを考えて、キリストのそしりを受けて、神の民とともに苦しみ を受けるほうが、エジプトのすべての富と宝よりもまさっていると考えました。それは、 最後の結末を、永遠の結末を考え、神の御国を選択したからです。前の節で、パウロは、 「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、 取るに足りないものと私は考えます。(ローマ8:18)」と伝えています。ですから、永遠の 見地から物事を見ることは、世とその価値と基準を拒み、神との愛の関係の中でさらに高

い基準によって生きることは、理にかなっています。神は私たちが、神との愛の関係の中 に入ることを目的にして、私たちを造られました。

そこでこの箇所を読みますと、こうした目的をもって、神が被造物を虚無に、またはむ なしさに服従させて造られたのです。神が人間を創造されたとき、人間を三位一体に創造 されました。人間は、体と魂と霊に造られました。三位一体であっても一体化しているの で、実際に魂と霊を、または体と魂と霊を分離することは不可能です。これらは、一体化 された単位となっています。つまり、私が肉体的に影響を受けると、感情的に影響を受け て、それゆえ霊的に影響を受けます。長い間病気で、衰弱し痛みが続くと、この衰弱と痛 みの経験の中で、感情的に影響されることが実に多くあります。落胆して、はたして気分 が良くなるのかと考え始めてしまいます。そして、感情的に気が滅入ると、今度は霊的に 影響されます。「神が自分を本当に愛しておられるなら、なぜこんな気分にされるのだろ うか。ひょっとすると神は私を愛しておられないのだろう。」と考え始めるからです。で すから、肉体的に影響を受けると、究極的に霊的に影響を受けてしまいます。同じよう に、感情的に影響されると、肉体的に影響されます。人の感じ方、状況の見方、生活、人 生の見方が、肉体の健康と深く関係していることが、ますます分かってきています。聖書 には、心の楽しみ、あるいは笑いは良い薬であるとあります(口語訳箴言17:22参照)。最 近では医者も、笑い健康法についての本を書いています。心の楽しみがいかに価値がある か、この楽しみが適切な化学物質を送り込み、身体的に影響を与えることができることに ついての本です。同様に、怒りや苦みによって、悪い化学物質を送り込むと、身体的にも ぼるぼるになってきます。ですから、人の感情と肉体の健康に関係があることがわかり始 めています。ですから、自分の一つの部分に影響を与えようものなら、すべての部分に影 響を与えざるをえなくなるのです。何でも霊的に影響を与えるものは、それは、感情的に も、身体的に影響を与えます。主とともに歩み、主と交わって、「神が支配されているの だ。心配することはない。神が何とかしてくださる。」と確信を持っていると、このこと が感情的に影響を与えます。気が滅入ったり、落ち込んだりすることはありません。神が 御座におられて、支配されているからです。それが、身体的に影響を与えます。人がイエ ス・キリストを主、救い主として受け入れると、身体的な変化さえ起こるのには、驚かさ れます。

さて、今の世の中は、今の知識人の世界は、人間を二分されたものと見ます、二つの部分として見ます。彼らは、精神あるいは魂と霊は同じだと言います。けれども聖書によると、これらは別個の存在です。現在の科学者は、いや、人間の魂と人間の霊は同じだと言います。彼らがそう言うのは、自分の霊が死んでいるからです。パウロは、「罪過の中に死んでいたこの私たちを・・生かし(エペソ2:5)」と言っています。イエスは、霊的に生まれなければならないと言われました。パウロは、もし自堕落な生活をしているなら、生きてはいても、もう死んだ者であると言いました(1テモテ5:6参照)。ですから、生まれながらの人間は、自分の霊が死んでいるので、御霊に属することを理解しません。知ることもできません。霊が生きると、霊の次元を理解し始めます。ですから、神は私たちを、体、魂、霊の3つの部分に造られました。

さて、私の体は、生きるために必要なものがあります。そこで神は、体の渇き、つまり 欲求を持つように私をお造りになりました。空気への欲求、水分への欲求、食欲、排泄の 欲求、性的欲求など、人が生きるための生理的な必要があります。神は、私たちの中にこうした体の渇きを造られました。これは体が存在するのに必要なものであり、存続するために、つまり生殖のために、体にそれを提供するのです。ですから私には、肉体的な欲求があります。私たちはみな喉が渇くことがどういうことか知っています。空腹がどういうことか知っています。息が切れるとはどういうことか私たちはみな知っています。体の中

のバランスを保つために、こういったものを神が設計されたのです。生体内恒常性 (homeostasis)です。さて、人の魂、あるいは感情、精神が創造されましたが、人はある社会 的欲求を持っています。私たちは愛を必要としています。私たちは安心できる場を必要としています。人の関心を必要としています。自分を必要とされることが必要です。社会的 な観点からの欲求が、つまり、愛の必要、安心の必要、人の関心、自分を必要とされる必要が列挙されています。

さて、人の霊も神と意味のある愛の関係を必要としています。このように神はあなたを 創造されたのです。この虚無に服するようにされたのです。ですから、人間のずっと、 ずっと深くに、神を求めて渇く深い霊的渇きがあります。詩篇の記者は、「私のたましい は、神を、生ける神を求めて渇いています。(詩篇42:2)」と述べています。これは、詩篇 の記者についてだけでなく、すべての人間にに言えることです。霊のずっと奥深くで、ど うしようもなくこの神との関係を必要としているのです。神は、私を虚無に服するように 創造されたのです。神は、礼拝をする必要を持つように、礼拝し、あがめ、愛するよう に、私を創造されました。ですから申命記で、神がイスラエルの民に語られたときに、 「あなたがたは礼拝するために、どんな形の彫像も、人の形も動物の形も造ってはならな い。(4:16-18参照) 」と言われました。そして、また、「また、天に目を上げて、日、月、 星の天の万象を見るとき、魅せられてそれらを拝み(申命4:19)」と言われました。そこに は、欲求があるのです。礼拝する、何か神を礼拝する霊の欲求があるのです。ただし、も し、真の生ける神を礼拝しないと、何かを礼拝しています。というのも、礼拝する欲求を 持っているからです。それは、あなたの性質の一部です。それは、自分ではどうにもでき ないものです。何かを礼拝せざるをえないのです。神を礼拝するのを拒絶すると、人は途 方もないものを礼拝してしまうことに、いつもびっくりさせられてしまいます。母なる大 地を礼拝するとか、カンガルーネズミを礼拝するとか、木を礼拝するのです。神を礼拝す るのを拒絶すると、人は途方もないものを礼拝してしまうのです。また、神の真理を拒絶 すると、人は途方もないものを信じてしまうのです。パウロがテサロニケの人たちに手紙 を書いたとき、「なぜなら、彼らは救われるために真理への愛を受け入れなかったからで す。それゆえ神は、彼らが偽りを信じるように、惑わす力を送り込まれます。(2テサロニケ 2:11)」と述べました。人が信じる偽りに、私はいつも驚かされます。いったん人が、真の 生ける神を礼拝するのを拒絶すると、何を信じ、何を礼拝するかを見ると、私はいつも驚 かされます。さて、あなたには礼拝する欲求があります。それは、欲求の一部です。霊の 欲求の一部で、あがめ、礼拝する欲求です。神はあなたをそのように創造されました。被 造物は、そのような空白を満たすように、肉体的にも、感情的にも、霊的にも、この虚無 に服すようにされたのです。

私の体、魂、霊は一体化されているのですが、しかし、体の渇き、魂や霊の渇きのことになりますと、それぞれ別のもので非常に異なるので、感情的な経験で、肉体の渇きを満たすことはできないのです。もし、みなさんが脱水症状を起こしていて、まわりに飲み物や水が全くなく、死にかけているとするなら、世界中の愛があっても、それが、あなたを生かしておくことはできません。みなさんは、完全に感情面で満たされるかもしれません。しかし、みなさんの体は水分を必要としているので、死にそうになっているのです。あるいは飢餓状態で、死にそうになっている場合には、世界中のどんな安心を与える場も、それが、あなたを生かしておくことはできません。同様に、もし、みなさんは愛が必要だが、愛はなく、身体的な必要は満たされているとします。身体的な必要が満たされているからといって、それは、愛に対する感情面の必要を満たしませんし、満たすことができません。施設で世話を受けている子供を対象とした、面白い研究があります。あるグループの子供に対しては、一切体に触れることをしませんでした。全て機械的に行なわれま

した。食事も、哺乳瓶と、哺乳瓶を支えるものが使われ、機械的に食事が与えられ、子供を抱き上げて触れることもありませんでした。おむつを換えるときだけしか子供に触れませんでした。しかし、可愛がったり、抱いてやったり、優しい声で話しかけるといったり、とは、全くなく、ただ、施設で世話をするだけで、ほぼ機械的でした。可愛がったり、愛情を注ぐことがなく、厳密に施設で世話をするだけという状態が6ケ月続けられましたが、その子供たちは恒久的な精神遅滞になってしまいました。何かが失われてしまい、子供たちはそれを回復することができませんでした。6ケ月間愛がなかっただけです。愛の欲求です。子供は食事を与えられ、おむつも換えてもらったのに、どうしようもないとかく、子供をテレビに追いやってしまいます。座って、いっしょに話してやる時間を取りたくないのです。子供に愛を示すことがよいのです。子供に季を示すこと、惜しみない愛を示すことをしたくないのです。このために、子供たちはその結果の犠牲を被っています。そして、子供たちが異様な行動をすることが理解できず、「子供たちには、すべてを与えたのに。車もあるし。あれも、これもあるし。」と言うのです。それこそが問題なのです。愛がないのです。物質的なものはあるのですが、感情面で愛が必要です。

霊的な欲求にも同じことが言えます。神との意味のある関係や、礼拝の欲求は、身体的 な経験、あるいは感情的な経験で満足できません。これが、今日人々が抱えている問題な のです。人生には、まだ経験していない何かがあるはずだ、と気づいているからです。虚 無感があります。内側に空白があります。しかし、自分では物理的にできることはみな やってみたのです。新しいものが出てきたら、みんな試してみたのです。スケートボード もできるし、サーフィンもできるし、ハンググライダーもできるし、ゴルフもできるし、 すべてやり方は知っているのです。あれこれと、自分を満足させるために、物理的にはす べてのことをやってみたのです。感情面でも、様々な体験を追及してみました。しかし、 それでも、内側に空しさがあります。欲求があるのです。これまでに自分が発見したり、 経験した以上に、人生にはもっと何かある、と気づいています。神は、あなたをそのよう にお造りになったのです。その空白とともにあなたを造られたのです。その虚無とともに 造られました。それは、あなたが手を差し延べて、神を発見し、神との意味ある関係を見 出だすためなのです。しかし、人間は愚かにも、霊的必要を満たすために、物質的なもの に走りました。でもこれでは、とにかくうまくいきません。それで、霊的必要を満たすた めに、感情的なものに走りました。しかし、とにかくうまくいきません。神との意味ある 愛の関係を満たすことができる唯一の方法は、みなさんが神との意味ある愛の関係に入る ことです。それ以外のものでは、うまくいかないのです。神は、みなさんをこのように造 られたのです。私たちを虚無に服したのは、私たちを創造してくださった方の意志による のです。

イエスは井戸のそばにいた女に対して、「わたしに水を飲ませてください。」と言われました。女は、「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。私たちはつきあいをしないではないですか。」と言いました。イエスは、「もしあなたが、あなたに水を飲ませてくれと言う者がだれであるかを知っていたなら、あなたのほうでその人に求めたことでしょう。」と言われました。女は、「あなたに求めるですって。ご冗談でしょう。この井戸は深いし、あなたは汲む物を持っておいでにならないではありませんか。」と言いました。「この井戸から水を飲む者はだれでも、また渇きます。」とイエスは言われました。そこの部分に、自分の持っているすべての野望を書き入れてみてください。自分を満足させてくれると希望しているものを。もし持つことができればいいのに、と願っているものを、ああ、自分がこうなることができればなと願っているものを。みなさんが、節約して、有り金をかき集めて、どうすれば手に入れる

ことができるかと思い巡らし、たくらみ、買おうと計画しているものすべてを「この井戸 から水を飲む者はだれでも、また渇きます。」という所に書き入れてみて下さい。そのよ うなものは、あなたを満足させることができないことは、保証付きです。「でも、あれさ えあれば・・・。そうすれば、もう決して他のものは欲しがらない・・・。」そんなこと を言うのはおよしなさい。また欲しくなります。そのようなものは、深い霊的な渇きを満 たすことができないからです。もし、自分がこうなることさえできれば、勉強する、犠牲 を払う、無理する、たたき込む、のぼる、かき集める、それに到達できるのであれ ば・・・。でもまた渇いてしまいます。そのようなものは、深い霊的な必要を満たすこと ができないからです。神が被造物を虚無に服すようにされたのは、創造してくださった方 の意志によるのです。神は目的をお持ちだったのです。その目的は、みなさんを神のとこ るに連れてくることです。あなたを創造された方と意味ある愛の関係に入ってはじめて、 これだと分かるのです。満足、平安、充足は、神と歩む関係、神を礼拝し、あがめてはじ めて、心が休まるようになるのです。私は、人生の疑問の回答を見つけました。もはや、 自分の内側の霊的な必要を満たすために、物を求めたり、追及したりしていません。だか らといって、もうゴルフをしなくなるということではありません。ただ、もっとゴルフが 楽しめるということなのです。あなたが持っている深い必要を満たすためにゴルフをして いるのではないからです。だからといって、必要なのに新しい車を買わなくなるというこ とではありません。ただ、もっと車を楽しむことができるということなのです。なぜな ら、新しい車ができないことを、つまりあなたが充足と満足、恒久的な満足を得ること を、新しい車に頼り求めないからです。ですから実際、もっと人生を楽しむことができる ようになるのです。今や、みなさんの満足は、イエス・キリストにあるからです。霊的な 渇きがもう満たされたので、その他のものはみな引き上げられたのです。それは、そのよ うなものから、それが自分には与えてくれないものを、そこから絞り出そうとしなくなっ たからです。

そこで、次の質問が出てきます。あなたは、神と意味ある愛の関係を持っていますか。あなたは、本当に神を愛していますか。神の愛を感じたことがありますか。あなたは、すばらしい神との愛の関係の中で歩んでいますか。教会でよく歌った歌があります。「園の中で」(訳者注:カルバリー賛美歌 1 70番作詞・作曲C. Ausutin Miles) という歌です。「神は、私ととともに歩み、語られる。そして、神は私が神のものであると言われる。そこにとざまり、分かち合う喜びは、他のだれもわからぬ喜びだ。」すばらしい神との交わりです。このために、あなたは造られたのです。それを持って初めて、満足するのです。そうでなければ、むなしさは常に残ります。それは、神のみが、神の愛のみがあなたの霊のむなしさを満たすことができるからです。

ローマ人への手紙8章 第3部(10/27/96) 「極めて重要な質問」(Romans8:31-34)#8638 ローマ人への手紙8章31-34節

交読文:詩篇24篇

今晩ローマ人への手紙8章を終わらせます。ですから、この章を吸収し、ここから宝を自分で取り出すことができるようになるまで、繰り返し繰り返し読むことをお勧めします。今朝は、31節から34節を見てゆきたいと思います。そこでパウロは、一連の極めて重要な質問をしています。パウロは、言いました。「では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。」一連の極めて重要な質問です。

「神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。」クリスチャン 生活の体験の中で、私は長いこと、ある意味で、神が私に敵対しておられるという思い違 いをしていました。さばきを私に下すことによって、私に教訓を学ばせるために、私が間 違いをするのを神は待っておられるのだと感じていました。私に何か都合が悪いことが起 きるたびに、神のせいにする傾向がありました。自分が何か悪いことをしたことに対し、 神が自分を罰しておられるのだろうと考えました。十分悪いことはしていましたので、そ れは仕方がないと思っていました。私は何とかして、神に気に入られなければならない、 神に認められなければいけないと考えていました。自分が愛されやすい者になって、何と かして自分を愛して下さるように、神を説得しなければならないのだと考えていました。 神の愛とは、何かそれを受けるに値する人が受けるものだと思っていました。神はだいた い、良い子を愛し、悪い子を憎んでいると思っていました。サンタクロースについての歌 で、サンタクロースがリストを作成し、誰がいけない子かを再チェックしているという下 りがあるのですが、私は、それが神のことを言っているのだと考えていました。神が、私 についてのリストをつけておられて、再チェックされているので、褒美や罰は、自分がい けない子だったか、良い子だったかで決まると思っていました。私はとにかく、神が私を どのくらい愛してくださっているかを理解することができなかったのです。なぜ、それほ ど神が私を愛することができるのかと思い、現実の私への神の愛を理解することができま せんでした。もしサタンが、神のあなたへの愛について悩ますようなことがあるなら、た だ十字架を見てください。十字架において、神は、あなたをどれほど愛されたかを示して くださいました。ここでパウロは、「私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しま ずに死に渡された方が、どうして、・・すべてのものを、私たちに恵んでくださらないこ とがありましょう。」と言いました。パウロは先に、「私たちがまだ罪人であったとき、 キリストが不敬虔な者のために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自分 の愛をゆだね、明らかにしておられます。(ローマ5:6、8参照)」と伝えました。ヨハネ は、「神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくだ さいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではな く、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされま した。(1ヨハネ4:9、10)」と書きました。イエスは、「神は、実にそのひとり子をお与え になったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることな

く、永遠のいのちを得るためである。(ヨハネ3:16) 」と言われました(訳者注:欽定訳は、3章21節までをキリストの引用としている。新改訳ヨハネ3:15脚注参照)。私たちはとかく、神の私たちに対する愛を疑ったり、それに疑問を持ったりしますが、ただ十字架を見ればよいのです。ここに、愛が示されています。ただ単に神があなたを愛されているということではなく、どれほど神があなたを愛されているのかが示されているのです。神は、実にそのひとり子をお与えになったほどに、世を愛されました。

パウロはここで、「私たちすべてのために、ご自分の御子を惜しまずに死に渡された方 が、どうして、・・すべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょ う。」と伝えています。これは、より優れたものから劣ったものを語る論法です。神はす でに、ご自分が与えることのできる最大の賜物、すなわちそのひとり子ををあなたがたに お与えになりました。私たちにはこのことが、到底理解できません。パウロは、「情け深 い人のためには、進んで死ぬ人があるいはいるでしょう。しかし私たちがまだ罪人であっ たとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご 自分の愛を明らかにしておられます。(ローマ5:7、8)」と言いました。ここでの論法は、 もし神が御子を、私たちの罪のために死ぬために遣わされたことにより、私たちに対する ご自分の愛をすでに明らかにしておられるなら、あなたの必要が何であれ、それを恵んで くださらないことが、どうしてありえましょう、というものです。私たちの必要はすべ て、神がすでに与えてくださったものと比べたら、貧弱で、意義のないものです。私たち は時にためらいを覚えて、「主よ、これではあまりに過大なお願いなので、あなたにお願 いするのも、ためらってしまうのですが、これを考慮していただくことは可能でしょう か。」と言うのです。私たちは過大なことを頼んでいると思っていますが、現実には、 「わたしはあなたをとても愛している。わたしの最善のものをあなたに進んで与えよ う。」と神は言われているのです。「どうして、すべてのものを、私たちに恵んでくださ らないことがありましょう。」神に物乞いをしたり、神を説得したりしなくてもよいので す。「どうして、すべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。」 マタイの福音書で、マタイは、イエスがある論法を用いられたことを記しています。パウ 口は、より優れたものから劣ったものを語る論法を使いました。神が御子を下さったのな ら、神がすでに下さったものと比べたら残りは無に等しい、というものでした。イエス は、より劣ったものから優れたものを語る論法を用いられました。「あなたがたは、悪い 者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、 なおさらのこと、天におられるあなたがたの父が、どうして、求める者たちに良いものを 下さらないことがありましょう。(マタイ7:11) 」ですから、イエスは逆を言われたので す。より劣ったものから優れたものへと話を進められました。「父であるあなたがたは」 がより劣ったもので、「自分の子どもには良い物を与える」のです。「とすれば、なおさ らのこと、天におられるあなたがたの父が、求めるご自分の子どもたちに良いものを下さ らないことがありましょう。」

2番目の質問は、いや、3番目の質問は、「神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。」です。あなたを神の御前で訴えるのはだれですか。あなたを告発するのはだれですか。パウロは、だれが訴えていないかを伝えて、その答えをしているようです。すばらしいことに、神はあなたを訴えられていません。というのも、パウロが、「神が義と認めてくださるのです。」と告げて、その質問に答えています。つまり神は、すべての告発からあなたを無罪と宣告されました。それでは、あなたを訴えるのはだれですか。黙示録12章10節で、ヨハネは、天で大きな声がこう言うのを聞きました。「今や、私たちの神の救いと力と国と、また、神のメシヤの権威が現われた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。(訳者注:「メシヤ」は

「キリスト」の言い換え。)」訴えるのはだれですか。サタンです。サタンは、絶えずあ なたを訴えています。ヨブ記で、サタンは兄弟たちの告発者として活動しています。ヨブ 記1章6節からです。「ある日、神の子らが主の前に来て立ったとき、サタンも来てその 中にいた。主はサタンに仰せられた。『おまえはどこから来たのか。』サタンは主に答え て言った。『地を行き巡り、そこを歩き回ってきました。』主はサタンに仰せられた。 『おまえはわたしのしもベヨブに心を留めたか。彼のように潔白で正しく、神を恐れ、悪 から遠ざかっているような者はひとりも地上にはいないのだが。』」これが、ヨブに対す る神の評価です。偉大な人だったに違いありません。神は彼を完全な者として見ておられ ます。「彼は、わたしを恐れ、悪を憎んでいる。」と言われています。「サタンは主に答 えて言った。『ヨブはいたずらに神を恐れましょうか。あなたは彼と、その家とそのすべ ての持ち物との回りに、垣を巡らしたではありませんか。』」あなたは、彼のことを見 て、守られているではありませんか。彼の回りに、垣を巡らしたではありませんか。あな たが彼の手のわざを祝福されたので、彼は富んでいるのです。「しかし、あなたの手を伸 べ、彼のすべての持ち物を打ってください。彼はきっと、あなたに向かってのろうに違い ありません。」ここでサタンは、ヨブが実は欲得ずくの人間だ、と言って彼を訴えていま す。「あなたのことは愛していない。あなたが与えているいろいろな良い物を愛している だけだ。ヨブのようにあなたが祝福されるなら、だれがあなたを愛さずにいるでしょう か。」と訴えています。ですからサタンは、神の前でヨブを告発しています。敵が私たち を訴えることは多々あります。時には、友人さえも訴えます。しかし、すばらしいこと に、神は私たちに対し、何の告発もなさっていません。「神が義と認めてくださるので す。」詩篇の記者はこう言いました。「幸いなことよ。神が罪を認めないその人は。(詩 篇32:2、ローマ4:8参照)」これは、神があなたを告発するリストを、何も持っておられ ないことを言っているのです。幸いなことです。キリスト・イエスにあり、御霊に従って 歩むあなたの罪を、神は認めず、思い出されません。私たちが、つまずいて罪に陥って も、神はそのことを思い出されず、その記録をつけられません。それは、あなたが、キリ スト・イエスにあるからです。

それから、パウロはこう質問しました。「罪に定めようとする人はだれですか。」そし てまた、自分の質問に答えています。次のように言いました。「イエス・キリストではあ りません。この方は、死んでくださいました。実際、この方は、よみがえられて、神の右 の座に着き、あなたがたのためにとりなしていてくださるのです。」罪に定めるのとは、 逆です。この方は、あなたのために、とりなしていてくださいます。ヨハネ3章で、イエ スがニコデモに話されているとき、こう言われました。「神は御子を世に遣わされたの は、世をさばく(condemn)ためではなく、」罪に定めよう(condemn)とする人はだれです か。イエスは、「神がわたしを世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、わたしに よって世が救われるためである。わたしを信じる者はさばかれない。(17、18節参照)」と 言われました。この章(ローマ8章)の一番最初の節に戻りますと、「こういうわけで、 今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」とありま す。「わたしを信じる者はさばかれない。」けれども、イエスは続けてこう言われまし た。「信じない者は、すでにさばかれている。そのさばきというのは、こうである。光が 世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。 (18、19節参照)」イエス・キリストに反対することを言う人は、いつでも、光よりもやみ を愛する悪い人なので、そのようなことを言うのです。ひとりの女がパリサイ人によって イエスのところに連れて来られた話を、思い出してください(訳者注:以下ヨハネ8:2-11参 照)。彼らは、この女を姦淫の現場でつかまえたと言いました。そして、この女を罪に定め てこう言いました。「私たちの律法は、こういう女を石打ちにするように命じています。

あなたは何と言われますか。」イエスは、「わたしはあなたがたに言います。あなたがたのうちで罪のない者が、最初に彼女に石を投げなさい。」と言われました。そして、イエスが地面に書かれている間に、ひとりひとりが自分の誤りを認めて、出て行きました。そしてだれも残りませんでした。イエスは身を起こして、その女を見て言われました。「あなたを罪に定める者はどうしましたか。」彼女は、「主よ、だれもいないようです。」と言いました。そして、次のことばは麗しいことばです。「わたしもあなたを罪に定めない。」イエスは、「わたしが来たのは、世をさばくためではなく、世が救われるためである。」と言われました。世はさばかれる必要がなかったのです。すでにさばかれていました。イエスは世をさばくために来られたのではありません。もうすでにさばかれていました。「わたしが来たのは、世が救われるためです。」ですから、姦淫の現場で捕らえられた女に対する、麗しいことばがあるのです。「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。今からは決して罪を犯してはなりません。」

サタンは、いつも私たちを罪に定めます。あなたがつまずいたとき、また失敗したとき にいつも、サタンはあなたに指をさして、あなたを罪に定めます。彼は絶えず、神の力よ りもあなたの弱さや失敗に目を留めるようにさせます。神に気に入られるように、頑張ら なければならないとあなたに説得してきます。あなたは神から祝福を受けるに値しない、 あなたは救われるに値しないと絶えず語りかけてきます。問題は、サタンが私たちを罪に 定めるとき、かなり強力な立証をしてくることです。けれどもイエスは、私たちの罪のた めに死なれ、また、よみがえられて、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしをされ ています。「こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは 決してありません。」私たちが失敗すると、聖霊が誤りを認めさせて下さいます。私たち は、そのことをよく知っています。聖霊は優しく語られます。「これは正しくありませ ん。あのあなたの対応のしかたは、反応のしかたは、正しくありませんでした。自分の肉 よって反応しました。怒りによって反応しました。」けれどもこれは、罪に定める (condemn)ことではありません。これは、誤りを認めさせる(convict)ことです。聖霊があな たをキリストのかたちと同じ姿に変えられるとき、あなたの心に働かれて、改善の必要が あるところを指し示されます。聖霊が誤りを認めさせられるとき、その最終的な結果、自 分の罪をイエスに告白せざるを得なくなり、きよめを受け入れます。ヨハネは言いまし た。「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺いており、真理は私たちのうちにあ りません。もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その 罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。(1ヨハネ1:8、9) ら、聖霊は私たちに自分の失敗を気づかせて下さり、「ああ、主よ、ほんとうに、ごめん なさい。主よ、今あなたの赦しを受け取ります。イエス様、あなたの愛と、きよめと、赦 しを感謝します。」と言わずにはいられなくさせ、私を十字架へ急いで行かせます。サタ ンは私のところに来て、「おまえは、どうしようもない男だ。何回も失敗したのだから、 神はもう、おまえに匙を投げないとだめだ。もう望みはないのさ。あんなことをしてはい けないことは、十分承知していたはずだろう。それなのに、おまえはやってしまったのだ から、どうして神から何かを期待できようか。」と言って、私をいろいろと告発して来る ことがよくあります。私を罪に定め始めます。私は、かつて、それに耳を傾けていまし た。「ああ、そのとおりだ。もうだめだ。もう祈るべきじゃないし、神から何かを期待し てはいけない。」それで、このように罪に定められることによって、神から遠ざけられて しまいます。交わりをしたくないと思います。聖書を読みたくないと思います。祈らなく なります。自分はそのようなものに値しないと思うようになるからです。その結果、私は 神から遠ざけられてしまうのです。けれども、そいつは卑劣で、狡猾であることを学びま した。サタンの目的は、私の弱点を見せて、助けを得られるところから私を遠ざけてしま

うことです。彼がこれ以上そのようなことをするなら、私はこう言います。「おまえの言 うとおりだ。俺はどうしようもない奴だ。けれども、イエスは、俺のようなどうしようも ない奴のために死なれたのだ。おまえがやっていることのために、俺が恐れて十字架から 遠ざかるのではなく、俺は十字架に引き寄せられているのだ。」あなたが振り返って、そ れを逆手に取って、「そのとおりだ。私はイエスが必要だし、今、助けが必要だ。」と 言って、十字架に走り寄れば、サタンはすぐあきらめます。自分の計画が、逆転し、あな たを十字架から引き離すのではなく、むしろ十字架へと引き寄せたことを知るのです。も ちるん聖霊の目的は、私たちを十字架に導くことです。この方は、私たちに誤りを認めさ せると、イエス・キリストにある、赦しやきよめや強さや力のところまで私たちを引き寄 最後にパウロは、こう質問しています。「私たちをキリストの愛から 引き離すのはだれですか。」それから、ある分類の事項を挙げています。「患難ですか。 苦しみですか。迫害ですか。飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。」私たちを キリストの愛から引き離すのはだれですか。これらが私たちを引き離すことができます か。パウロは、「いいえ、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべ てのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。」と言いました。この方の愛に よって、これらすべてのことに打ち勝つことができるのです。それからパウロは、存在す るものの2つめの分類の事項を挙げています。パウロは言いました。「私はこう確信して います。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力 ある者も、高さも、深さも、そのほかどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにあ る神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」地上にあるどんなものも、宇宙に あるどんな力も、イエス・キリストにある神の愛から、あなたを引き離すことはできませ ん。神はあなたの味方です。神はあなたを召し、義と認め、栄光をお与えになりました。 イエスは、あなたのために死なれました。また、よみがえり、神の右の座に着き、あなた のためにとりなしていてくださるのです。そして、聖霊が、あなたの中に住んでくださっ ています。それによって、あなたに力を与え、あなたの弱い部分を克服するように助けて 下さいます。三位一体の神がチームになってあなたの味方をして下さっているのですか ら、あなたが負けることがありましょうか。神が私たちの味方であるなら、だれが私たち に敵対できるでしょう。これらはみな、一番最初の質問につながります。「では、これら のことからどう言えるでしょう。」どう言えますか。神が私の味方であり、イエスは私を 罪に定めておらず、愛しておられ、私のためにとりなしていてくださいます。この方の愛 から、何も私を引き離すことはできません。「では、これらのことからどう言えるでしょ う。」私は、言葉を失ってしまいます。どう言えるでしょう。私はよく、「イエスさま、 ありがとうございます。」と言います。私はよく、「栄光あれ!」と言います。私はよ く、「ハレルヤ。」と言います。あなたは、これらのことからどう言えるでしょう。私た ちは、このすばらしい、すばらしいキリストにある立場が与えられています。それは、堅 持(security)と力のある立場です。これから、どう言えるでしょうか。「イエスさま、ありが とうございます。」

ローマ人への手紙9章(11/3/96)

「神に抗議するあなたは、いったい何ですか。」(Romans9:18-21) ローマ人への手紙 9 章 1 8 6 3 9

交読文:詩篇139篇

聖書通読の学びをしていますが、ローマ書9章まで来ました。これからの3つの章で、 パウロは神の主権のことを主題にしています。これは、私たちが理解するのが難しい、い や、理解するのが不可能な主題です。ただ難しいだけではありません。私たちは、神が主 権を持っており、すべてを支配されていることを知っています。神は、みこころのままに 何でもすることがおできになります。それは神だからです。けれども、私たちは、神が私 たちに自由意志を下さったことも知っています。それは選択をする能力です。神が主権を 持っておられるのに、私に選択をする能力があるなど、どのようにして可能なのでしょう か。これは、私たちの頭の中では両立することができない難しさです。これは、信仰に よってのみ決着がつく問題です。神が言われているのだから、私には理解できないけれど も信じよう。ですから、パウロは次の3つの章で、神の被造物に対する主権の問題、主題 を取り扱っています。ここ9章には18節から次のようにあります。「こういうわけで、 神は、人をみこころのままにあわれみ、またみこころのままにかたくなにされるのです。 すると、あなたはこう言うでしょう。『それなのになぜ、神は人を責められるのですか。 だれが神のご計画に逆らうことができましょう。』しかし、人よ。神に言い逆らうあなた は、いったい何ですか。形造られた者が形造った者に対して、『あなたはなぜ、私をこの ようなものにしたのですか。』と言えるでしょうか。陶器を作る者は、同じ土のかたまり から、尊いことに用いる器でも、また、つまらないことに用いる器でも作る権利を持って いないのでしょうか。」神の主権です。神には、私の人生と生活をどのようにでも造るこ とがおできになるのです。私には、この方に抗議する権利は何もないのです。「あなたは なぜ、このようなことをされたのですか。」「なぜこのようなことをお許しになったので すか。」と言うことはできません。

ここの箇所から少し戻りますと、パウロがまず最初に、11節でラケル(訳者注:リベカのことか)から生まれたヤコブとエサウの双子のことを教えています。ふたりがまだ生まれておらず胎の中にいるとき、神は、「兄は弟に仕える。」と言われました。「ちょっと待ってください。彼らはまだ、生まれてもいないのです。まだ善も悪も行なっていないのです。『兄は弟に仕える。』などと、神はどうして言うことがおできになるのですか。それでは不公平です。」先週私たちは、神の予知について話しました。神はすべてを知っておられます。起こる事のすべてを、神はすでに知っておられます。どのような結果になるのか、神は知っておられます。神は、ふたりがまだ生まれてもいないときに、兄のエサウが世の人となり、長子の権利を完全に侮り心に留めず、肉に従って生きて、物質的な祝福を失ったことでしか泣かなかないのを知っておられました。弟がより霊的な性格を呈し、霊的なことや長子の権利などに興味を持つことを知っておられました。神は前もってこれらのことを知っておられたので、「兄は弟に仕える。」と言われました。それは、神が、御霊の人が常に肉の人に勝ることをご存じだからです。それで、神は予知によって、「兄が弟に仕える。」と告げられました。

それからパウロは、モーセのことを話しています。「神はモーセに、『わたしは自分のあわれむ者をあわれみ、自分のいつくしむ者をいつくしむ。』と言われました。」つまり、「わたしは神である。わたしは自分が望んでいることをしているのだ。わたしは、あわれみたいと思う者は、だれでもあわれむことができる。愛したいと思う者は、だれでも愛せる。」ということです。その通りです。神はそれをおできになります。あわれみとい

つくしみについては、何か私たちが当然受けるに値するものではありません。これは、私のところに当然到来することになっているものではありません。「神は私にあわれみをかける借りがある。」と言うことはできません。私は、神のあわれみに値する者ではありません。ですから、神のあわれみといつくしみは、神からの好意であって義務ではありません。私たちのだれもそのようなものに値しないので、神は、「それでは、わたしがあわれむ者をあわれみ、わたしがいつくしむ者をいつくしむ。」と言われたのです。これに対して、私たちは何の議論も差し挟むことはできません。それは、神は神であり、みこころのままに行なうことがおできになるからです。

それからパウロは、神がパロに言われたことを教えています。「わたしがあなたを立て たのは、あなたにおいてわたしの力を示し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためであ る。」聖書は、神がパロの心をかたくなにされたと言っています。さて、神は、「目的 は、わたしの力を全世界に示すことである。したがって、わたしはかなくなにする者をか なくなにすることができ、あなたの心をかたくなにした。」と言われたのです。モーセが 来て、「主がこう仰せられます。『わたしの民を行かせなければならない。』」と言った とき、パロは、「主とはいったい何か。私が聞かなければならないのか。」と言いまし た。エジプト人に下った災いをとおして、神はパロに、主がどのような方であるかを示さ れました。エジプト人に下った災いは、実はエジプトの神々に下った災いでした。神は、 彼らの神々を打たれたのです。人間の神々よりも力があることを示されました。ついに、 これらの災いの結果、パロは、「ここから出て行け。おまえの民を行かせせよ。二度とお まえの顔を見たくない。」と言いました。モーセが民を導いて出て行かせたとき、パロ は、「われわれはいったい何ということをしたのだ。奴隷たちを失ってしまった。彼らを 捕まえて、取り戻しに行こう。」と言いました。そこで彼はエジプトの軍勢を率いて、彼 らを捕まえるために取り戻しに行きました。エジプト軍は紅海にまで彼らを追跡しまし た。そこで軍勢はおぼれ死にました。さて神は、「わたしは、この目的のために、あなた の心をかたくなにしたのだ。全世界にわたしの力を示したかったのだ。」と言われまし た。世界中が、イスラエルの神がイスラエルの敵に対して行なわれたことを聞きました。 神がどのようにエジプト人とエジプトの軍勢を滅ぼされたかを聞きました。それで、世界 の人々は神を恐れました。ですから、神は、「わたしがあなたを立てたのは、あなたにお いてわたしの力を示し、わたしの名を全世界に告げ知らせるためである。」と言われたの さて、もし神があわれみたいと思う者をにあわれみ、かたくなにしたいと願う者 をかたくなにするなら、パウロは、「あなたはこう言うでしょう。『それなのに、神は私 を責められるのですか。私は神が造られた者でしかありません。だれが神に逆らうことが できましょう。もし神がかたくなにされるのなら、だれが神に逆らうことができましょ う。』」と言っています。そこには、神が人のこころをかたくなにされ、そのかたくなな 心を持っていることを罰せられるのは、不公平だ、という考えがあります。パウロは合理 的に説明せずに、ただ、「しかし、神に言い逆らうあなたは、いったい何ですか。」と告 げました。神に関する限り、何が公平で何が不公平か言うことができる私は、いったい何 ですか。私は、神と同じ部類に所属してさえいないのです。神はすべてをご存じですが、 私はほとんど知りません。私は決断をしますが、それが正しい決断であればと願います。 神は決して、「しまった!」とはおっしゃいません。神は、ご自分のなさっていることを ご存じです。神は、すべての決断の結果をご存じです。したがって、神は公平ではないと 言って神に抗議する私は、いったい何ですか。それでパウロは、「神に言い逆らうあなた は、いったい何ですか。」と言いました。

さて、旧約聖書に、ヨブについての興味深い話があります。ヨブは、物理的に様々な不幸を経験しました。自分の持ち物を失い、子どもを失いました。あまりにも多くの不幸を経験したので、友人が彼を慰めにきました。でも彼らはヨブが経験していることを理解で

きませんでした。ヨブも自分の体験を理解していませんでした。ですから双方とも、すべ ての場面で神を誤解していました。彼らには、自分たちなりの根拠があって、それは概 ね、「ヨブ。おまえは悪者で、隠れた罪がある。おまえが隠れた不正を持っているから、 神はおまえをずたずたにされているのだ。」というものでした。ヨブは、「私は何もその ようなことは知らない。良いことを行なっていたつもりだ。」と言いました。「いや、嘘 をついているだろう。何か隠しているに違いない。」ついにヨブは怒って、「おしゃべり な奴め。とっとと、消え失せろ。来て助けてくれなどと言った覚えはない。あなたがた は、慰めるのがへただ。何の助けにもなっていない。(ヨブ 16:2参照)」と言いました。 ヨブの経験している問題をつきとめようとして、これら年取った者たちが話をしていたの を聞いていた若者は、若い青年は、こう言いました。「あなたたち、年よりは、いったい どうしたことか。年の多いのだから、知恵があるはずなのだが。私はあなたたちに配慮し ていたが、ヨブを助けることも、彼の問題を解決することもできていない。私が教えてあ げよう。私が悟りを得た。(32:6、7参照)」彼は、これから話すぞということを多く語り ましたが、少しもそれが何であるのかは言わず、彼の思いついた知恵をずっと話しまし た。けれども彼はヨブのほうを向いて言いました。「なぜ、あなたは神と言い争うのか。 神のなさることに対し、神があなたにいちいち説明してくださらないと言って。(ヨブ33: 13リビング・バイブル参照)」神は、あなたに答える借りなどないのだ。神はご自分のこ とを説明する必要はないのだ。神があなたに申し開きをする必要などないのだ。神は、あ なたに対し説明の義務を負われてはいない。私たちが神のことろに来て、「神さま。なぜ こんなことをなさるのですか。」などと言って、私たちの生活で起こっていることについ て、神が応答し、答えてくださるようにしようとすることが何と頻繁にあるでしょうか。 この若者は、「ヨブよ。神はあなたに答える借りなどないのだ。神は、説明をする借りな どないのだ。」と言いました。それから40章で、神がヨブに語られました。「非難する 者が全能者を教えるのか。(訳者注:40:2参照。欽定訳では、「争おう」のところが、 "instruct(教える)"となっている。)」ヨブよ、わたしに命じるのか。何が最も良いことかを わたしに教えるのか。みなさんは、このようなことをしたことがありませんか。神を教え ようとしたことがありませんか。私はあります。また神は言われました。「あなたはわた しのさばきを無効にするつもりか。自分を義とする(または、義と見せる)ために、わた しを罪に定めるのか。(40:8)」あなたは、大胆不敵にも、自分が神よりも正しいと考えるの か。あなたが、「神はなぜこのようなことをなさるのだろうか。」と言っているときは、 実は、「もし私が神だったら、もっと良い方法を取った。」と言っているのです。ですか ら、それが愚かであることがわかります。人生に不可解なことがあり、起こっていること をすべて理解することができないので、神に抗議しようとしてしまいます。自分には正し いように見えないからです。けれども、私にはすべての回答がないし、すべての理由を知 らないし、すべての事実を持っているわけではないのです。

イエスは、興味深いたとえを話されました。こう言われました(訳者注:以下マタイ20: 1-16参照)。「ある人が、自分の畑の刈り入れをしなければならなかった。そこで、彼は朝早く市場に行くと、何人かの人が立っていた。『君たち。向こうに畑を持っているのだが、刈り入れをする人たちが必要だ。今日出て行って畑を収穫したら、一人あたり20ドルを上げよう。』と言った。ある者が、『20ドルか。』と言いますと、その人は『そうだ。』と答えた。それでみなが出て行き、畑の刈り入れを始めた。その人が昼ごろに市場に戻ると、何もせずに立っている者がいたので、『おい、仕事がほしいか。私の畑の刈り入れをしないか。』と言った。そこで正午に彼らは出て行き、畑の刈り入れをしている者たちに加わった。彼は、夕方の5時に、また、市場で何もせずに立っている者たちがいるのを見た。『おい、君たち。仕事がしたかったら、私の畑で刈り入れをしなさい。』と

言ったので、彼らは出て行って畑の刈り入れをした。6時に、合図が出され、一日の仕事 が終わり、賃金を払う時間になった。」律法によると、労賃を朝までとどめてはいけませ んでした(レビ19:13参照)。毎日払わなければなりませんでした。「そこで、彼らは賃金 を受け取りに来た。午後5時に出て来た者たちが最初に賃金を受け取り、彼はおのおのに 20ドルを与えた。正午に出て来た者たちが賃金を受け取り、彼はおのおのに20ドルを 与えた。朝早く出て来た者たちが賃金を受け取り、彼は20ドルを与えた。彼らは、 『ちょっと待て。これでは不公平だ。20ドルしかくれないのか。』と言った。その人 は、『あなたたちと朝に取り決めをしたとき、私はいくら払うと言ったか。』と言うと、 彼らは、『20ドルだ。』と言いました。『私は20ドル渡さなかったと言うの か。』『いいや。』『では、なぜ不公平なのか。そういう契約だったではないか。』『で も、あなたは一時間しか働かなかった彼らに、20ドルを渡した。』彼は言った。『お い、これは私の金ではないか。私のお金を、私のしたいようにできないのか。私はこの金 で良いことをしたいと思ったから、あなたたちは私を悪く見るのか。』」このたとえで言 わんとされていることは、すべてが神のものであるのだから、神がそれをみこころのまま にされることができないのだろうか、神の望まれるようにする権利はないのか、というも のです。神よ、それは不公平です、と私たちに言われずとも、神が人をあわれみ、いつく しむ権利を持っておられないのでしょうか。

パウロは、「形造られた者が形造った者に対して」、『あなたはなぜ、私をこのような ものにしたのですか。』と言えるでしょうか。」と言いました。みなさんは鏡を見て、そ の質問をしたことがないでしょうか。「神よ。あなたはなぜ、私をこのようなものにした のですか。」と。そこでパウロは、陶器師と陶器の考えを話しはじめています。形造られ た者が、形造った陶器師に向かって、「あなたはなぜ、このようなことをしたのですか。 あなたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。」と言います。聖書では3回、神の 人間に対する主権を描写するために、この陶器師と陶器のたとえが使われています。まず 最初はイザヤ書45章ですが、「ああ、自分を作った者に抗議する者。粘土は、形作る者 に、『何を作るのか。』とか、『何をしているのか。』などと言うであろうか。(45:9参 照)」パウロは、ここのイザヤ書の箇所をローマ書で引用しています。エレミヤ書では、 エレミヤは主に陶器師の家に下れと命じられました(訳者注:以下 18:1-6参照)。「そこ で、あなたに、わたしのことばを聞かせよう。」と言われました。そこでエレミヤは、陶 器師の家に行き、陶器師がろくろで仕事をしているのを見ました。陶器師の制作していた 器が、その手の中で仕損じました。そこで、再びそれを陶器師の気に入ったほかの器に作 りました。それから、エレミヤに主のみことばがありました。「イスラエルの家よ。この 陶器師のように、わたしがあなたがたにすることができないだろうか。- 主の御告げー 見よ。粘土が陶器師の手にあるように、イスラエルの家よ、あなたがたも、わたしの手の 中にある。」

私は、この陶器師と粘土の話で3つのことに気づきました。それには、3つの要素があります。まず最初に、陶器師の意のままになっている、ろくろがあります。陶器師は、足でろくろを回します。ろくろの回転の速さを調節します。陶器師が、それを仕切っているのです。陶器師は、このろくろを使って、粘土をかたどり形作ります。それで私は、ろくろが神の支配の下にある私たちの身の回りの状況のように見えます。それによって、神は私たちをかたどり形造られます。私たちは日々、私たちに起こる事によってかたどられます。ろくろは、陶器師が粘土をかたどるための状況です。2番目に気づいたことは、粘土のかたまりです。粘土のかたまりそのものは、地中に豊富にありますので、そのままでは何の価値もありません。けれども、粘土の中には、ものすごい価値になりうる潜在性があります。陶器師の技能によって、ほとんど何の値打ちもない粘土のかたまりが、値踏みの

つけられないほどの価値を持つことがあります。それは、陶器師の技能によるのです。そ して、私は陶器師に気づきました。彼は、粘土に対し絶対的な力を持っています。粘土が 回っているろくろを調節し、かたちとすがたを作るために粘土に圧力をかけます。そこで 私は、陶器師が恐ろしいほどの絶対的な力を粘土に対し持っているのを見るのです。これ は、神と人間を写し出しています。神はみこころにままに、私たちに対し何でも行なわ れ、絶対的な力を私たちに持っておられます。それは、神が望まれているものを何でも造 られるためです。あなたは、それが怖いですか。陶器師の心と、陶器師が粘土に対し抱い ている強い関心と愛情がわからないと、怖くなるのです。 パウロは、「陶器師に、『あ なたはなぜ、私をこのようなものにしたのですか。』と言うあなたは、いったい何です か。陶器を作る者が、粘土から作りたいものを何でも作る権利を持っていないのでしょう か。」と述べています。陶器師が願えば、粘土のかたまりを取って美しい器を作り出し、 玄関の広間の目立つところに飾る置くことができるのです。自分の家に入る客は、何の価 値もない粘土のかたまりから作られた器の美しさに釘付けにされます。また同時に、陶器 師が望むなら、家のごみを入れて運んで埋めるために、ごみ箱がわりの器を作ることがで きます。粘土は、その運命に関してとやかく言うことはできません。陶器師の気持ちで左 右されます。もし私をごみ箱がわりの器に造られるなら、「あなたはなぜ、私をこのよう なものにしたのですか。」と言う私は、いったい何なのでしょう。

さて、エレミヤ書にある話には、興味深い意外な展開を見ることができます。というの は、「陶器師が器を作っていると、その手の中で器が仕損じた」とあるからです(訳者 注:口語訳18:4参照)。つぼが陶器師の手の中で仕損じるのは、どうしてなのでしょうか。 通常は、粘土の中に、固くなったかたまりがあるために、そうなります。陶器師が粘土を かたどって器を作るには、まず最初に粘土を練ります。水をつけて、こねます。かたまり をみななくして、それをやわらかにし、適切な固さにし、融通のきくようにします。それ をろくろにのせて、ろくろを回したとき、陶器師がさわると反応して従うようにするため です。ですから、陶器師はまず粘土をこねて、かたまりを粘土から除きます。陶器師は時 に、かたまりを取りきれないことがあります。十分こねられておらず、やわらかになって いません。そのため、この粘土がろくろの上で回り、陶器師が圧力をかけ、そのすがたと かたちを作り出そうとするときに、指あるいは道具がその固くなっているかたまりにぶつ かります。その粘土は陶器師に従わずに回っているので、器が仕損じます。陶器師は、 作っている器がその手の中で仕損じたのを見たら、次に何をするでしょうか。ろくろを止 めて、粘土を取り、再び粘土をまた、練り、こね、かたまりを取り除いて、陶器師が触れ れば融通がきくようにします。それは、自分の願っているような器に粘土を形作るためで す。これを逆に見ると、私は神のみこころに逆らうができます。粘土の中のかたまりにな ることができ、私によって、神のご計画が妨害されうるのです。これが逆からの見方で す。確かに神は主権をお持ちですが、私には責任があり、選択があります。陶器師にゆだ ねるか、逆らうか。私に対する神のみこころに、私が争うか。私が神のみこころと争え ば、そこで私の人生や生活が陶器師の手の中で仕損じます。けれども、神は、忍耐と愛を もってろくろを止めて、粘土を取って、かたまりを練りはじめて下さいます。神は何度 も、私を0からスタートさせました。数えたらきりがありません(訳者注:もともとの英 語は、I wish I had a dime for every timeで、直訳すると、「そのたび毎に10セント硬貨を ためていたらなあ(相当たまったのに)。」ということになります。)。神はまた私をふり だしに戻さなければなりませんでした。でこぼこしているところを取り出し、かたまりを 取り出されます。忍耐と愛と私のうちに働き、神のみこころにかなった神を喜ばせる器を 造られるために、もう一度初めからやり直されます。エレミヤが、また初めからやり直す 過程を見ていると、神は彼に語られて言われました。「イスラエルの民に語れ。粘土が陶 器師の手にあるように、彼らもわたしの手の中にある。彼らは、仕損じた。わたしの願いに逆らい、わたしの行なおうとしたことに逆らったからだ。しかし、わたしはやり直して、わたしを喜ばせる器に造るのだ。」私を取り扱って下さった神の忍耐のゆえに、神に感謝します。

陶器師と粘土についてもう一つ考えられることは、陶器師は粘土を練り始めると、頭 で、粘土をどのようなものにするか、自分の意図しているものがあります。頭の中に、目 的と計画があります。この粘土から、もしかしたら美しい器ができるかもしれないし、も しかしたらただ、台所で水を溜めておくような実用的な目的の器ができるかもしれませ ん。しかし、陶器師には、頭の中で、粘土からどのようなものを作るか計画を持っていま す。しかし、粘土は陶器師が何を考えているのか、何も知りません。粘土は、陶器師の思 いが何であるか、陶器師が粘土に触れるときに、それに従うことによってのみ知ることが できます。神が私たちのうちで働かれるとき、私たちは神の御思いが何であるかわかりま せん。神が計画されている最終的な結果がわかりません。神のみこころは、神が私に触れ られるときに、それに従うことによってのみ発見することができます。もし抵抗すれば、 神のご計画は仕損じます。陶器師の思いは、私を押す力に従うことによって、のみ知るこ とができます。陶器師の力強い手を見て、その押す力を感じて、陶器師の思いが何である か確かでないときがあるでしょう。ろくろが回っていて自分の生活がただ大きな渦のよう に見えて、わけが分かららいかもしれません。ろくろが回っていて、あなたの心が安定せ ず一体どうなるのかわからず、自分にふりかかることが不安で、恐れが大きな恐れがあり ます。今何をすればいいのか、と考えます。恐れは、陶器師の心がわからないときに来ま す。あなたは力強い手を見ていますが、その心も見なければなりません。陶器師の心を見 れば、あなたに対する愛があふれ出ているのが見えます。神があなたをどれほど愛されて いるのか悟るとき、この方があなたに触れてくださるときに、神がもたらされた状況に従 いやすくなります。全き愛は恐れを締め出します(13ハネ4:18参照)。あなたの愛が全き ものとなり、神が全き愛であなたを愛されていることに気づいたら、恐れは去ります。そ してこう言うでしょう。「主よ、私の願いではなく、みこころのとおりにしてください。 (ルカ22:42参照)」もはや逆らうことなく、もはや争うことなく、陶器師が私に願ってい る器になるように自分自身をゆだねます。これはどこにおいても、どのようなかたちであ れ、神が用いられるのに適した尊い器です。

ローマ人への手紙 | 0章 (| 1 / 1 0 / 9 6) 「平和の福音」(Romans10:15)#8640 ローマ人への手紙 | 0章 | 5節

交読文:詩篇91篇

聖書通読の学びをしていますが、今週はローマ人への手紙10章まで来ました。今日の 午後にそこをもう一度読んで、今晩7時に参加してください。そのときに、ローマ人への 手紙10章全体を学びます。しかし今朝は、みなさんといっしょに15節を見ていきたい と思います。ローマ書10章15節です。ここでパウロは質問をしています。「遣わされ なくては、どうして宣べ伝えることができるでしょう。」そして、イザヤ書から引用して こう言っています。「次のように書かれてあるとおりです。『平和の福音を宣べ伝え、幸 いな良い知らせを伝える者の足は、なんと美しいことか。』(訳者注:欽定訳には、 p reach the gospel of peace という部分がある。残りの部分は、新改訳と新共同訳を参考 にして訳しました。)」幸いな良い知らせである、平和の福音です。さて、パウロはこの 箇所で、というか、数節戻りますが、こう告げています。「『主の御名を呼び求める者 は、だれでも救われる。』しかし、信じたことのない方を、どうして呼び求めることがで きるでしょう。聞いたことのない方を、どうして信じることができるでしょう。宣べ伝え る人がなくて、どうして聞くことができるでしょう。遣わされなくては、どうして宣べ伝 えることができるでしょう。」ここに、教会の宣教の概念の全容があります。福音を宣べ 伝える人を遣わし、人が福音を聞き、イエス・キリストの真理を信じ、それで平和を見出 だすようにします。

世界は、対立(conflict)で満ちています。この対立は、幼児期から見出だされます。今朝、 2歳児の保育科に行けば、そこに対立が見られるでしょう。ひとりの子が、自分が気に 入ったおもちゃを見つけて、拾って遊ぶのですが、別の子がそのおもちゃを見て、自分も それで遊びたいと思い、最初の子からつかみ取ろうとします。結果として、だれがこのお もちゃを手に入れるかで対立が起こります。対立がこうも早く起こることは、興味深いで すね。しかし、ただ聖書が教えていることを確認しているにすぎないのです。つまり、私 たちには罪の性質があるということです。わがままになる方法を、自分の子どもに教える 必要はありません。生後18ケ月になった子どもを集めて、「おとうさんが、わがままに なる方法を教えてあげるからね。これが最初の授業だよ。おもちゃを持っているときに は、だれからも取られてはいけない。もし誰かが取ろうとしたら、しっかりつかんで反対 を向いて、『ぼくのだ!』と言うんだよ。じゃ、練習しよう。『ぼくのだ!』と言ってご らん。」とは言いません。なぜあの子たちは、「ぼくのだ!」と言うのでしょうか。だれ がそのようなことを教えたのでしょう。私たちには根っからわがままな性質があるからで す。しかし、これが対立をもたらします。そのため、対立はごく早いうちに始まるので す。校庭に行って、小学生が校庭で遊んでいるのを見れば、校庭でも対立があるのがわか ります。ひとりの子がブランコに乗りたいのに、別のもうひとりの子がそのブランコに乗 りたいと思っています。ある子が、ボールで遊んでいる子から、そのボールを蹴って遠く にやってしまって走って逃げると、ふたりがボールを追い求めますが、そこにも対立があ ります。対立は生涯を通してあるようです。もちろん大人にも、怒りや攻撃などを表現す るのに一般に容認されている形がありますが、それは、スポーツと呼ばれています。これ も基本的には対立です。対立は家族の間でもあります。親子の間でも、特に子どもが10 代になると対立があります。兄弟同士の対立があります。夫婦の間に対立があります。

けれども、私たちには、外面的な対立(conflict)だけではなく、内面的な葛藤(conflict)もあります。理想の自分と現実の自分の間に葛藤があります。自分の設定した基準に達成してい

ないと葛藤があります。やならければいけないと分かっていることをしなかったり、すべ きではないと分かっていることをしていると葛藤があります。こうして、理想の自分と現 実の自分の間に、内面的な対立が起こります。難しい決断をしなければならないとき、葛 藤があります。内面的な葛藤がよく起こるのは、対人関係のためであったり、決断を迫ら れたりするからです。時には、葛藤のために一晩中眠れないこともあります。夜に目が覚 めると、自分の頭の中で問題や状況をくよくよ考えていることがあります。布団の中にい るのに、再び寝付くことができなくなることがよくあり、どうすればいいのか、どうやっ たらいいのかと、解決しようとしているのです。困惑と葛藤があるのです。人は、こうし た内面的な葛藤を経験します。自分自身を喜ばせるために生きるべきか、それとも他人を 喜ばせるべきかで、葛藤があります。これをゆずるべきだろうか。辞退すべきだろうか。 それとも、自分の権利をふりかざすべきか。こういう葛藤は、実に多くの場合、「どうで もいいさ。大勢に変わりはない。」と言って、おさまります。けれども、我を通したいと 私たちは感じてしまうのです。妻がお昼を外で済ませたいときも同じです。私は家でサン ドイッチを食べたいのです。そこで対立が始まります。出かけて外食しても構わないわけ ですが、私は家にいたいのです。「わかった、じゃあ行こうか。どこに行きたいの?」と 言って簡単にすむのですが、それは自分が折れることになります。多くの対立は、自分の やり方を押し通すから出てくるのであって、多くの場合はさほど重要ではないのです。け れどもヤコブが言うように、小さな問題が大きな火をつけるのです(ヤコブ3:5参照)。 いったん対立が始まると、だれが主導権を握っているかをめぐって張り合うのです。パウ 口は、対立を、内面的葛藤をローマ7章の中で語っています。「自分がしたくないことを 行なっています。自分がしたいと思っていることをしていません。」と言いました。実に 多くの場合、自分の憎むことを行なっているのです。自分の肉が自分の霊に逆らい、自分 の霊は肉に逆らい、御霊に従うべきか、肉の願うことに従うのかということで内面的な葛 藤があります。そして人間には、神との対立があります。預言者イザヤは、「おのれを 造った者と争う者はわざわいだ。(口語訳イザヤ45:9)」と言いました。けれども、人間は 神と争うことが実に多いのです。自分の意思を神のみこころに従わせるのか、自分のこと をしてしまうのか、ということで、私の願いや欲や意思が神の律法と争います。自分の生 活の中で神とその権威に逆らうと、おびただしい内面的な葛藤を経験するのです。それ は、神に争うからです。当然、神に対する争いは敗け戦です。それでも私たちは降参しま せん。ある詩人が、「私の頭は血だらけだが、屈服しないぞ。」と書いたとおりになりま す。それは、何と愚かなことでしょうか。ほとんどの対立は、善と悪の2つの力が働くた めに起こります。正しいとわかっていることに従うべきか、間違っているとわかっている ことに従うべきかで、この2つが戦っているのです。

対立は、対人関係や、家族だけに限られたものではありません。私たちが住んでいる世界を見てください、世界の対立を見てください。ニュースを見ると、人種的の対立があります。先週だけでも、世界には数多くの対立がありました。そのいくつかは人種的問題に関することでしたが、対立は、ただ単に(皮膚の)色の違いだけではなく、宗教の対立があり、政治的対立があります。なぜ、このような対立があるのでしょうか。なぜ人間は、平和に過ごすことができないのでしょうか。戦争によっては何も決着がつかないことを、どうすれば学ぶことができるのでしょうか。落ち着いてよく考えて、互いに握手を交わし、「それで結構です。」と言うことができないのでしょうか。戦いをしないように、折れることがなぜできないのでしょうか。平和のために、なぜ降伏できないのでしょうか。

対立は、悪の結果だと聖書は教えています。神は、「悪者どもには平安がない。(イザヤ57:21)」と言われます。また、「悪者どもは、荒れ狂う海のようだ。静まることができず、水が海草と泥を吐き出すからである。(イザヤ57:20)」と言われました。ヤコブは対立

について語っています。「ねたみや敵対心のあるところには、秩序の乱れ(conflict)や、あらゆる邪悪な行ないがあるからです。しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、次に平和、寛容、温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。義の実を結ばせる種は、平和をつくる人によって平和のうちに蒔かれます。(ヤコブ3:16-18)」ヤコブは、次のように尋ねました。「何が原因で、あなたがたの間に戦いや争いがあるのでしょう。あなたがたのからだの中で戦う欲望が原因ではありませんか。あなたがたは、ほしがっても自分のものにならないと、人殺しをするのです。うらやんでも手に入れることができないと、争ったり、戦ったりするのです。(ヤコブ4:1-2)」けれども対立や争いや戦いがあります。それは、自分のやり方を貫きたいからです。他の人が自分に折れてほしいからです。自分の望むことが実行されることを願うからです。しかし、上からの知恵は、純真であり、平和で、寛容です。温順であり、また、あわれみと良い実とに満ち、えこひいきがなく、見せかけのないものです。対立は自分自身の欲から出てきます。自分の願いや自分の壁の内側に来ようものなら、ひどい目にあうぞ。」このような態度が私たちの経験する対立を生むのです。

私たちは、ほとんど絶えず対立の中にあり、対立に取り囲まれていますが、奥深い部分では、平和への願いと切望があります。だれが平和を望まないでしょうか。私たちの地域社会における社会的混迷や対立の記事を読むと、私たちは平和を待ちこがれます。ボスニアやアフリカやその他の地域など、世界で起こっていることを読むと、平和を待ちこがれます。私たちは、このような内面的な動揺や不安は嫌です。眠れぬ夜を過ごしたくありません。対立や動揺がなくなって、平和になりさえすれば、と願います。剣を鋤に、槍をかまに打ち直し、二度と戦いのことを習わない日について書かれていることを読みますが(イザヤ2:4参照)、そうなれば、何とすばらしい世界だろうと思ってしまいます。もし破壊兵器がなくなり、軍事予算を農業開発に充当させれば、みんなが十分のものを得ることができるでしょう。対立さえなければ、これほどすばらしい世界はありません。

パウロは、平和の良い知らせについて語っています。本当に平和でいられるのなら、そ れは良い知らせです。ある預言者は、来たるべきメシヤを伝えてこう言いました。「その 名は、『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、平和の君』と呼ばれる。その主権は増し 加わり、その平和は限りない。(イザヤ9:6-7参照)」ですからこの預言者は、人に平和を もたらす平和の君について語ったのです。これが、幸いな良い知らせをもたらす平和の福 音、平和の良い知らせです。イエスがユダのベツレヘムでお生まれになったとき、同じ土 地に、夜に羊の群れを見守っていた羊飼いたちがいました(訳者注:以下ルカ2:9-14参 照)。すると、主の使いが彼らのところに来て、主の栄光が回りを照らしたので、彼らは ひどく恐れました。御使いは言いました。「恐れることはありません。今、私はこの民全 体のためのすばらしい喜びを知らせに来たのです。きょうダビデの町で、あなたがたのた めに、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布に くるまって飼い葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのため のしるしです。」すると、たちまち、その御使いといっしょに、多くの天の軍勢が現われ て、神を賛美して言いました。「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上で平和 が、」えっ、何ですか?「平和が、御心にかなう人々にあるように。」メシヤの到来を預 言して預言者イザヤは、その名は、「平和の君」と呼ばれると言いましたが、この方が生 まれたので、今度は御使いが、「地の上で平和が、御心にかなう人々にあるように。」と 言ったのです。産着にくるまって飼い葉おけに寝ておられるみどりごは、神と人との間に 平和をもたらすために神に遣わされたのです。さらに、人との間の平和や、内面的な平安 ももたらしてくださいました。

しかし、この良い知らせは、まず最初に神との平和でした。不思議なことに、人々は神 と争います。預言者が、「おのれを造った者と争う者はわざわいだ。」と言いましたが、 人が神と争うことは多くあります。あからさまに神の律法に逆らいます。ある預言者は、 「何が善であるかは、お前に告げられている。(新共同訳ミカ6:8参照) 」と言いました が、自分は主の道を歩みたくないのです。神は、互いに愛するように命じられましたが、 自分が人を憎むのはもっともなことだ、とします。神は寛大になることを教えられました が、自分は、「この人が、何かほしいのなら、自分の手で働いたらどうなのか。私は自分 で働いて手に入れたのだ。」と思います。神は親切、愛、思いやりと赦しを教えられまし たが、自分は、「でもあの人たちは、私を利用した。仕返ししてやるぞ。」と思います。 それで、私は神の律法に逆らっているのです。神が教えられた自分がすべきことに従って いないのです。実は、神が教えられた自分のすべきことは、むしろ自分の肉と自分の願っ ていることに反しています。神は、「復讐はわたしのすることである、わたしが報いをす る。 (ローマ14:19)」と言われましたが、自分は、「遅すぎるし、手ぬるい。今じゃな きゃ。『目には目。歯には歯。(出エジプト21:24)』とあるではないか。」と言います。そ れで、神とその律法に戦っているのです。自分に対する神の権威に逆らっているのです。 しかし、この戦いを終わらせる早道は、神に降伏(surrender)することです。それは、「主 よ。逆らっていました、ごめんなさい。」と言うことです。あなたの中にある動揺は、神 と戦っているために起きているための動揺なのです。神と戦っている限り、自分の中に平 安がありません。神に降伏すると、それにともなって、自分の中に平安が与えられます。 突然、内側で何か変わった思いがします。不安がなくなり、動揺がなくなり、争いがなく なります。平安があるのです。イエスは、「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、 わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたに平安を与えます。あなたがたを休ませ てあげます。(マタイ11:28参照)」と言われました。これは、争いや動揺からの安息で す。これは、人がイエス・キリストに本当に明け渡した(surrender)ときの最初の意識だと、 私は思います。最初の意識は、深い安息と平安です。これはうるわしく、すばらしいもの です。事実、家に帰って、枕を下にして寝ると、本当に気持ちがいいものです。動揺があ りません。「神さま。私は今、あなたの味方です。もう、あなたと戦っていません。逆 らっていません。あなたの味方になりました。」神と平和でいることは、本当に気持ちが いいのです。それは、起きたら無くなってしまうかもしれないと思うので、眠りたくなく なるほどなのです。この瞬間にしがみついて、「ああ、実にすばらしい。」となるので す。これが神との平和であり、戦いは終わったいう感触です。「私は、今あなたに従って います。愛しています。あなたに仕えております。」パウロはコロサイ人に手紙を書い て、「あなたがたも、かつては神を離れ、心において敵となって、悪い行ないの中にあっ たのですが、今は神は、・・あなたがたをご自分と和解してくださいました。(1:21、22) 」と言いました。あなたは和解しました。戦いは終わりました。神と和解したのです。

神と平和を持つと、次に自分自身の中に平安が与えられます。神があなたがたにご自分の平和を与えられるからです。神は、あなたが平安でいることを望まれています。民数記6章で、主はモーセに、祭司アロンに告げて言うように命じられました。それは、モーセが、幕屋の中で民のために主の御前で奉仕をして、民が待っているところに出て行くところでした。そこで主は、「これがあなたの言うべき神のことばである。」と、民を祝福されようとしていたのです。「主があなたを祝福し、あなたを守られますように。主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように。詩篇の記者は、「主は、ご自分の民に力をお与えになる。主は、平安をもって、ご自分の民を祝福される。(29:11) 」と言いました。イザヤは、「志の堅固なものを、あなたは全き平安のうち

に守られます。その人があなたに信頼しているからです。(26:3)」と言いました。イエスは弟子たちに言われました。「わたしはあなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。(ヨハネ14:27)」またこうも言われました。「わたしがこれらのことを話したのは、あなた方が、わたしにあって平安を持つためです。(ヨハネ16:33)」パウロは、私たちのうちにある神の御霊の実が、愛、喜び、平安であると言っています(ガラテヤ5:22参照)。パウロはコロサイ人に、「神の平和が、あなたがたの心と思いを支配するようにしなさい。(3:15参照)」と書きました。あなたがたのうちに平安が与えられると、今まであった対立に決着がつきます。もう神と戦わず、人生を神に明け渡します。神はご自分の聖霊によって私を強めてくださり、御霊の実は、私が持っているこの愛と、喜びと、平安なのです。

このように自分の内側に平安があるので、他の人との平和があります。壁がくずれま す。もはや、守りに入る必要はありません。自分のものにしがみつく必要はありません。 自分の権利を主張する必要はありません。主にある平和と愛と喜びのうちに住むことがで きます。パウロは2章先で、「あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保 ちなさい。(ローマ12:18)」と言いました。また14章で、「私たちは、平和に役立つこ と・・を追い求めましょう。(14:19) 」と述べています。エペソ人には、「キリストこそ私 たちの平和であり、・・隔ての壁を打ちこわし、(2:14)」とパウロは書きました。イエス は、どのようにして民族や人種の間に存在する対立の中に平和を造り出されたのでしょう か。どのようにして私たちの間に平和を造り出されたのでしょうか。使徒パウロはこう 言っています。「あなたがたは、・・新しい人を着たのです。新しい人は、造り主のかた ちに似せられてますます新しくされ、真の知識に至るのです。そこには、ギリシャ人とユ ダヤ人、割礼の有無、」宗教的な違い、民族間の違い、文化的な違い、「未開人、スクテ ヤ人、奴隷と自由人というような区別はありません。キリストがすべてであり、すべての うちにおられるのです。(コロサイ3:10-11)」キリストは、かつて存在していた、文化と か、民族とか、何であれ、私たちを互いに隔てていた壁を打ちこわされたので、平和を造 り出されたのです。キリストは、これらの壁を打ちこわされました。今や私たちは一つで す。私たちはみな、キリスト・イエスにあって一つだということがわかります。

数年前に、私たちはニューギニアに行く機会が与えられました。ある日曜日の午後に、 非常に原始的な生活をしている村に行きました。電気はありません。政府は、町に一つの 水道口を設けて、水を得るためにすべての人がそこに行っていました。この村の酋長と私 の間には、非常に大きな文化的な違いがありました。言語の違いがあったので、直に互い に意思疎通ができませんでした。けれどもこの酋長は、イエス・キリストを受け入れてい ました。彼は、キリストにある兄弟でした。そして彼は、私たちをキリストにある兄弟と して受け入れてくれました。そこで彼は、私とケイのために、村の人々にごちそうを用意 させました。それは実に興味をそそりました。先住民がバナナの長い葉を持って回りに立 ち、はえをテーブルの食事から追い払っていました。それは、時々映画で見るようなもの です。先住民がいて、うちわであおいでくれている姿です。数千年もの間に文化が変化 し、私たちは隔絶され、彼はほとんど石器時代に住んでいるのも同然でした。このため、 夕食の後テーブル越しに真向かいに座っていて、ほほ笑むことによってしか意思疎通がで きませんでした。彼の場合は、ほほ笑んでも、歯抜け状態の笑みでした。彼は、キリスト を受け入れる前に、ニューギニアのジャングルでほとんどの男子がするように、そこに は、ビンロウの実(betel nuts)というのがあって、これを食べると歯をだめにします。歯が赤 くなります。ビンロウの実は小さな塊で、これでハイな気分になります。老人たちがそこ に座っていましたが、そこには、ビンロウの実を噛み締めたあとに吐いた赤い唾が水溜ま

りのようになっていました。ビンロウの実を噛んでは唾を吐いて、みんなハイな気分に なっていたので、ほほ笑んでいました。それで、この酋長は、歯抜け状態でほほ笑んでい ました。私の場合は、ペプシデント(訳者注:ペプシデントは、歯磨粉のブランド名で、 かつてのCMで s mile with Pepsiden t というキャッチ・コピーがあったそうです。日本なら さしずめ、「私の場合は、『白い歯にはホワイト』」のようなのり。)の笑みです。夕食が 終わったとき、彼はある先住民に一束の槍を持ってこさせました。6本ほどの槍がまとめ られていました。彼はそれを私に渡しました。通訳を通して彼は、「私は、これを人を殺 すために使っていました。けれども、彼がこれを私にくれてからは、」と言って彼は、自 分の言語で書かれている新約聖書を手に取り、「私はもうこれ(槍)はいらなくなったの で、あなたに差し上げます。」と言いました。私は彼に手を差し延べ、抱きしめました。 彼も私を抱きしめました。私たちはかなり長い間、互いに愛情を持って抱擁しました。そ の時に、私の心は彼の心をつながっていました。私のいのちは彼のいのちにつながってい ました。私は、説明することのできないような絆を感じました。彼は腰巻きしかしていま せんし、かつては彼もかつてはジャングルの人喰い人種で、その時もジャングルの人喰い 人種たちからさほど遠く隔絶されていませんでしたが、私たちは互いに実に抱擁し、抱き あっていたのです。私たちを一つにされたイエス・キリストによって、きずながありまし た。そこには対立はありませんでした。キリストが壁を打ちこわされたので、愛のきずな でつながれていたのです。かつては、この壁が対立を生み出し、他の人を引き離していま した。彼は違うし、自分と見かけが違うし、自分の文化に反するとか、何もかもがイエ ス・キリストにあって打ちこわされました。そこですべての人を見ると、そこには違いは ありません。彼らのうちにあるイエスのみしか見えません。ずっと前にこの教会で書かれ た愛の歌で、次のようになります。「町外れの小さな教会に、何マイルも離れた回りのさ まざまな所から、日曜学校にやってくる。長髪もいれば、短くきりそろえた髪の人もいる し、上着とネクタイの人もいるが、ようやく髪の長さをこえて、しっかりと互いの目を見 るようになることが、ようやくできた。」まさにこれです。私たちは、見かけや服装を見 ないで、目を見て、「わたしはイエスにつながれている。あなたはイエスにつながれてい る。だから、私たちは互いにつながれたものだ。私たちの間に壁はない。」対立は終わり ました。私たちを分けていた、分裂させていたものは、なくなりました。キリストこそ私 たちの平和であり、隔ての壁を打ちこわされました。私たちの宣べ伝える平和の福音は、 幸いな良い知らせです。

ローマ書のこの部分で、パウロはイザヤ書を引用しています。「良い知らせを伝える者の足は、山々の上にあって、なんと美しいことよ。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、」とありますが、イザヤは続けてこう言っています。「あなたの神が王となる。」とシオンに言う者の足は。(イザヤ52:7)」神があなたの王となっている時に、平安がわかります。平安があるのです。対立や問題に決着がつくと、あなたの心と生活で神が王となっておられるのです。

ローマ人への手紙 1 1 章(1 1 / 2 4 / 9 6) 「神の富の深さ」(Romans11:33)

ローマ人への手紙 1 1 章 3 3 節 # 8 6 4 1

交読文:詩篇14篇

聖書通読の学びをしていますが、今週はローマ人への手紙11章に入りました。11章 をもう一度読み返して、ぜひ今夜7時に参加して下さい。今夜、聖書を一節づつ学ぶ聖書 の学びをし、ローマ人への手紙11章を見てゆきます。しかし、今朝は、ローマ人への手 紙11章33節を見ます。そこでパウロは、急に意気軒昂し、賛美してこう告げました。 「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と 知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。なぜなら、だれが主の みこころを知ったのですか。また、だれが主のご計画にあずかったのですか(訳者注:英 語は、or who hath been his counsellor?なので、新共同訳の「だれが主の相談相手であっ ただろうか。」を参照して下さい。)。パウロは、人を贖う神のご計画について書いてき ました。パウロは次のことを示しています。神がイスラエルの民を選び、メシヤをこの世 にもたらされた。神がイスラエルの民を祝福し、メシヤをこの世にもたらすことにより、 イスラエル自体が全世界の祝福となることを約束された。けれども、イスラエルの民がメ シヤを拒絶したとき、神が異邦人に門戸を開かれ、彼らが神の民となるために神の祝福と 約束を受け取るようにされた。けれども、異邦人の完成のなる時に、神が再びイスラエル の民に戻り、もう一度、メシヤを通して救いの機会を与えられる。パウロは、この神のご 計画の全体、贖いの計画を見たときに、すなわち、すべてを含むことを、全ての人を含む ことを見たとき、ただ神の知恵と知識に驚きを覚えました。それで、ここで、「ああ、神 の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。(11:33)」と堰を切ったように述 べているのです。人を罪から贖うために、神はなんというすばらしい計画をお持ちなので しょう。何と底知れず深い富が示されているでしょう。何という知恵と知識が示されてい るでしょう。しかし、贖いを受けた者のみが、真にそれを感謝することができるのです。 そのことを理解し、感謝するためには、自分で実際に体験しなければだめなのです。世の 中の普通の人に、「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深い・・・」と話をし ても、「はぁ、なんだ?」という反応しか返ってきません。感謝することができないので す。それは、自分で体験していないからです。ある歌のように、「イエスの愛がどのよう なものかは、主に愛されている人しかわからない、主に愛されている人しかわからない」 のです。さらに、今朝歌ったように、「痛みの原因をつくったこの私のために救い主が血 を流し、死んでくださったこの恩恵を、私が受けるなどとは、何たることでしょう か」(訳者注:カルバリー・チャペルの賛美歌32番、作詞:チャールズ・ウエスレー、 作曲:トーマス・キャンベルAnd can it be that I should gain, an interest in the Savior's blood, died He for me who caused His pain)ということなのです。この贖い、神の救いの恵みを見 出だした私たちは、罪の赦しと、神とともに永遠に生きる希望をもたらして下さった、神 の知恵と知識に驚くのです。聖書は、「このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべ て隠されているのです。(コロサイ2:3)」と教えています。パウロは、コリント人の教会 に宛てた手紙の中で、「神の愚かさは人よりも賢く(1コリント1:25)」と書いています。そ してパウロは、神の贖いを見たとき、神の知恵と知識に心を奪われました。

私自身は、創造における神の知恵と知識を見ますと、心を奪われます。神が創造された様々な生命のかたちに魅了されます。ソロモンは、「なまけ者よ。蟻のところへ行き、そのやり方を見て、知恵を得よ。(箴言 6:6)」と言いました。私は蟻を見るのが好きです。蟻について、いろいろ思い巡らすのが好きです。蟻の脳の大きさはどのくらいかと。そん

なに大きいはずはないのに、蟻んこは大変賢いのです。砂糖がどこにあるか、台所のどこ に食べ物が残っているか、互いに意思疎通をすることができます。驚くべき小さい生物で すが、神によって造られました。すばらしいです。私は気に入っています。一方、知的で あるとされている人間の愚かさには、呆れてしまいます。人は、様々な生命のかたちが、 全くの偶然による産物であると説明しようとします。最近ある進化論者が認めたことが私 は気に入っています。不活性の物質から偶発的に生命が誕生する確立が、数学的に不可能 であることに直面したこの進化論者は、竜巻が廃品置き場を襲い、747型ジャンボ・ ジェット機を組み立てる方が、偶然や偶発によって最初の一個の細胞ができるより可能性 がある、と言いました。詩篇の記者が、「愚か者は心の中で、『神はいない。』と言って いる。(詩篇 1 4:1)」と言ったのは、もっともなことです。パウロは、「彼らは、自分では 知者であると言いながら、愚かな者となり(ローマ1:22)、造り主の代わりに造られた物を 拝み、これに仕えたからです。造り主こそ、とこしえにほめたたえられる方です。(ロー マ1:25) 」と言いました。かえるがハンサムな王子になるのは、おとぎ話の中だけのことだ と思っていました。このおとぎ話を私はおぼえています。このおとぎ話を読んでもらった とき、女の子が醜いかえるにキスをすると突如として、醜いかえるがハンサムな王子にな るという下りを読んでもらったとき、私は、これがただのおとぎ話だとわかっていまし た。本当ではないことがわかっていました。しかし科学者は、それが本当だと主張してい るのです。ただ、一瞬の出来事ではなく、何百万年もかかったと言うのです。十分な時間 さえあれば、かえるがハンサムな王子になったと。いい加減にしてほしいですね。

神が私たちを創造してくださったとき、いろいろな匂いを嗅ぎわけることができる能力 をもって創造してくださいました。みなさんは、そのようなことをあまり考えたことがな いかも知れませんが、実はとても興味深いのです。目には見えませんが、空気中には小さ な粒子があります。これらの粒子を吸うと、鼻道の裏側に溶け、いくつかワイヤーのよう なしくみがあり、それが振動して、溶解した粒子を脳に運び、脳に入ってくるそういった 振動を解釈し、(訳者注:いかにもうれしそうに)「ああ、チョコレート・チップ・クッ キーだ。わぁーい!」と言うのです。脳は、あなたが嗅いでいる物を識別するだけではな く、記憶装置も備えているので、自分の嗅いでいる物が何かを思い出します。記憶装置を 検索し、「そうだ。これは、チョコレート・チップ・クッキーのにおいだ。」とわかるの です。面白いことに、雑草が燃えているのか、それとも松の木か、ヒッコリーの木か、タ バコが燃えているのか、区別することができるのです。これらは、それぞれ固有のにおい があり、それを識別して自分が何を臭っているかがわかります。記憶システムを考えて下 さい。あなたの脳の脳細胞にどれだけのものが入っていると思われますか。手を休めて、 どれだけのものがこの記憶装置に入っているのだろうと考えたことがあるでしょうか。も し、メモリーの容量がなければ、すべての体験が全く新しい体験になってしまいます。 朝、目覚めて、いっしょに布団に入っている人に、「おまえはだれだ。」と言うことに なってしまいます。すべての体験が全く新しい体験になってしまったとしても、それなり の利点はあるかもしれません。自分で自分のイースター・エッグを隠すことができますか ら。年をとってきますと、若い時より頭の回転が悪くなると言う人がいます。時に、思い 出すのに時間がかかってしまいます。しかし、私はそれには同意できかねます。年をとる と、あまりにたくさんのものが記憶装置に入っているために、思い出そうとしているもの を出すのに、その一部をダウンロードしなくてはならないのではないかと私は思うので す。卒業40周年の高校の同窓会に出席した二人の人の話を聞いたことがありますが、二 人は高校の時以来会っておらず、フットボールのチームでいっしょにプレイしたときの話 をして、そのうちの一人がクオーターバックで、もう一人がエンドで、さまざまなゲーム や、タッチダウン、パスなど、ゲームの詳細をはっきりと思い出すことができたのです

が、とうとう一人が、「思い出して話をするのはすごく楽しいけれど、君の名前を忘れて しまった。」と言いました。その人が、「君の名前は、何だったっけ。」と言うと、もう 一人は、「それは、今この時に、知らなくちゃいけないことなのかい。」と言いました。

私にとっては、名前だけでなく、その名前に関連した顔があって、名前を聞くと顔も浮 かんでくることは、すごいことなのです。しかし、これに際しても、問題をきたすことが あります。なぜかと言いますと、(訳者注:顔をしかめて、思い出せないというしぐ さ。)「えっと・・・この人の名前はなんだったっけ。」ということがあるからです。即 座に思い出すのが難しいことがあります。少し時間がかかることがあります。しかし面白 いのは、それが、ひょっとすると明日の午後に、高速道路を走っているときに、突然名前 が頭に浮かんでくることがあるからです。 (訳者注:急に思い出したしぐさ。) 「そうだ。 ジョンだ。そうじゃないか。」という具合です。頭の中のインデックス・カードを分類す る機能をつかさどる部分に対して、名前を検索するようにコマンドが出されたのです。名 前を出すというコマンドが出されました。しかし、そのコマンドを出したことをすっかり 忘れてしまったのです。いろいろあってすっかり忘れてしまっていたのです。しかし、脳 はそのことを忘れたりしませんでした。脳はその操作を継続し続け、ついにその名前のカ ードが出てくると、とても興奮して、カードを抜き取り、それを見せびらかして、(訳者 注:カードを振って、見せるしぐさ。) 「ジョンだ。ジョンだ。」という具合です。すばら しいですね。私たちが、生命のかたちを見るとき、神が私たちに下さった能力を見ると き、ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう、と思います。私た ちが、神が人を贖われるすばらしい計画を見るときもそうです。愛の神が、私たちとの交 わりを願われて、御子を私たちのために遣わして下さいました。なぜなら、私たちはみな さまよい、自分勝手な道に向かって行ったからです(イザヤ53:6参照)。「義人はいない。 ひとりもいない。(ローマ3:10)」とあるとおりです。しかし、神は私たちを愛し、私たち との交わりを願われました。そして、神はイスラエルの民の中から、御子を遣わされまし た。けれどもイスラエルの民は、この方を拒ばみました。それで神は、「それなら、それ でいい。では、みんなが来るように。」と言われました。神が、すべての人をあわれもう として、すべての人を不従順のうちに閉じ込められました(ローマ11:32参照)。パウロ は、このことを考えているときに、ああ、神の知恵と知識は、何と底知れず深いことで しょうと思ったのです。コンサートに行くと、コンサートのピアニストの演奏を聴くとき に、ピアノの鍵盤を見ずに、前にある楽譜さえも見ずに、協奏曲一曲全部をひいてしまう のには、驚かされます。すべて記憶に入っているのです。びっくりしますね。愚かな人間 は、スペース・シャトルを軌道にのせることができるといって、自分の知性の能力をたた えます。しかし、星や月や、惑星を軌道にのせたのは誰だと思っているのでしょう。

パウロは、「そのさばきは、何と知り尽くしがたく」と続けています。神は、実に絶対に公正で義なる方です。これが神のご性質なのですが、サタンはよくそれに抗議します。悲劇、悲しみ、痛みが私たちにやってくると、なぜ神はこのような事を許されるのかと考えてしまいます。詩篇の記者は、「なぜ、国々は、『彼らの神はどこにいるのか。』と言うのでしょう。(詩篇 79:10)」と言いました。あなたが神に信仰と信頼をおいていることが、彼らを困惑させます。ですから、あなたに何か良くないことが起きると、あなたのところに来て、「お前の神はどこだ。」と言いたがります。私が悲しみや痛みをおぼえているということで、神が突然私を見捨てたかのように言いたがるのです。私たち自身も、あることについて、なぜ神がある事が起きるのを許されるのかと考えます。パウロは、「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、とるに足りないものと私は考えます。(ローマ8:18)」と言いました。話の全容を見ることができたら、全体像を見ることが

できたら、途中の道の凸凹は取るに足らないことなのです。神が私の人生において、ご計画を実行してくださり、それは、私が自分で企画したり考えたりすることができるものを、はるかに超えてすばらしいものです。ああ、キリスト・イエスにある私たちへの神のすばらしさと恵みの富は、はるかにすばらしいものです。ある歌の作詞者は、このような歌詞を書きました。「もし、神が見ておられるように私たちが明日の向こうを見ることができるなら、私たちの涙は全て拭われ、私たちの悲しみはなくなるだろう。今の深い悲しみを私たちは恐れない。この悲しみを私たちはすぐに忘れるだろう。たくさんの喜びがあなたと私を待ち受けているから。私たちがよく言うように、見たり理解したりできるらばと思う。神は、愛によって私たちを支えてくださる。将来に何があるか私たちにはわからない。だから、さらに神にすがる。この人生が終わるまで、神が私たちを導いてくださる。ただ信頼し、従おう。」もし、神が見ておられるように私たちが明日の向こうを見ることができるなら、というのは、実にそのとおりです。今の時点では理解できないことがたくさん起こっています。今は、なぜ神がそのようなことをお許しになったのかわかりません。

「そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょ う。」とパウロは言いました。神が何をしておられるのか理解しようとすると、実に葛藤 をおぼえます。実は、神は、私たちがそのような努力をすることさえ思いとどまらせらせ るのです。「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの 道と異なるからだ。- 主の御告げ。- 天が地よりも高いように、わたしの道は、あな たがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。(イザヤ55:8-9) 」それなのに、私たちはある事について、神がそれをなぜお許しになるのか考えます。聖 書の中にヨブという名の人がいますが、ヨブは、どの人よりも、多くの苦しみを受けまし た。ヨブは、とても良い人でした。神の目からは、ヨブは、完璧で、潔白な人で、善を好 み、悪を憎んでいました。しかしヨブは、その生涯で途方もない悲劇を経験しました。自 分の富、所有物を失いました。この人はとても裕福な人でした。ヨブは、ひどい事故で、 10人いた子供を失いました。ヨブは、妻のやさしいあわれみに満ちた同情に満ちた理解 を失いました。妻さえもついに、「神をのろって死になさい。」と言うほどでした。ヨブ は、自分の健康を失いました。ヨブが様々なものを失ったことを慰めるために、友人たち がヨブのところに来ました。友人たちは理解できませんでした。ヨブは理解できませんで した。「なぜ、このようなことが私に起きるのか。」友人たちは、ヨブに何か隠れた悪が あるのではないかと考えました。特定の悪を挙げることはできませんでしたが、ひどい悪 がないのに、これほど苦しみを受けるはずがないと考えました。ヨブが人を欺いていたに 違いない。ずる賢く、うまく隠しおおせていたのだ。しかし、神は、それを見ており、 知っておられる。だから、ヨブは、神のさばきを受けているのだ。ヨブは、何かひどい悪 質な罪を隠そうとしていたに違いない、と言いました。しかし、ヨブは、自分の潔白を訴 え、「私はあなたたちが私を訴えているような罪はない。そのようなことはしていな い。」と言いました。ついに、友人の一人のビルダデは、「ほら。神と正しい関係を持ち たまえ。そうすれば、全てがまるくおさまる。」と言いました。ヨブは、答えて言いまし た。「あなたの言うことはまことにそのとおりだ。しかし、どのように神と正しい関係を 持つことができるようになるのか。」もし、私が自分の正しさについて神に反駁して、神 が反対尋問を始められたら、尋問が千個あっても、一つも答えることができないだろう。 「神は心に知恵のある方、力の強い方。神に身をこわくして、だれがそのままで済むだろ うか。神が山々を移されるが、だれもこれに気づかない。神は怒ってこれをくつがえされ る。神が地をその基から震わすと、その柱は揺れ動く。神が太陽に命じると、それは上ら ない。星もまた封じ込められる。かみはただひとりで天を張り延ばし、海の大波を踏まれ

る。神は牡牛座、オリオン座、すばる座、それに、南の天の室を造られた。神は大いなることを行なって測り知れず、その奇しいみわざは数えきれない。(ヨブ9:4-10)」パウロもそのように述べています。「その道は、何と測り知りがたいことでしょう。」ヨブもそれを知っています。神は余りに大きく、余りに偉大な方です。神は御業をなさいますが、私たちがそれを測り知ることはできません。なぜ、このような事が起こっているのか私たちにはわかりません。なぜ神が、私たちの人生の中に悲しみや苦しみをお許しになるのかわかりません。

パウロは、次に、「なぜなら、だれが主のみこころを知ったのですか。また、だれが主 の相談相手であっただろうか。」と述べています。イザヤ書40章13節が意訳されたよ うです。そこで、預言者は、「だれが主の霊を推し量り、主の顧問として教えたのか。」 と述べています。パウロは、またそれをコリント人への手紙第一で意訳して、「いった い、『だれが主のみこころを知り、主を導くことができたか。』(1コリント2:16)」と言っ ています。だれが主のみこころを知り、主を導くことができたか。それは、私です。私 は、たくさんの問題について、神に助言しようとしたことがあります。自分が最善の対処 の仕方だと考えていることを、神に教えたことがあります。神に助言しようとしたことが あります。ご自分の宇宙をこうゆうふうに支配すればよいのですと、私の人生、私の回り にいる人を、こうゆうふうに支配すればよいのですと助言したことがあります。それは、 私が若かった頃のことです。神は寛大で、私の言うことを聞いてくださいました。それか ら、最もよいと思われることを行なわれました。それで、もはや私は神に助言することを やめました。ただ時々、神に提言をするだけになりました。つまり、「主よ、もし提言し てもよろしいのでしたら、・・・」という具合です。私の神についての理解は次の通りで す。「神よ、あなたは私の言うことに耳を傾ける必要はなかったのに、耳を傾けてくだ さったことを感謝します。私の理解は限られて、全ての事実をわかっていないので、物事 全体について私が無知をさらけ出しているのにもかかわらず、私が心を注ぎ出すのを聞か れることを感謝します。神さま、あなたが最もよいと思われることをなさしめてくださ い。」

ちょうど、ハバククのようなものです。イスラエルの国の状況が非常に悪くなっている ので、主に苦情を訴えた時、神は、「ハバククよ。わたしは、わざを行なっている。も し、わたしのしていることをあなたに話したら、あなたの耳は、耳なりがするだろう。」 と言われました。神が、ハバククに対し、ご自分がなさっていることを話し始められる と、ハバククは、「主よ、ちょっと待って下さい。それは、正しいことでしょうか。」と 言いました。「バビロン人を使って私たちを罰せられるのですか。主よ。」と。主はハバ ククに言われました。というか、ハバククは、「あなたがなさることは私には理解できま せん。私は恐れています。しかし、私は見張り所に行って、そこで何が起こるか座って 待っています。」と言いました。そこにハバククが座っていると、主からのみことばがあ り、「正しい人はその信仰によって生きる。(2:4) 」と言われました。「ハバクク、おまえ には理解できないだろうけれど、私に信頼しなさい。正しい人はその信仰によって生き る。」と。非常に悪い状況になり、ハバククは、「主よ、私は心配になってあなたに叫び 求めました。すると、あなたは、みわざを行なわれていることを私に保証されました。私 にはあなたがなさっていることが理解できません。しかし、どうかそれをお続け下さ い。」と言いました。これが、ゆだねるということです。これが信仰です。そこで、人は 休むことができるのです。主よ。私には理解できません。あなたの道がわかりません。し かし、やめないで下さい。あなたの御業を続けてください。どうか、御業をいのちのある ものにしてください。けれども、「この年のうちに、・・あわれみを忘れないでくださ い。(3:2) 」とハバククは言いました。主よ、あなたがあわれみ深い方であることを知って

います。あなたが義なる方であることを知っています。あなたがいつくしみ深い方である ことを知っています。あなたが私を愛してくださっていることを知っています。ですか ら、主よ、どうか私のうちで、あなたのみわざを続けてください。

私たちの発見できる、たった一つ本当に休むことのできるところは、ゆだねることによ る休みです。神に完全にゆだねることを学んだとき、状況がどれだけ悪くなっても、悪く 見えようとも、悪く見えているようでも、休みを得ることができます。全世界が崩壊して いるように見えても、私は神に信頼をおき、自分を神の御手にゆだね、神が私を愛してく ださり、神が私のうちで働かれているのですから、その結末は良いものであることを私は 知っています。「今の時の苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれ ば、取るに足りない(ローマ8:18参照) 」ことを知っているので、私はただ、「はい。主 よ。どうぞ、やってください。あなたが最も良いと思われていること、最も良いことを行 なってください。私は、あなたのご計画が完全になされるのを、待っております。」と言 えるのです。私たちはとかく、自分たちの限られた見方によって、神のなさることを判断 してしまいます。私たちは前途が見えません。何が前にあるのか見えません。神が何を私 たちから遠ざけようとしておられるのかが見えません。それは、私たちには限られた視野 しかないからです。表に出て車にエンジンをかけ、車庫から車を出そうとして、バックす ると奇妙なボコボコを感じます。遅刻しそうなのです。見てみると、「(訳者注:半泣き の声で)わあ。大変だ。パンクだ。遅刻しそうなときに限って、パンクだなんて。」で も、私たちにはわからないのです。ひょっとすると、神は、あなたが高速道路で事故に遭 うかもしれなかった状況を避けようとされているのかもしれません。神の祝福なのです。 「衝突で、めちゃめちゃになって欲しくないよ。だから、タイヤから空気を抜くよ。」 と。神は、あなたが痛みを受けたり費用を払ったりすることなどを回避しようとしてくだ さっているのです。それなのに、あなたはぶつぶつ文句を言っているのです。それは、私 たちが目の前のことしか見えないという限られた見方しかできないので、神がなさってい ることが見えないからです。「その道は、何と測り知りがたいことでしょう。」それで、 私たちは信頼します。神が最も良いことを知っているので、神の知恵と知識との富に信頼 します。それは、神が私たちを愛しているからです。神は贖ってくださり、私たちは神の 子となりました。

ローマ人への手紙 1 2章(1 2 / 1 / 9 6) 「なすべき当然の礼拝(reasonable service)」(Romans12:1-2) ローマ人への手紙 1 2章 1 - 2節 # 8 6 4 2 交読文:詩篇 1 1 6篇

私たちは、ローマ人への手紙 1 2章に来ました。これは、とても心躍る章であり、興味深い章であります。今晩この章全体を学びますが、今朝はローマ人への手紙 1 2章 1 節を見ていただきたいと思います。そこでパウロは、次のように告げました。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。これこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。(訳者注:このメッセージの題にもなっている"reasonable service"は、口語訳では、「なすべき霊的な礼拝」、新共同訳では、「なすべき礼拝」、リビング・バイブルでは、「決してむりな注文ではないはずです」、現代訳では、「なすべき当然の礼拝」と訳されています。英語をそのまま直訳すると、「理にかなった礼拝」となります。)」

パウロは、書簡のこの部分を、嘆願によって始めています。懇願する(I beseech thee)、あ るいは、嘆願する(I plead with you)、お願いします(I beg you)と言うことです。この宇宙を創 造された神が、恐ろしく絶対的な神が人間に嘆願されるのには、いつも驚かされます。パ ウロは、10章31節(訳者注:10章21節のことか)で、実はイザヤ書から引用しているの ですが、神が、「不従順で反抗する民に対して、わたしは一日中、手を差し伸べた。」と 告げられたことを述べています。神は、わたしは民に嘆願した、と言われているのです。 神が人間に嘆願されたという事実に、私は驚きをおぼえます。しかしながら、預言者エゼ キエルは、神が悪者に対し、「悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。一 主の御告げ ぜ、あなたがたは死のうとするのか。見よ。わたしは決して悪者の死を喜ばない。(エゼ キエル33:11参照)」と言われたことを告げています。つまり、神は民に対し滅びへの道か ら立ち返るように願われています。悔い改めるように願われています。「わたしは決して 悪者の死を喜ばない。」と神は言われました。新約聖書全体を通じて、使徒を通して、主 が人間に願いをなさっていることがわかります。ここ、ローマ人への手紙15章(30節参 照)で、パウロは、祈ってくださいと嘆願しています。16章(17節参照)で、パウロは、分 裂を引き起こす人たちを警戒するように、嘆願しています。コリント人に対しては、仲間 割れすることがないように願いました(1コリント1:10参照) 。また、パウロがキリストを見 ならっているように、彼らもパウロを見ならうように(1コリント11:1参照)、また、教会の 指導者に服従するように(1コリント16:16参照) 嘆願しました。そして、神と和解するよう に嘆願しました(2コリント5:20参照)。それから、神の恵みを無駄に受けないようにしてく ださいと嘆願しました(2コリント5:20参照) 。エペソ人に対しては、召されたあなたがた は、その召しにふさわしく歩みなさいと嘆願しました(エペソ4:1参照)。テサロニケ人に 対しては、神に喜ばす生活をするように嘆願しました(1テサロニケ4:1参照)。ペテロは、 肉の欲を遠ざけるように嘆願しました(1ペテロ2:11)。ヨハネは、選ばれた夫人とその子ど もたちに、互いに愛しあうように願いました(2ヨハネ5参照)。神は、私たちに良い生活を するように願っておられます。誠実な生活をするように、正しいことをするように願われ ています。傷をもたらす、有害な、人生を破滅させるようなことは、してはいけないと願 われています。神が私たちに、自分たちを滅ぼすことがないように、正しい生き方をする ように、願っておられることが想像できるでしょうか。そしてここで、使徒パウロが、 「神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします(I beg you)、あるいは、懇願します(I beseech you)。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてさ さげなさい。これこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」と述べています。

パウロが嘆願した根拠は、神のあわれみでした。神は、とてもすばらしい方で、私たちに豊かにあわれみを注がれています。今日読んだ詩篇の中で、詩篇の記者は、「主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は主に何をお返ししようか。(116:12)」と言いました。手を休めて、神がしてくださったこと全てを考える時に、私たちが受け取った、神が良くしてくださったこと全てを考える時に、神に何を差し上げることができるでしょうかと、神に対して謝意、感謝を示すのに、何を差し上げることができるでしょうかと、また、神が私に与えてくださった全て、神が私にしてくださったこと全てに対し、私は神に何をお返しすることができるでしょうか、と考えるのは当然のことです。

パウロは、自分たちのからだを神に生きた供え物としてささげるように願っています。コリント人への手紙の中で、パウロは、「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだと霊をもって、神の栄光を現しなさい。(訳者注:新改訳 1 コリント 6:19では、「自分のからだをもって」としかないが、欽定訳ではin your body and in your spirit となっている。)」と述べています。ですから、パウロは私たちに私たちのからだをささげるように勧めています。私たちのからだは、本当は、どのみち神のものだからです。ですから、あなたがたのからだを、神に、生きた供え物としてささげるのです。神のものを、神に差し上げるのです。

ダビデは、主のために神殿を建てたいと考えました。神は、ダビデが神殿を建てること はできないと言われました。それは、ダビデが戦士であり、彼は自分の手で多くの血を流 したからです。そのため神は、ダビデに神殿を建てることを許すことは、おできになりま せんでした(1歴代22:8参照)。しかし神は、ダビデが全ての資材を集めて、計画を立てるこ とをしてはならないとは言われませんでした。それでダビデは、手掛け始めました。神殿 の設計図を書き、神殿を建てるための全ての資材を集め始めました。また、ダビデは、 人々に主のための偉大な神殿が建立されるのを見たい、と伝えました。また、神に会見す ることのできる場所を建てたいことを伝えました。それで、人々はみずから進んで、喜び の心を持って、神に会見する場所を建てる考えに対して、ささげものをしました。たくさ んの資材と資金が集まって、神殿を建てる以上のものが集まるほどでした。人々が全てを 集めた時、ダビデは、「私たちの父イスラエルの神、主よ。あなたはとこしえからとこし えまでほむべきかな。主よ。偉大さと力と栄えと栄光と尊厳とはあなたのものです。天に あるもの地にあるものはみなそうです。主よ。王国もあなたのものです。あなたはすべて のものの上に、かしらとしてあがむべき方です。富と誉れは御前から出ます。あなたはす べてのものの支配者であられ、御手には勢いと力があり、あなたの御手によって、すべて が偉大にされ、力づけられるのです。今、私たちの神、私たちはあなたに感謝し、あなた の栄えに満ちた御名をほめたたえます。まことに、私は何者なのでしょう。私の民は何者 なのでしょう。このようにみずから進んでささげる力を保っていたとしても。すべてはあ なたから出たのであり、私たちは、御手から出たものをあなたにささげたにすぎません。(1 歴代29:10-14)」と言いました。

つまり、「主よ、私たちがあなたにささげたものは、本当はあなたのものなのです。あなたが、私たちに下さったのです。」ということです。パウロは、「あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。(1コリント4:7)」と言いました。その答えは、実は何もないのです。私たちは、神にすべての借りがあるのです。私たちのいのちさえも神が与えて下さったもので、自分のいのちは神にかかっています。ダニエルがバビロンの王

ベルシャツァルに、「あなたは、金、銀の神々を礼拝し、賛美しましたが、あなたの息をその手に握っておられる神をほめたたえませんでした。(ダニエル5:23参照)」と言っているとおりです。自分のいのちをも神により頼んでいて、自分の持っているものはみな神が与えて下さったもので、自分はただ神に本当は神のものであるものをお返ししているにしかすぎないと気づくのです。聖書は、私たちのからだは、実は聖霊の宮だと教えています(1コリント6:19参照) 。私たちは、イエス・キリストによって罪の力から贖われたのです。すでに贖われたので、今や私はイエス・キリストのものとなりました。「そういうわけですから、私は、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、生きた供え物としてささげなさい。」実は、どのみちそれは神のものなのですから。パウロは、コリント人への手紙の中で、「また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。(2コリント5:15)」と言いました。

パウロは、「私は、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れ られる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。これこそ、あなたがたのなすべき当然 の礼拝です(reasonable service)。」と言いました。つまり、それはもっともなことだという 意味です。神が永遠のご目的を達成される器として、自分のからだを神にささげげるの は、もっともなことです。「主よ。ここに私がおります。ここに私のからだがあります。 どうか用いて下さい。私のからだがあなたの御手の器となり、それによって、またそれを とおして、あなたが御心を地上で達成して下さいますように。」私はここで、人々が自分 のからだを酷使することを考えてしまいます。神が下さったすばらしい器であるのに、 人々は自分のからだを酷使することが何とよくあることか。アルコールで、麻薬で、自分 のからだを酷使します。これは理にかないません。自分のからだを滅ぼし、害を与えるも のを注入したり、服用したりするのですから。わけが分からないことです。もしその人 が、落ち着いてよく考えてみるなら、自分のからだにしているようなことをしないはずで す。淫らな性的行為をとってみても、もし、自分のからだに対してどれほど危険が潜んで いるかを本当に考えてみるなら、しないはずです。性病が、この現代社会で非常に蔓延し ています。もし、人々が潜在的な被害を認識しさえすれば、ちゃんと頭を使いさえすれ ば、淫らな性的行為をするはずはないのです。「これは自分のからだだから、自分が好き なようにする。」という態度をよく見受けます。そうだとも言えるし、そうではないとも 言えます。実は、あなたのからだではないのです。つまり、あなたのからだは、本当は神 のものなのです。あなたにからだを下さったのは、実は神です。あなたのからだを維持し て下さっているのは、実は神なのです。しかし、確かに自分のからだを好きにすることは できます。神が、そのような特権を許して下さっているからです。神は、あなたが自分の 好きにすることを許されています。しかし神はあなたに対して、賢く、道理をわきまえる ために、頭を使うように呼びかけられているのです。

人が、無益な目的のために自分のからだを使ったり酷使したりするのを、私は考えてしまいます。この世的な目標を掲げて自分のからだを局限まで酷使します。ステロイドを服用し、毎日ジムでトレーニングをし、筋肉が膨れ上がるまで続けます。そして、ポーズをとって筋肉を波動させます。何のためでしょうか。おそらく、人に尊敬の念で見てもらいたいからでしょう。「わあ。あの膨れ上がった二頭筋を見てみるよ。」とか、「あそこまで鍛えた胸筋を見てみるよ。」と。とんでもないことです。だから何でしょう。何のためなのでしょうか。さて、女性の中でもそれをしている人がいます。私としては、そのようなものは、私の考えでは美ではありません。グロテスクだと思います。しかし、ジムでどれだけ時間を過ごすか考えてみて下さい。どれほど酷使しているかを考えてみて下さい。

(訳者注:重量挙げをするしぐさをしながら) ウーッ、ウーッ。ニューポート・ビーチのあ

ちこちで、ジョギングをする人を見かけます。スラッとして、健康そうなニューポート・ルックになれるようにやっているのです。真に鍛えるためには、痛みを通り越して走らなければいけない、と言います。痛みを通り越して走ってはじめて、真に鍛えることができるのだ、と考えています。走っている人の顔を見ますと、実に痛みと苦悩が見えます。 (訳者注:苦しそうな顔のしぐさをしながら) うれしそうには見えません。痛みを通り越して走る。それは何のためでしょうか。どれだけ時間を費やすか考えてみて下さい。パウロは、オリンピックに出場して、オリンピックの試合でレスリングをする人は、あらゆることについて自制します(1コリント9:25参照) と言いました。彼らは実に自分を鍛えます。食事に注意を払い、大変規則正しくトレーニングを受けます。パウロは、「彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのです。」と言いました。オリンピックの試合で優勝を望んでいます。審判員の前で、月桂樹の冠を頭にかぶせてもらって立つことです。朽ちる冠のために、このような痛みや、その他さまざまなことがあります。パウロは、「私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。」と言いました。しかし、彼らは私たちに恥辱を与えます。彼らは、喜んで犠牲を払い、朽ちる冠を受けるために自分のからだを投げ出します。私たちは、ここで、朽ちない冠のために働いています。

何年も前のことですが、私は探検に参加しました。その探検で、我々は、バージン・グ アダルーペの財宝(Treasure of the Virgin Guadalupe)と呼ばれた、膨大な財宝を探しました。 1765年頃に、アキノ神父が、とてつもない数の金銀の延べ棒を取って、サノラ砂漠に あるトゥーマカキャリ・ミッションの南西の鉱山の立坑に埋めたと言われています。ある 年老いた工夫が財宝とその場所が書かれている羊皮紙の文書を持っていました。そこに は、ミッションにある見張り所が言及されており、その後地震でその見張り所は崩れまし たが、我々は、その工夫がアキノ神父によって埋められた膨大な財宝があると感じた所に いました。アキノ神父が、その財宝をこの鉱山の立坑に入れて、それから鉱山の立坑の入 り口を爆破させ、土とそれから岩で覆い、それを守ろうとしたのです。我々は、描写され ていたインデアンの要塞の丘を発見しました。古代の要塞の遺跡を見ることができまし た。丘の上には、岩にくぼみが掘られているのが見えました。その中で、インデアンがト ウモロコシを粉にひいたのでしょう。ですから、我々は、はずれてはいないと感じ、ワク ワクしました。山の中腹に、鉱山の立坑の入り口と目されるような場所を見つけました。 そこは、土と岩で覆われていました。そこで、我々は、つるはしとスコップで、土と岩を 取り除け始めました。丸石を丘の下方に落としてゆきました。手にまめができるまで、体 が疲れるまで、体中痛くなるまで、くたくたになって、もうスコップで土を一すくいもで きなくなるまで、掘りました。それは、その瓦礫の下のどこかに何百万ドル相当もする金 塊や金の延べ棒、銀の延べ棒があるはずだとの希望のもとに掘ったのです。もう一日が暮 れようとしていて、私は、くたくたでとても疲れていて、もう夕食を食べて寝たいと思い ました。その時に、ある人が、「見つけたぞ。」と叫びました。すると、まさに岩が飛 び、土が動き始めました。驚くことに、もう無いと思っていたエネルギーが急に出てき て、我々は、競って鉱山の立坑に入ろうとしました。でも、違うとわかって幻滅しただけ になりました。しかし、あれだけの労力と時間は何のためだったのだろうと思うのです。 世俗的な財宝のため、あるいは、世俗的な報酬のためでした。

パウロは、永遠に役に立たないもののために自分の人生を費やしてはいけません、と言っているのです。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、生きた供え物としてささげなさい、と言いました。それは、もっともなことです。それは、なすべき当然の礼拝です。イエスは、「人は、たとい全世界を得ても、いのちを損じたら、何の得がありましょう。(マルコ8:36)」と言われました。しばし、手を休めて、そのことを考えてみて下さい。もっともなことですね。もし、私がこれまでに地獄に落ちた人の中で、最も金持ち

になったとしても、私にとっては何の得にもなりません。あちらこちら、威張って歩いても、何の得にもなりません。人は、たとい全世界を得ても、何の得がありましょう。あなたが、たとい全世界の栄光を得ても、何の得がありましょう。たとい全世界の名声を得ても、何の得がありましょう。そのようなものが、どれだけ存続するというのですか。ヤコブは、「このいのちは、しばらくの間現われて、それから消えてしまう霧にすぎません。(ヤコブ4:14参照)」と言いました。人生であなたが蓄積したもの、達成したもののうち、今残っているものについて、どれほどその栄光に浸ることができるのでしょうか。私たちの人生は一つしかなく、それも、ほどなく去ってゆきます。イエス・キリストのためにしたことのみが、残るのです。それは、もっともなことです。パウロは、「これこそ、あなたがたのなすべき当然の礼拝です。」と言いました。

しかし人間の問題は、私たちが、立ち止まって、理性的に考えないことがよくあること です。申命記において、神は、「もしも、知恵があったなら、彼らはこれを悟ったろう に。自分の終わりもわきまえたろうに。(申命32:29)」と言われました。もし、人々が、 この道を行けば、どこに行き着くのか、自分はどこへ行くのだろうかを、立ち止まって悟 りさえすれば。このような行為をすればどうなるのかを、立ち止まってわきまえさえすれ ば。しかし、そこが問題なのです。私たちは物事にかかわるのですが、「もし、これをす れば、自分はこれだけ犠牲を払わなければならない。」と、立ち止まってわきまえること をしないのです。仕事が犠牲になるかもしれない。家族が犠牲になるかもしれない。家が 犠牲になるかもしれない。もし、自分がこうすれば、と立ち止まって、自分たちのするこ との帰結やその可能性について気づきさえすれば、そのようなことはしないはずです。 今、私は、いくつかの非常に残念な事態に取り組んでいます。カルバリー・チャペルの牧 師の一部が、敵の罠にはまってしまった事態です。その牧師たちの取った行為のために、 中には教会を失った人もいますし、家を失いそうな人もいます。中には、家族も失いそう な人がいます。それは、自分たちの愚かさのゆえです。この人たちが関わってしまった 様々ことについて、関わったらどういう結果になってしまうかを立ち止まって、考えな かったからです。神は、「わきまえたろうに。」とおっしゃいました。論理的に考えてい ません。神は、そのような生活をすることについて、私たちに論理的に考えるように (reason it out)、頭を使うように、きちんと最後まで考えるように、結果をわきまえるよう に、と呼びかけておられます。預言者イザヤを通して、神は、「『さあ、来たれ。論じ合 おう(reason together)。』と主は仰せられる。(イザヤ1:18)」と言われました。またして も、神は、これを論理的に考えようと人々に呼びかけておられます。イザヤ書 1 章の最初 の部分で、論理的に考えようと人々に命じられたとき、神は、「(私の民は)悟らない (they did not consider) (イザヤ1:3)」と言われました。これが問題です。人々は、自分の頭 を使わずに、きちんと論理的に考えずに、そのような道を行けばどうなるかの可能性を考 慮せずにその道を歩み、死に至る道であることに気づかずに、物事を行なっているので す。見知らぬ女について、息子に警告したソロモンのように、「私が窓から見下ろすと、 女がかどに近い通りにいるのが見えた。この女は騒がしく、うるさい女だった。若い者が 通り掛かると、この女は走りよって来て、臆面もなく、『ああ、あなたのことをお待ちし ておりました。』と言い、口づけし、へつらいを言って、その若者を家に招き入れ、自分 の寝室に入れた。その男が、ほふり場に引かれる牛のように行くのを見たが、自分のいの ちがかかっているのを知らない。(箴言7章参照)」愚かです。きちんと、最後まで考え なかったのです。ソロモンは、「彼女の家はよみへの道(箴言7:27)」と言いました。立ち 止まって、気づくことをしないのです。立ち止まって、論理的に考えることをしないので

ほとんどの人は、永遠には何の価値もないことをするのに、人生のほとんどを費やしま

す。存続するような報いが何もないもののために、からだを使い、身をまかせるのです。神は嘆願しておられます。「さあ、来たれ。論じ合おう。」と。パウロは、「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、生きた供え物としてささげなさい。」と述べています。何か永遠のものに、何か永遠の価値のあるものに使いなさい、と述べています。もし、私たちが、多くの人の墓の墓碑銘を歯に衣着せず、正直に彫るとしたら、「無駄な人生」と彫ることになるでしょう。永遠には何の役にも立たないもののために、人生を無駄にしている人がたくさんいるからです。それで、無駄な人生をおくっています。神は、「あなたの人生を無駄にしてはいけない。」とおっしゃっています。神が持っておられる目的や計画がどのようなものか分かりませんが、その目的、計画のために、神があなたを用いることができるようにあなたのからだをささげなさい。そこに永遠の報いがあるからです。何でも主のためにするのであれば、無駄にはなりません。何でも神のためにするのであれば、永遠の恩恵、結果を生みます。主の御名によって預言者にコップ一杯の水を与えるのであっても、それによって報いを受けます。永遠のもののために、あなたがたのからだを使って下さい。

何年も前に私が、大学で準備科の授業をとっているときに、医者になりたいという深い 大望と願いを持って、医学校や、医者としての仕事につながるような、授業をみなとって いました。主が、私の心に次のように語りかけられたような気がしました。「医療の職業 に進み、医者になることはできるし、人を助けることもできる。人々の痛みや苦しみを和 らげることはできる。身体的な病気を克服することを助けることはできる。しかし、あな たが人々にもたらすことができる助けは、せいぜい一時的なものだ。早かれ遅かれ、あな たもそうだが、みんな死ぬ。しかし、すべての人をおそった死に至る病がある。それは、 罪という病だ。これは、死に至るものである。もし、あなたが人を霊的にいやすことに自 分の人生をささげ、人が罪の赦しを見出だすのであれば、あなたが人にもたらすことので きる助けは、永遠の益となる。あなたは、自分の人生を、一時的なものに捧げたいのか、 それとも永遠なものに捧げたいのか。」私は、もっともなことだと思いました。理にか なっていました。私の人生は一つしかなく、それもほどなく過ぎ去ってしまう。キリスト のためにすることのみが、永遠の結果と価値をもたらします。それで、その時、主にお仕 えすることに自分の人生をささげることにしました。私は、自分のからだを生ける供え物 として神にささげげました。それは、神が、罪の中に死にかかっている人々に、ご自分の 愛、真理、癒しをもたらす器として、私を用いていただくためでした。

神が私たちに何を願われるかは、私たちには分かりません。それは、あまり問題ではないのです。問題は、いかなるもののためでもよいのですが、神がそのために、私を用いて下さるために、私が自分のからだを生ける供え物として神にささげげることです。それが、使徒の嘆願です。自分の頭を使いなさい。最後までよく考えなさい。そうすれば、すべて過ぎ去ってしまい、何の役にもたたないもののために一生を過ごすより、永遠のために生きることが、もっともなことであることがわかります。

ローマ人への手紙 1 3章 (12/8/96) 「眠りからさめるべき時刻」(Romans13:11) ローマ人への手紙 1 3章 1 1 節 # 8 6 4 3

交読文:詩篇90篇

聖書通読の学びを続け、今週はローマ人への手紙13章に来ました。もう、この章を読まれたと思いますが、今日の午後にまた読み返して、今晩のローマ人への手紙13章の学びに参加してください。

今朝は、ローマ人への手紙 1 3 章 1 1 節から章の最後まで注目してください。そこで、パウロはこう述べています。「あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は私たちの救いがもっと近づいているからです(新改訳脚注参照)。夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。」

パウロは、「どのような時か知っているのですから」と言いました。イエス・キリスト は、私たちが自分たちの生きている時代がどのような時代か、イエス・キリストの再臨の 時に油断なく注意を払い、気づいているように意図されたと私は思います。イエスの初臨 以前は、イエスの来臨について多くの預言がなされていました。実際、旧約聖書の300 以上の預言がイエス・キリストの初臨に関するものです。それは、イエス・キリストが成 就された預言です。しかしある日、パリサイ人やサドカイ人たちとがイエスのところに来 て、「しるしを見せてください。」と言いました。イエスは、彼らに、「あなたがたは、 夕方には、『夕焼けだから晴れる。』と言うし、朝には、『朝焼けでどんよりしているか ら、きょうは荒れ模様だ。』と言う。あなたがたは偽善者だ。そんなによく、空模様の見 分け方を知っていながら、なぜ時のしるしを見分けることができないのですか。(マタイ 16:1-4参照)」とお答えになりました。自然のしるしを見分けることを学びました。大気に 少し寒さが感じられるようになり、木の葉が紅葉してくると、「ああ、冬が来る。」と言 います。木につぼみができ、新芽が出てくると、「ああ、春だ。」と言います。イエス は、「あなたがたは自然のしるしを見分けることを学んだが、時のしるしを見分けること ができない。」と言われました。これは、彼らに対する叱責でした。彼らは、知っている べきだったのです。メシヤ到来の証拠はたくさんありました。キリストの初臨の時につい てさえ、たくさん言及がありましたが、聖書は、イエス・キリストの再臨のしるしで満た されています。私たちが住んでいる時代を知ることが、主の意図されたことだと私は信じ ています。パウロがテサロニケの教会に手紙を書いた時に、「主の日が夜中の盗人のよう に来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。人々が『平和だ。安 全だ。』と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょ うど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。 しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のよ うにあなたがたを襲うことはありません。(1テサロニケ5:2-4) 」と言いました。キリスト の来臨は、世にとっては、たしかに盗人のようかもしれませんが、あなたがたは暗やみの 中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありませ ん。」と言われました。主は、あなたが時を、主の再臨の時を知ることを期待しておられ

主は、ご自分の来臨について私たちに余りにたくさんのしるしを下さっているので、主

の再臨は寝耳に水だったという弁解はできません。イエスは、「人の子が来るのは、ちょ うど、ノアの日のようだからです。(マタイ24:37)」と言われました。ノアの日の時はどの ようだったのでしょうか。まず、創世記は、「人が地上にふえ始め(創世6:1)」た、と教 えています。ですから、ノアの日の時は人口爆発の時でした。遺伝子工学で、巨人の人種 が生まれていました。聖書は、「地上に人の悪が増大し(創世6:5)」た、と教えていま す。聖書は、「その心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾(創世6:5)」いた、と 教えています。また、「地は、神の前に堕落し、地は、暴虐で満ちていた。(創世 6:11)」 と教えています。最近、新聞で読んだことのように聞こえませんか。人の子が来るのは、 ちょうどノアの日のようだからです。従って、私たちがノアの日の時代に存在していたと 同じ状況を見る時、イエスがお与えになったしるしが、さばきの日が到来しつつあること を私たちに教えています。その日には、神が、世の中の罪と不義のために、再び世をさば かれます。終りの日について、パウロはこう述べました。「終りの日には困難な時代が やって来ることをよく承知しておきなさい。そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛 する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを 知らない者、汚れた者になり、情け知らずの者、和解しない者・・・」最近の離婚の統計 数字やどれほどの結婚が離婚に終わるか、その件数のことを考えます。「和解しない者、 そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、裏切る者、向こう見ずな 者、慢心する者、神よりも快楽を愛する者になり、・・・(2テモテ3:3-4) 」これは、思い 切って私の憶測を話しますと、今日教会に行く人よりも、様々なアメフトの試合を実際自 分の目で観戦したり、テレビやラジオで観戦したりする人の数の方が思います。神よりも 快楽を愛する者です。だからと言って、スポーツのイベントに行くのが罪だということで はありません。それが、自分と神の関係よりも大切になっていなければ罪ではありません が、もし、自分と神の関係よりも大切になっているなら罪です。神よりも快楽を愛する者 です。「見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。(2テモテ 3:5) 」とパウロは述べています。旧約聖書では、快楽を愛する者は、モレクの崇拝者でし た。神の目からは、それは偶像礼拝でした。

パウロは、「どのような時か知っているのですから」と言っていますが、どのような時 でしょうか。パウロは、「眠りからさめるべき時刻がもう来ています。」と述べていま す。どうも教会は概ね眠っています。主に関することについて切迫感がないように見受け られます。イエスが再びすぐに来られることについて人に話すと、あなたが麻薬でもやっ ている(dropping acid)かのように見られます。(訳者注:かなりカリフォルニア訛 で)「おっさん、何言うてんねん。そんなことが、ほんまやとでも思うとるのか。」イエ スが、ご自分の再臨についてお話になっている時に、たとえを話されました。十人の娘た ちのたとえ話しです。十人のうち、五人は賢く、五人は愚かでした。娘たちは、教会を表 しています。イエスは、「みな、うとうとして眠り始めた(マタイ25:5)」と告げておられ ます。イエスは、ご自分が再臨される時に、教会が眠っていることを知っておられます。 イエスは言われました。「ところが、夜中になって、『そら、花婿だ。迎えに出よ。』と 叫ぶ声がした。娘たちは、みな起きて、自分のともしびを整えた。ところが愚かな娘たち は、賢い娘たちに言った。『油を少し私たちに分けてください。私たちのともしびは消え そうです。』しかし、賢い娘たちは答えて言った。『いいえ、あなたがたに分けてあげる にはとうてい足りません。それよりも店に行って、自分のをお買いなさい。』そこで、買 いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝 宴に行き、戸がしめられた。そのあとで、ほかの娘たちも来て、『ご主人さま、ご主人さ ま。あけてください。」と言った。しかし、彼は答えて、『確かなところ、私はあなたが たを知りません。』と言った。だから、目をさましていなさい。あなたがたは、人の子が 来る(訳者注:「人の子が来る」は、欽定訳にはあるが、新改訳にはない。)その日、その時を知らないからです。(マタイ25:6-13)」とイエスは言われました。起きなさい。「あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。」とパウロは言いました。イエスは、ご自分が再臨する前に教会が眠っていることを描写されています。パウロも教会が眠っていると描写しています。ですから、眠りからさめるべき時刻が来た、と言っているのです。「そら、花婿だ。」と叫ぶ声が出ているのです。

なぜ私たちは眠りからさめなければならないのでしょうか。まず第一に、私たちはもう 長く眠りすぎています。回りの世界がみな地獄に行っているのに、教会はずっと眠り続け てきました。公立学校から祈りが撤廃された時に、私たちは眠ったままでした。私たちを ポルノの汚染から保護してくれることを目的とした法律が撤廃された時に、私たちは眠っ たままでした。望めば中絶をする門戸が開かれた時に、私たちは眠ったままでした。学校 制度、さらに私たちの国家が異教徒化した時、私たちは眠ったままでした。かつて、この 国はキリスト教国でしたが、私たちが眠っているうちに異教徒の国となりました。私たち の生きているうちに、公立学校で劇的な変遷があったのを見てきました。進化論が事実で あるとの価値観を持ち、それを教えています。クリスマスをクリスマス休暇と呼ぶのでは なく、冬休みと呼ぶようになりました。イースター休暇ではなく、春休みと呼ぶようにな りました。私たちが眠っている間に、次第にゆっくりと、こうしたことが起こってきまし た。パウロは、「眠りからさめるべき時刻がもう来ています。」と言いました。なぜで しょうか。というのは、私たちが信じたころよりも、今は私たちの救いがもっと近づいて いるからです。主の来臨が近づいています。毎日、一日が終わる時に、「今朝よりも、キ リストが戻られる日よりも一日近づいた。」と言うことができます。この今の邪悪な世の 中から私たちを救い出すために、イエスはすぐに来られます。

「眠りからさめるべき時刻がもう来ています。夜はふけて、昼が近づいたからです。」 とパウロは述べています。地上に対する夜の暗闇の支配がもう終わろうとしています。主 の日は間近です。光を拒んだことに対し、主が世をさばかれる日です。どの程度真実なの かは疑問で、真に科学的な観点からは理解できないのですが、夜明け前がいつも最も暗 い、と言います。そのような発言をするために誰がそこまで起きているのか知りません し、夜の暗さをどのようにして測定するのかも分かりませんが、夜明け前にはいつも最も 暗い、と言うのを聞いたことがあります。私たちが人間の歴史の中で最も暗い時に住んで いることが、私には分かります。悪が、突如として世を侵略したのではありません。悪は 常にこの世に存在してきました。神は、ノアの時代にさばきを下されました。それは、人 の心に計ることがみな、いつも悪いことだけに傾いたからでした(創世6:5参照)。ですか ら、私たちが大きな悪を知っている、ということではありません。悪は、常に存在してき ました。悪は常にありました。罪、悪は、何も新しいものではありません。しかし、今日 ほど利用の可能性が高くなったことはありませんでした。かつて、ポルノ雑誌を、カウン ターの後ろに隠していました。茶色の包み紙で包んでいました(訳者注:いわゆるビニ本 のこと。)。しかし、今日はカウンターの前に丸見えになっています。悪が優勢であるだけ でなく、人の心を汚染し、人の心に計ることがいつも悪いことだけに傾く原因となるもの をいとも簡単に入手することができるのです。ビデオを通じて、また、無論現在はインタ ーネットを通じて、悪を利用する可能性が提供されています。ですから、自分の家にいな がらにして、このようなものを持ち込むことができるのです。座って、このようなものを 見たら、あなたの心が汚されます。暗いのです。夜はふけて、神のさばきの日が間近とな りました。

これに照らして、私は何をすべきなのでしょうか。まずパウロは、「やみのわざを打ち捨てなさい」と述べています。もし、ポルノの蜘蛛の巣にひっ掛かってしまっているな

ら、ポルノがあなたを捕らえて、このようなものがあなたの心を汚しているなら、やみの わざを打ち捨てなさい。家に帰って、もし、このようなポルノ雑誌が一冊でもあるなら、 捨ててしまうことをお勧めします。ポルノ・ビデオが一巻でもあるなら、破壊処分にして しまいなさい。誰か他の人にあげるようなことはしないで下さい。破壊処分にしてしまい なさい。そのような汚れで、他の人を破滅させるようなことをすべきではありません。も し、インターネットにアクセスできるのであれば、何とかブロックをかけるようにして下 さい。あなたのインターネットにそのようなものが載りさえしないようにして下さい。や みのわざを打ち捨てなさい。破壊的なものに対処する時には、場合によっては、思い切っ た措置が必要な場合もあります。そして、私たちは光の武具を着けるようにと教えられて います。パウロがエペソ人に手紙を書いた時、私たちが直中にいるこの霊的な戦いについ て語りました。「神のすべての武具を身に着ける必要がある。(エペソ6:11参照)」とパウ 口は言いました。ここローマ人への手紙では、光の武具を着けるように、と言っていま す。エペソ人への手紙6章で、パウロは、光の武具とは何かを説明しています。パウロは 言いました。「ですから、邪悪な日に際して対抗できるように、また、いっさいを成し遂 げて、堅く立つことができるように、神のすべての武具をとりなさい。では、しっかりと 立ちなさい。腰には真理の帯を締め、胸には正義の胸当てを着け、足には平和の福音の備 えをはきなさい。これらすべてのものの上に、信仰の大盾を取りなさい。それによって、 悪い者が放つ火矢を、みな消すことができます。救いのかぶとをかぶり、また御霊の与え る剣である、神のことばを受け取りなさい。すべての祈りと願いを用いて、どんなときに も御霊によって祈りなさい。(エペソ6:13-18)」私たちの防御は何ですか。それは、真理、 正義、平和の福音、信仰、救い、神のみことばです。私の回りにある世の悪から自分を防 御するために、着ける必要、持つ必要のあるものは、これらのものです。真理に歩み、義 に歩み、神とそのみことばを信じ、信頼しなければなりません。

パウロは最後に、「主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけ ません。」と言っています。あなたの生活は、肉か霊かのどちらかに支配されます。肉に 属することに、僅かでも心の門戸を開くようなことがあれば、肉欲が自分に押し寄せ、圧 倒することが分かります。私たちはあえて、肉や肉欲にふけることに心の門戸を開くこと はしません。パウロは、肉を、「遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみ」と定義してい ます。あなたの生活に、これらのものが入り込む場を一切設けてはならず、そのようなも のは、打ち捨てなければいけません。そして、主イエス・キリストを着なさい。肉の欲の ために心を用いてはいけません。何事でも、あなたの思いに植え付けられたものを、刈り 取ることになります。聖書は、「人が種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。 (ガラテヤ6:7)」と語っています。これら肉に属することを思いに植え付けると、「肉か ら滅びを刈り取り」ます、とパウロは言っています。けれども、「御霊に蒔く者は、御霊 から永遠のいのちを刈り取るのです。(ガラテヤ6:8)」とあります。今週あなたはどれだ け、御霊のために蒔いたものと比べて肉のために、自分の思いに蒔きましたか。神のみこ とばや神の御霊に属することと比べて、今週どれだけ世のくだらない物を植え付けました か。多くの人が今日、霊的な生活を持つことに困難をおぼえると不平を言いますが、それ は当然のことです。自分の肉のために蒔いて、御霊のことを刈り取ることはできないので す。人は、蒔いたものを刈り取ります。ですから、肉の欲のために心を用いてはいけませ ん。ローマ8章でパウロは、「肉の思いは死であり、御霊による思いは、いのちと喜びと 平安です。(8:6参照) 」と教えました。眠りからさめなさい。私たちは、その時を知ってい ます。眠りからさめるべき時刻がもう来ています。なぜなら、主の到来は目の前に近づい ているからです。もう、やみのわざを打ち捨てるべき時です。光の武具を着け、肉の欲に 心を用いず、主キリスト・イエスを着けなさい。この終りの時に、御霊に属することに

従って生き、歩みましょう。目ざめましょう。私たちはもう十分眠ってきました。

ローマ人への手紙 | 4章 (| 2/| 5/96) 「すべてのひざは、ひざまずく」(Romans14:10) ローマ人への手紙 | 4章 | 0節 #8644 交読文:詩篇22篇

私たちは、創世記から黙示録までの聖書通読の学びにおいて、ローマ書の14章まで来ました。今朝は、ローマ人への手紙14章10節から13節までを注目してください。今晩この章全体を学びますので、私たちといっしょに、最初から最後まで聖書を学んでいきましょう。

10節において、パウロはこう尋ねています。「それなのに、なぜ、あなたは自分の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟をあなどるのですか。私たちはみな、キリストのさばきの座に立つようになるからです(訳者注:欽定訳では、the judgement seat of Christとなっている)。次のように書かれているからです。『主は言われる。わたしは生きている。すべてのひざは、わたしたちの前にひざまずき、すべての舌は、神に告白する(新改訳脚注参照)。』こういうわけですから、私たちは、おのおの自分のことを神の御前に申し開きすることになります。」

1 1 節でパウロは、「次のように書かれているからです。『主は言われる。わたしは生 きている。すべてのひざは、わたしたちの前にひざまずき』」と言っています。彼は、イ ザヤ書45章からこれを引用しています。この預言者は神について、「わたしは自分にか けて誓った。わたしの口から出ることばは正しく、取り消すことはできない。すべてのひ ざはわたしに向かってかがみ、すべての舌は告白し(あるいは誓い) (イザヤ45:23)」と宣 告しています。人が自分の言うことを確証したいとき、それを誓いによって確証すること がよくあると聖書は語っています(ヘブル6:16参照)。しかし、誓いをするとき、自分より もすぐれたものをさして誓います。ですから、「私の母の尊厳にかけて、これは真実で す。」と言います。また、「聖書にかけて誓います。」「神にかけて誓います。」と言い ます。ですから真実を確証するために、自分よりもすぐれたものをさして誓うのです。さ て、神が誓いをお立てになりたいときは、誰にかけて誓うことができるでしょうか。神よ りすぐれた者は誰もいません。けれども神が、「これはどんな疑問も、疑いもない。」 と、事実を強調したり確証したいとき、ご自分にかけて誓われるのです。神より高い位に いる者はいません。ですからイザヤ書において、神は、「わたしは自分にかけて誓った。 わたしの口から出ることばは正しく、取り消すことはできない。」と言われました。つま り、全世界において、絶対に確かだと思うものがあるとしたら、それは神のみことばで す。神がこれは大切だと思われて誓われているのですから、なおさらのことです。そこ で、「わたしは自分にかけて誓った。わたしの口から出ることばは正しく、取り消すこと はできない。すべてのひざはわたしに向かってかがみ、すべての舌は告白する(あるいは 誓う)。」とあるのです。パウロはピリピ人への手紙においても、これと同じ預言に言及 しています。そこでは、イエスのことを教えています。イエスは、「神の御姿であられる 方なのに、神のあり方を捨てることができないとは考えないで、ご自分を無にして、仕え る者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。」これは、受肉、つまりクリスマス です。「キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実 に十字架の死にまでも従われたのです。それゆえ、神はキリストを高く上げて、すべての 名にまさる名をお与えになりました。それは、イエスの御名によって、天にあるもの、地 にあるもの、地の下にあるもののすべてが、ひざをかがめ、すべての口が、『イエス・キ リストは主である。』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。(2:6-11)」です から、ここでもイザヤ書から引用して、「すべての口が、『イエス・キリストは主であ

る。』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」と言っています。

さて、このイザヤの預言と、パウロによる預言の引用は、将来の出来事をさしていま す。パウロは文脈の中で、この出来事をさばきの日と関連させています。14章のこの時 点まで、パウロは、ローマ人たちが他人をさばいていることを責めているような感じで、 彼らに語ってきました。彼は、信仰の弱い人々は菜食主義者になることが多いことを語り ました。この人たちは、肉を食べることに罪意識を持っていました。信仰の強い人々は肉 を食べている、と彼は言いました。けれども、肉を食べる人は食べない人を侮ってはいけ ないし、肉を食べない人は食べる人をさばいてはいけない、と言ったのです。だからパウ 口は、さばいてはいけません、と言っているのです。「あなたはいったいだれなので、他 人のしもべをさばくのですか。しもべが立つのも倒れるのも、その主人の心次第です。(14: 4)」と言いました。つまり、人はあなたに仕えているのではなく、神に仕えているのです、 ということです。あなたは自分の主人に責任を持たなければならず、私は他の人に責任が あるわけでなく、神に責任があるのです。ですからパウロは、「なぜあなたは、他人のし もべをさばくのですか。そのしもべが立つのも倒れるのも、その人自身の主人の心次第で す。なぜなら、主には、彼を立たせることができるからです。」と言いました。それか ら、10節で、パウロは再びこの質問をしています。「それなのに、なぜ、あなたは自分 の兄弟をさばくのですか。また、自分の兄弟を侮るのですか。私たちはみな、キリストの さばきの座に立つようになるのです。」パウロはここで、この(イザヤ書の)預言を引用 しています。「次のように書かれているからです。『主は言われる。わたしは生きてい る。すべてのひざは、わたしの前にひざまずき、すべての舌は、神に告白する。』」

しかし、神への告白とは、どのようなものなのでしょうか。ピリピ人への手紙で、パウ 口はこれが、「イエス・キリストは主である。(ピリピ2:11)」という告白だと話していま す。すべての人が、この告白をしたわけでないことは明白です。大勢の人が、イエスが主 であると一度たりとも告白せずに生涯をおくり、死んでいきました。あなたも、この告白 をしたことが一度もないかもしれません。自分の人生の主としてイエスを受け入れたこと がないかもしれません。そのため、自分の道を歩んできました。自分の人生を歩み、イエ ス・キリストの支配に自分の人生をゆだねるつもりがないかもしれません。しかし、あな たがそうする時が来ます。その日が来ます。太鼓判を押します。神が、ご自分にかけて誓 われたからです。神の口から出ることばは、取り消されません。すべてのひざはわたしに 向かってかがみ、すべての舌は神に告白します。ヨハネは、黙示録20章において、さば きの日に人が神の御前に立ち、さばかれることを述べています。そしてヨハネは、こう言 いました。「私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見 た。そして、数々の書物が開かれた。・・死んだ人々は、これらの書物に書きしされてい るところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。(12節) 」あなたが神の御前に立 ち、強いられてイエス・キリストが主であることを認めなければならない日が来ます。そ の悲劇は、この日まで(告白するのを)待てば、それは救いに至る告白ではなく、断罪に 至る告白であることです。

パウロは10章において、「もしあなたの口でイエスを主と告白し、あなたの心で神はイエスを死者の中からよみがえらせてくださったと信じるなら、あなたは救われるからです。(9節)」と言いました。もし今、この告白をするなら、・・・無論これは真実の告白でなければいけません。大ぜいの人がイエスを主と告白しますが、イエスが彼らの主ではないことは、その人たちの生活に示されています。イエスとそのみこころに従っていないのです。依然として肉に従って歩んでいるので、それは無意味な告白になっています。イエスはこう言われました。「その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。(Lord,Lord)』と。しかし、わたしは彼らにこう言います。『わたしはあなたがたを全然

知らない。』(マタイ7:22、23参照)」また、10人の娘たちの話をされました。「その うち5人は賢く、5人は愚かであった。愚かな娘たちが、油を買いに行くと、主が来た。 そして戸はしめられた。彼女たちは来て、『ご主人さま、ご主人さま(Lord,Lord)、あけてく ださい。』と言った。しかし、彼は、『確かなところ、私はあなたがたを知りません。』 と言った。(マタイ25:1-13参照)」イエスは、「なぜ、わたしを『主よ、主よ。』と呼び ながら、わたしの言うことを行なわないのですか。(ルカ6:46)」と言われました。イエス はそこには矛盾があることを示されましたが、それでも人は、矛盾したことを行なうので す。イエスが主であると告白した人は大ぜいいますが、本当の告白ではありませんでし た。もしこれが真の告白であれば、変えられた生活によって、そのことがはっきりと示さ れます。これはただ単に、「はい、イエスさま。あなたが私の主です。」と言うことでは ありません。そうではなく、この方に従順に仕えることに、あなたの人生と生活を本当に 服従させることなのです。この方が自分の生活において主であることは、自分がどう生活 するかによって示されます。さて、イエスが主であると、今、告白することは、あなたが 救われたことを意味します。また、さばきの日には、イエスがあなたに、あなたはわたし のしもべである、と告白されることを意味します。イエスは、「あなたがたが、わたしを 人の前で告白するのなら、わたしも、父の前であなたがたを告白します。しかし、人の前 でわたしを知らないと言うなら、わたしもわたしの父の前で、そんな者は知らないと言い ます。 (訳者注:マタイ10:32、33参照 欽定訳では、「認める」の部分が「告白する (confess) 」となっている。)」と言われます。

さてパウロはここで、「私たちはおのおの自分のことを神の御前に申し開きすることに なります。」と教えています。いつの日か、私たちはみな、私たちの生きてきた人生につ いて、神に申し開きをします。死によって存在がなくなると考えることは、間違いであり 愚かなことです。聖書は、「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定 まっている(ヘブル9:27)」と言っています。死は決して終りではないのです。私たちはみ な、さばきの座に出頭しなければいけません。私たちはみな、おのおの自分のことを神に 申し開きすることになります。さて、さばきには二つあります。ひとつは、神のさばきの 座であり、その前には罪人が立ちます。ヨハネが黙示録20章で説明していますが、次の とおりです。「私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを 見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、い のちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしされているところに従って、自 分の行ないに応じてさばかれた。海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中に いる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに応じてさばかれた。(黙示20: 12、13)」「人間には、一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている」ので す。死んだら終りになるのではありません。神のさばきの座についての主な問題は、あな たがたはなぜ、自分の主としてイエス・キリストに従わなかったのかです。ある日、彼ら (群衆)はイエスのことろに来てこう言いました。「私たちは、神のわざを行なうため に、何をすべきでしょうか。」イエスは言われました。「あなたがたが、神か遣わした者 を信じること、これが神のわざです。(ヨハネ6:28、29)」ですから、私たちを罪から救わ れる神から遣わされた方を信じるか、信じないかという、行ないによってさばかれます。 イエスは言われました(新改訳3:15脚注参照)。「神がわたしを遣わされたのは、世をさば く(condemn)ためではなく、わたしによって世が救われるためです。わたしを信じる者はさ ばかれません。(ヨハネ3:17、18参照)」パウロは、「こういうわけで、今は、キリス ト・イエスにある者が罪に定められること(condemnation)は決してありません。(ローマ8: 1)」と言いました。ですから、神のさばきの座に立つことになれば、ただ一つの事しか問題 になりません。あなたが行なったあらゆるひどい事は、そこでは真の問題になりません。

これらすべての事を赦すための神の備えをなぜ受け入れなかったのか、ということが問題になります。なぜイエスが主であると告白しなかったのか。イエスが自分の人生の主となるように、なぜしなかったのか、ということです。

すばらしいことに、もし今イエスが主であると告白すれば、あなたが過去に犯した過ち の記録が、すべてぬぐい去られます。「だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新 しく造られた者です。(2コリント5:17) 」記録が消去されるという、きよめがあります。そ れは、あなたがイエス・キリストは主です、と告白した瞬間にあります。しかし、それに もまさってすばらしいことは、新たな告発がなされることがないことです。ダビデは言い ました。「幸いなことよ。罪を赦された人は。幸いなことよ。そのそむきを赦された人 は。」彼はさらに一歩つっこんで、こう言っています。「幸いなことよ。主が、咎をお認 めにならない人は。(詩篇30:1、2参照)」神は、イエスの支配にいのちを従わせた私た ちに対して、もはや罪を認めておられません。だからといって、私が罪を犯さないという ことではありません。ヨハネは信者に、「もし、罪はないと言うなら、私たちは自分を欺 いており、真理は私たちのうちにありません。(1ヨハネヿ:8) 」と書いています。もし今 朝、ひとりの人が立って、「罪を犯したことなんて、全くないよ。」と罪が全くなく完璧 だと告白するなら、私たちはみな、その人が自分を欺いていることがわかります。私たち はみな、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができません(ローマ3:23参照)。し かし、罪を犯すことは、自分の生活で習慣になっていません。もはや、ことさらに罪を犯 し続けて生きていません。確かに、私は的をはずしました(訳者注:これが、原語の 「罪」の意味)。完全からは、ほど遠く離れています(訳者注:その「的」は、完全である こと)。けれども、的に当てようとしています。神が願っておられるようにしようとして います。この方を自分の生涯の主として告白し、この方が要求されること、願われている ことを行なおうとしています。神に従いたいと願っています。この方に常に完全には従っ ていないかもしれませんが、神は私の心をご存じです。神を私の主として認めています。 したがって、神はこの者の失敗の記録をさえ残しておられません。「こういうわけで、今 は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。(ローマ8:1)」 記録はないのです。神は、サンタクロースのようにリストを持っていて、それを二度確か めるようなことはなさりません。神は、そのようなリストを投げ捨てられました。これ が、イエスが自分の主であると告白することの祝福です。それは、イエスにある新しいい のちであり、この方に従う生活です。ヨハネは、その第一の書簡の中でこう教えていま す。「神によって生まれた者はだれも罪の中に生きないことを、私たちは知っています。 神から生まれた方が」イエスのことです。この方が、「彼を守っていてくださるので、悪 い者は彼に触れることができないのです。(1ヨハネ5:18)」イエスはこう約束されました。 「父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに来ます。そしてわたしのところ に来る者を、わたしは決して捨てません。(ヨハネ6:37)」こうも言われました。「父が下 さったものはもの、わたしのものです。彼らは決して滅びることがありません。(ヨハネ 16:15、10:28参照)」ヨハネは言いました。「私の子どもたち。私がこれらのことを書き 送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。もし私たちが罪を犯したな ら、私たちには御父の御前で弁護してくださる方がいます。それは、義なるイエス・キリ ストです。この方こそ、私たちの罪のための、なだめの供え物なのです。(1ヨハネ2:1、2 参照)」

私たちそれぞれの将来がどうなるかについて基本的なことを言うと、まず最初に死があります。ものすごい統計ですが、一人のうち一人が死んでいます。100パーセントです。ですから、遅かれ早かれ私たちはみな死にます。けれども、それで終りではありません。死後にさばきがあります。もしあなたが神の子どもであるならば、あなたが受けるさ

ばきは、キリストのさばきの座の御前におけるものです。そこで、神に対する奉仕につい て自分のことを申し開きします。そして、あなたの行ないは、神の聖と義の火によってさ ばかれます。あなたが主のために行なったことは、うわべは主のためでも誤った動機で行 なわれたものがあります。そうした行ないは、煙とともに消えてしまいます。そのような ものには報酬がありません。イエスは言われました。「人に見せるために人前で善行をし ないように気をつけなさい。あなたがたに告げます。あなたがたはすでに自分の報いを受 け取っているのです。(マタイ6:1、2参照)」あなたの動機が、人が、「おい、あれ見た か。彼は何てすばらしいのだろうか。実に高潔だ。彼は本当にすごい。」などというもの にならないように、気をつけてください。「ああ、何てすごいのだろうか。ウーン。」と いうふうに、自分に注意を引くようなこともできうるのです。それには注意してくださ い。なぜなら、人の思いの中であなたが引き上げられ、高められ、拝まれるようなことが 動機になっているなら、イエスは、「あなたはすでに自分の報いを受け取っているので す。」と言われているからです。どのような種類かによって、私たちの行ないはさばかれ ます。さて、私たちが御前に立つキリストのさばきの座は、オリンピックの審判員の席の ようなものです。ある人が競走をして入賞したら、審判員が立つ所の前に来きます。そこ で、審判員は、金メダルや銀メダルや銅メダルを与えます。自分の走った競技にしたがっ て報いを受け取ります。私たちの主イエス・キリストの御前に立つときも、これと同じで す。私たちが走った競技にしたがって、報酬をお与えになります。イエスは、彼らに、 「さあ、わたしの父に祝福された人たち。世の初めから、あなたがたのために備えられた 御国を継ぎなさい。(マタイ25:34)」と言います、とおっしゃっています。また、「よく やった。良い忠実なしもべだ。主人の喜びをともに喜んでくれ。(マタイ25:21等参照)」 と言われます。これら(のことば)は、イエス・キリストが自分の主であると真実をもっ て告白をした人たちのためのものです。

しかし、告白をしなかった人たち、また、イエスに自分の人生を支配していただくよう に、自分自身をゆだねなかった人たちのためのものではありません。彼らは、神のさばき の座の御前に立つのです。報酬を受け取るためではなく、有罪の宣告を受けるためです。 その人たちは、神が人の罪を赦される唯一のご計画を拒んだからです。その時点で、あな たは、イエス・キリストが主であることを認めます。その時ひざをかがめます。こう書か れているからです。「すべてが、ひざをかがめ、すべての口が、『イエス・キリストは主 である。』と告白して、父なる神がほめたたえられるためです。」神は、自分にかけて 誓った、と言われたのです。わたしは、このことが起こると自分にかけて誓う、と言われ たのです。全宇宙の中で、この地上でのいのちの後に来る神のさばきほど、確かなものは ありません。それゆえ、私たちは人に、イエス・キリストに従う人生を生きるように、こ の方を人生の主としていくように説得し、また説得しようとしているのです。そのこと は、言葉だけではなく、実際の行ないをともなっていなければいけません。イエスが主で あることは、その人の生きざまによってはっきりと示されます。自分の罪が罰せられるた めに神の御前に立ち、「はい、確かにこの方が主です。」と強いられて告白するような時 まで待たないで、むしろ、今、ひざをかがめて、今、イエスキリストが主であると告白し てください。好むと好まざるにかかわらず、いつの日か、早かれ遅かれ、「イエス・キリ ストは主である。」という告白をするのです。けれども、後になって告白するよりも、早 く告白した方がはるかによいのです。

ローマ人への手紙 15章 (12/22/96)

「望みと平和の神」(Romans15:13)

ローマ人への手紙 15章 13節 #8645 交読文: イザヤ書 11章 1-10節

私たちは聖書通読の学びをしていますが、ローマ書 1 5 章まで来ました。今夜の準備のために読み返すときに、神の三つのご人格が何回言及されているか気づいてください。御父、御子、聖霊が、同じ節に出てくることが何回もあります。また、これは上級生用ですが、まれるでで、イエスが私もよの標節にして言及されています。パウロがイエスを私もな

父、御子、聖霊が、同じ節に出てくることが何回もあります。また、これは上級生用ですが、数カ所で、イエスが私たちの模範として言及されています。パウロがイエスを私たちの模範として言及している部分が二箇所あるので見つけてみてください。この章において、パウロは、4つの個所で、神が私たちにとってどのような方であるかを告げています。これを、今朝見ていきたいと思います。5節と13節と33節です。パウロは、神が私たちにとってどのような方であるか告げています。

まず最初に5節ですが、パウロは、「忍耐の神」だと述べています。神が罪深い人間に 対して、反抗している人間に対して、なんと忍耐深い方であるか私はいつも驚かされま す。もし私が神だったら、きっと、とっくの昔に人間を一掃していたことでしょう。神は 実に忍耐深い方です。神は、人間が反抗するのを許されました。神は、人間がご自分の御 名を冒涜するのを許されました。神は、人間がご自分に公然と反抗するのを許されまし た。それなのに、神はこんなにも忍耐し続けてくださっています。私は、神が自分に対し てなんと忍耐しておられるのかと考えます。神の忍耐深さには、私の忍耐は及びもしませ ん。それなのに、神は私のつまづきを我慢してくださり、私の理解がとろいことを我慢し てくださっています。そして、穏やかに優しく私を導いてくださいます。本当に忍耐深い イエスが弟子たちに示された忍耐によって、私は本当に慰められます。3年半 の間彼らとともにおられて、イエスが彼らから離れようとされたときに、もしあなたがイ エスなら、もうその時までには、彼らがイエスが教えておられる意味を理解できるぐらい 進歩しているだろうと思ったことでしょう。けれども、まさにユダがイエスを裏切った夜 に、実はユダが出て行って、裏切りの行為をしていたその時に、ピリポが、「私たちに父 を見せてください。そうすれば満足します。」と言いました。イエスは言われました。 「ピリポ。こんなに長い間あなたがたといっしょにいるのに、あなたはわたしを知らな かったのですか。わたしを見た者は、父を見たのですよ。どうしてあなたは、『私たちに 父を見せてください。』と言うのですか。わたしが父におり、父がわたしにおられるとわ たしが言うのを信じなさい。さもなければ、わざによって信じなさい。(訳者注:ここま でヨハネ14:8、9、1 1 参照) 」イエスは実に忍耐しておられたのです。私なら、こう言っ たと思います。「ピリポ、いい加減にしろよ。もう3年半もたっているのに、わかってな いのか。お前、おかしいんじゃないのか!」しかし、イエスは、じっと忍耐されていたの です。とても優しいお方でした。

イエスは繰り返し、弟子たちに、ご自分が異邦人に引き渡され、彼らが十字架につけるが、三日目によみがえられることを教えられました(マタイ20:19参照)。このことを何回か、弟子たちに話されました。十字架の出来事があって三日目に、ふたりの弟子がエマオに行く途中でした。私たちは、疑い深いトマスの話しはよく聞きます。彼は、疑ったのでかなりの批判を受けました。トマスは、「私は自分で見ない限り、決して信じない。(ヨハネ20:25参照)」と言いました。けれども、エマオに行く途中の二人の弟子も、疑い深い人たちでした。イエスが死んでから三日間たっており、ふたりがエマオに向かって歩いているとき、彼らはしょげていました。互いに話しているときは、伏し目がちでした。歩きながら小道の石をけり、しょげこんでがっかりした様子が想像できます。イエスは、名を

名乗らずに彼らといっしょに歩き始められました。そして、「ふたりとも、どうしたと言うのですか。とても悲しそうな顔付きですよ。どうしたのですか。」と言われました。「あなたは、地元の人間じゃありませんね。ここ2、3日にエルサレムで起こったことを知らないのですか。」イエスは、「どんな事ですか。何についてですか。」とおっしゃいました。「ナザレ人イエスのことです。この方は、しるしにも行ないにも不思議にも力のある人でした。あらゆる病気をいやされ、善い行ないをしてあちこちを行きめぐっておられました。私たちは、この方がイスラエルの救いであると、望みをかけていました。けれども、彼らはこの方を十字架につけたのです。その事があってからもう三日目になります。女たちの一部は朝早く墓に行って、墓が空で、イエスを見たとさえ話していたのです。まあ、女はヒステリックになって、興奮するから・・。」「ああ、預言者たちの言ったすべてを信じない、心の鈍い人たち。」とイエスは言われました。それから、イエスは聖書の創世記および預言者からはじめて、メシヤが苦しみを受け、そのいのちを与えられることを取り扱っているすべての聖書の個所を示されました。(以上ルカ24章参照)

ユダヤ人には大きな問題がありました。それは、メシヤに関する預言の中には、一見か なり異なる預言があったからです。ある預言は、全体がメシヤの栄光に輝いた統治につい て語っているものもあります。世界を支配し、戦争を終了させ、正義と平和によって永遠 に支配されることに関するものです。それから、また他の一連の預言では、メシヤは人に さげすまれ、のけ者にされる、とあります。悲しみの人で、病を知っていました。また、 十字架につけられます。顔につばきをかけられます。ひげがむし取られます。ほおを打た れます。そして、メシヤは多くの人の罪を負われます。ユダヤ人は、一見異なる預言を一 つのものとして受け止めることができませんでした。どうすれば、王として支配し、かつ 十字架につけられるのだろうか、と。一つのものとして受け止めることができなかったの で、彼らはメシヤの苦難と拒絶と死に関する預言を霊的に解釈しました。「これは、本当 の意味ではなくて、霊的なたとえである。」と言いました。それで彼らは、それらを類推 して霊的に解釈して、そこにある意味を取り去ってしまいました。メシヤが正義によって 栄光に輝いた世界の支配する預言だけを信じていました。メシヤが来られて支配されると き、動物の世界にさえ平和が及ぶイザヤ書の預言を私たちは今日読みましたが、そのよう なものだけを信じていました。その結果、メシヤが来られたとき、彼らはこの方をさげす み、のけ者にしました。この方を十字架につけました。けれども、その十字架の上で、預 言にあるとおりに、メシヤは彼らの罪を負われていたのです。イザヤが言ったように、 「私たちはみな、羊のようにさまよい、おのおの、自分かってな道に向かって行った。し かし、主は、私たちすべての咎を彼に負わせた。(イザヤ53:6)」のです。神は、預言者を 通して叫ばれました。「彼がわたしの民の罪のために殺された。(イザヤ53:8) 」忍耐の神 です。イエスは、実に忍耐深く、疑い深い弟子たちにふるまわれました。

忍耐の神です。神が、アダムが罪を犯したときにアダムに与えられた預言を成就されるために、何と長く待たれたのかと私は考えます。神は、女の子孫(seed)が蛇の頭を(訳者注:英語では「蛇のかかと」となっているが、蛇の頭のことか。)を踏み砕く日が来ることを約束されました(創世2:15参照)。この蛇は、エバが禁断の実を食べるように欺きました。これは、処女降誕の預言です。なぜなら、女には精子(seed)がないからです。女の持っているのは卵子です。ですから、女の子孫(つまり精子)が蛇の頭を踏み砕くと告げることは、実はメシヤの処女降誕の預言なのです。人間がこのことが分からない場合に備えて、何年も後に、預言者イザヤは、はっきりと告げました。「神が、あなたがたに一つのしるしを与えられる。処女がみごもっている。そして、男の子を産み、その名を『インマヌエル』と名づける。(訳すと、神は私たちとともにおられる、という意味である。)(イザヤ7:14、マタイ1:23参照)」神がアダムに約束を与えられてから4000年後

に、肉体的にどうかはわかりませんが、霊的に美しいおとめが、ナザレに住んでいました。主の御使いが彼女のところに来ました。それは、実はガブリエルでした。そしてこう言いました。「神は、あなたを人間の器としてお選びになりました。それは、世界にご自分の子をもたらすためです。その子は、すぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、彼はその父ダビデの王位につきます。」彼女は、「どうしてそのようなことになりえましょう。私は処女なのです。」と言いました。御使いは言いました。「神の力があなたの上に臨み、あなたをおおいます。それゆえ、生まれてくる聖なる者は、神の子と呼ばれます。(以上ルカ1章参照)」4000年間、神は預言を成就されるまで、ずっと忍耐されていたのです。私は、神の忍耐に驚くばかりです。

神は、忍耐の神であられるだけでなく、パウロは、5節で、この方が慰めの神であるこ とを話しています(口語訳15:4参照)。悲しみと絶望の中にいるとき、慰めを与えられる方 です。マタイはイエスの宣教の始まりを記したさい、イザヤの預言を引用しています。 「暗やみの中に座っていた民は偉大な光を見、死の場所にすわっていた人々に、光が上っ た。(4:16参照)」暗やみの中に座っていた民、絶望の中にいた民です。この民に神の光が 来ました。イエスがマリヤからお生まれになったとき、ヨセフとマリヤはこの子を主にさ さげるために、また、律法にしたがって男子の初子に必要なささげものをするために、宮 にこの子を連れてきました。エルサレムに、シメオンという人がいました。彼はかなり老 年になっていました。しかし、神が与えられた約束を信じていました。神はシメオンにこ う言われていたのです。「シメオン。あなたは、メシヤを見るまでは、決して死なな い。」そこで、マリヤとヨセフが宮に来たと同時に、神の御霊がシメオンを宮に行くよう に導きました。シメオンは、幼子のイエスを見たとき、イエスを自分の腕で抱き上げてこ う言いました。「ああ、わたしの父よ。あなたのしもべを、安らかに去らせてくださいま す。私の目があなたの御救いを見たからです。」実は、シメオンがイスラエルの慰めを待 ち望んでいたことが教えられています。彼はマリヤに生まれたその幼子を見て、イスラエ ルの慰めを見ました(以上ルカ2:22以降参照)。パウロはこう言いました。「私たちの主 イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますよう に。神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私た ちも、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。それは、私たちに キリストの苦難があふれているように、慰めもまたキリストによってあふれているからで す。(2コリント1:3-5参照)」慰めの神、あるいは励ましの神です。イザヤは、メシヤにつ いてこう預言しました。「神の霊がわたしの上にある。主はわたしに油をそそぎ、貧しい 者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、・・捕らわれ人には解放を、囚 人には釈放を告げ、・・すべて悲しむ者を慰め、シオンの悲しむ者たちに、灰の代わりに 頭の飾りを、悲しみの代わりに喜びの油を、憂いの心の代わりに賛美の外套を着けさせる ためである。(イザヤ61:1-3) 」灰の代わりに頭の飾りを与えられる、慰めの神です。私た ちには、自分の生活がめちゃくちゃになっているような時があります。灰しか残っていま せん。けれども、神が来て、灰の代わりに頭の飾りを与えてくださいます。悲しみの代わ りに喜びの油を与えられます。慰めの神です。

それから13節には、パウロは、神が望みの神であると言及しています。「望みの神が、・・すべての喜びと平和をもって満たし、」と言いました。望みは、生き残りのための大切な要素です。心理学者は、望みが生き残りのためにいかに大切であるかを判断するために、ノルウェーのドブネズミ(wharf rat)を使って実験をしました。心理学者が、なぜ人間の行動様式を理解するためにラット(ネズミ)を研究するのか、私にはよくわかりません。心理学と社会学の教科書全体を通じて、どこかしらに何かしらのラット(ネズミ)の実験がのっているようです。それによって、人間の行動様式を学ぼうとしています。たぶ

ん、私たちの知らないことを彼らは知っているのでしょう。けれども、ノルウェーのドブミネズミを使った研究では、大きなおけの水の中にネズミを入れて、このネズミに絶えず水のスプレーをかけました。それは、ネズミが寝返りを打って浮かぶことのないようにするためでした。もし寝返りを打って浮かぶなら、鼻から水が入るからです。ですから、スプレーで水を絶えずかけることによって、ネズミはこの水おけの中で、できるかぎり生き延びなければなりません。ネズミは、平均17分で溺れ死ぬことがわかりました。対照群おいて、実験には常に対照群がなければいけませんが、対照群において、ねずみが溺れ死にそうになっているとき、ちょうど溺れそうになっているとき、ネズミを水から引き出して、水を拭いてやり、再びかごに入れて、数日間えさを与えて、また、同じ条件の下で再び水おけに入れました。溺死から助け出されたこれらのネズミは、溺死するまでに平均37時間生き延びました。17分と37時間の大きな違いを彼らは、ネズミが新たに生まれたことにあるとしています(訳者注:聖書の「新生(born again)」と同じ言葉)。ネズミは、死から救い出されたことで、再び救い出されるはるかに強い望みを与えられたのです。したがって、彼らは生き続けることができたのです。一度救助されたので、再び救助されるのを待ち続けたのです。人が望みを持つ場合には、ものすごい生残能力を発揮します。

すばらしいことに、この方は望みの神です。神は、私たちに希望を与えられました。滅 びつつある世界において、罪によって破滅しつつある世界において、私たちは生き残りま す。生き残る以上に、私たちは栄えます。神が約束された将来についてのすばらしい望み があるからです。メシヤが再臨されて、地上にご自分の御国を立てられて、人は剣と槍を 用いるのを止め、それらを鋤やかまに打ち直します(ヨエル3:10参照)。小羊と獅子がとも に宿し、子どもは安全の中で遊んでいます(イザヤ11:6-8参照)。もはや痛みも罪もなく、 奇形の体はなくなり、病もなくなり、人間が反抗する前に、神が初めに考えておられた完 全な世界に住むことになります。喜びと平和をもたらす、すばらしい望みです。パウロ が、望みを平和と関連させていることに注目してください。「望みの神が、・・喜びと平 和をもって満たし」です。イスラエルの国は、約束のメシヤを待ち望んでいました。神 は、この約束を守られました。メシヤは来られたのです。私たちも、約束のメシヤを待ち 望んでいます。メシヤの再臨です。イエスは言われました。「あなたがたは心を騒がせて はなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には、住まいがたく さんあります。もしなかったら、あなたがたに行っておいたでしょう。あなたがたのため に、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、 また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいるところに、あなたがたを もおらせるためです。(ヨハネ14:1-3)」イエスが昇天されたとき、弟子たちが天を見つめ ていると、御使いがそばに立っていました。そして、こう言いました。「ガリラヤの人た ち。なぜ天を見上げて立っているのですか。この同じイエスは、天に上って行かれるのを あなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。(使徒1:11参照)」「見 よ、彼が来られる。すべての目が、彼を見る。(黙示1:7参照) 」ともあります。そうで す。私たちは、メシヤであるイエス・キリストの再臨を待ち望んでいます。私たちは、忍 耐をもって待っています。ヤコブは言いました。「こういうわけですから、兄弟たち。主 が来られる時まで耐え忍びなさい。見なさい。農夫は、大地の貴重な実りを、・・耐え忍 んで待っています。(ヤコブ5:7)」パウロは、「望みの神が、あなたがたを喜びと平和を もって満たされる」と言ってほめたたえました。興味深いことに、ユダヤのベツレヘムで イエスがお生まれになったとき、御使いたちが羊飼いたちにメシヤの誕生を報告して、こ う言いました。「今、私はすばらしい喜びを知らせ(good tiding)に来たのです。(ルカ2: 10参照)」羊飼いたちは、その約束を待ち望んでいました。御使いたちは、約束が成就し

たと言ったのです。「私はすばらしい喜びを知らせに来たのです。」良い知らせ(good tiding)とは福音のことです。私たちが世界に宣べ伝えなければならないのは、喜びの福音です。福音を受け取ることによる効果は、喜びです。けれども、これは私たちの心に平和をもたらす喜びです。また、御使いたちは羊飼いにこう報告しました。「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に平和が、御心にかなう人々にあるように。(ルカ2:14)」

そして、33節には、神は、「平和の神」と呼ばれています。「どうか、平和の神が、 あなたがたすべてとともにいてくださいますように。」再び、メシヤに関するイザヤの預 言に戻りますが、イザヤはこう言いました。「ひとりのみどりごが、私たちのために生ま れる。」ベツレヘムでお生まれになった、みどりごのキリストのことです。「ひとりの男 の子が、私たちに与えられる。」神は、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛さ れました。「主権はその肩にあり、その名は、『不思議な助言者、力ある神、永遠の父、 平和の君』と呼ばれる。その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に着 いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これをささえる。今よ り、とこしえまで。(イザヤ9:6-7)」イエスは平和の使命をもって、神から遣わされて地上 に来られました。園において、人間は、神のおきてに逆らうことによって神に宣戦布告を しました。神は、「あの木からは取って食べてはならない。(創世2:17参照)」とおっ しゃったのに、彼らは食べました。そうすることによって、彼らは神に宣戦布告をしたの です。しかし、人間はこの戦争の結果、大きな苦しみを味わっています。病、死、痛み、 悲しみ、苦しみは、すべてこの戦争が発端となっています。神がお考えになっていた人間 の生き方は、こうではありませんでした。神は、人間が神と交わりをもって生きることを 考えておられたのです。そこには、悲しみもなく、痛みもなく、死もなく、病もありませ ん。人間は、罪によって、神からどうしようもなく離れてしまいました。しかし、イエス が来られて、平和をもたらされました。神は御子を、平和の使者として遣わされました。 神と平和を持つために、御子は、ご自分の上にあなたの罪と私の罪を負われたのです。そ して、私たちの罪の罰を受けられたのです。聖書は、「罪から来る報酬は死です。(ロー マ6:23)」と告げています。御子は、私のために死んでくださいました。それは、この方の 死によって、私が神との平和を持つためです。5章に戻ると、パウロは、「信仰によって 義と認められた私たちは、イエス・キリストによって、神との平和を持っています。 (ローマ5:1参照)」と述べています。

ですから、この方は、忍耐の神であり、望みと慰めの神であり、平和の神であり、愛の神であり、義の神です。実際、神は、まさにあなたの必要すべてであり、常にあなたが必要としていた方であることがわかるでしょう。これらはすべて、イエス・キリストによって私たちに与えられます。ですから、ベツレヘムでお生まれになったみどりごは、神から遣わされたのです。この方によって、あなたは神との平和を持ち、その結果、将来の望みを持ち、滅びかかっている世界にあって、この同じイエスが、再臨されて神の愛の御国を地上に立てられるのを私たちが耐え忍んで待ちながら、慰めを得ます。けれども、神は私たちの心と生活に、この御国をすでに立てられました。ですから、私たちは、地上で最も祝福された民なのです。それは、神が、イエス・キリストを受け入れた私たちにとって、それらすべてになっておられるからです。これは、神が全人類に与えられたクリスマスの贈り物です。